方正友好交流の会　会報 19 号　2014 年 12 月刊

星火方正

～燎原の火は方正から～

互いに感謝の気持ちをもってこそ　朱 建榮
—方正県「中日友好園林」を訪れて—
『葛根廟事件の証言　草原の惨劇・平和への祈り　』を刊行して　大島 満吉
「方正」と村山談話を未来に　星野 郁夫
日中関係の現状と未来を考える　藤野 文晤
日中問題の深淵に誘う韓慶愈半生記の魅力　石飛 仁
—大類善啓著『ある華僑の戦後日中関係史』を読んで

方正水稲研究院。藤原長作さんが貢献し
方正ブランドとして人気も高い方正の米、その研究の拠点だ

なぜ方正（ほうまさ）なのか？

方正と書けば日本人なら「ほうせい」と呼ぶのが普通だろう。しかし黒龍江省には宝清という県があり、旧満洲にいた日本人たちは、「ほうせい」と呼ぶ場合は宝清を指した。その宝清と区別するために、方正を音訓混じりで敢えて、「ほうまさ」と呼び、今でもそう読んでいる。戦後も彼の地で過ごした人々にとって方正はあくまでも「ほうまさ」なのである。私たちも彼らの思いを受けて、会の名称を「方正（ほうまさ）友好交流の会」とした。

なぜ『星火方正』（せいかほうまさ）なのか？

星火とは、とても小さな火のことである。私たちの活動も今は小さな野火にすぎないが、やがて「燎原の火のように方正から平和と人類愛的な友愛の精神が広まるのだ」という意味を込めて会報の名前にした。

星火方正（第 19 号）　～燎原の火は方正から～

目　次

互いに感謝の気持ちをもってこそ —方正県「中日友好園林」を訪れて—	朱　建榮	1
葛根廟事件の証言　草原の惨劇・平和への祈り —念願の証言集を刊行して—	大島　満吉	6
「方正」と村山談話を未来に	星野　郁夫	10
地域に平和学習の輪をどう広げるか	先崎　千尋	12

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

<歴史実践>の場としての旧満州	今野　日出晴	15

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

日中関係の現状と未来を考える	藤野　文晤	25

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

国境を越えて共に考える旧満州と満蒙開拓」 ～「満蒙開拓国際シンポジウム」を開催～	寺沢　秀文	40
中島多鶴さんを偲ぶ	〃	43
戦争体験を語り継いでいこう	山下　美子	45
敗戦まぢかの満州移民—満蒙開拓平和記念館を訪ねて—	唐沢　修	47
参考　「満蒙開拓」関連記事転載	東京新聞、信濃毎日新聞	48

風雪三十年　見事な果実が枝もたわわ —日本残留孤児養父母連絡会 創立 30 年記念活動の報告—	石　金楷	68
残留孤児を描いた中国映画　『原土深痕』（深い傷跡）	〃	69
いざコンテストへ —記録映画『10 日間だけの祖国』—	奥村　正雄	70
「徐士蘭ドキュメンタリー」制作ウラ話	吉川　雄作	71

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

『ある華僑の戦後日中関係史』を上梓して	大類　善啓	72
日中問題の深淵に誘う韓慶愈半生記の魅力 —大類善啓著『ある華僑の戦後日中関係史』を読んで—	石飛　仁	73
激動の時代を生きた青春譚 —『ある華僑の戦後日中関係史』を読む	森　一彦	77
『ある華僑の戦後日中関係史」（大類善啓著）を読んで	秋岡　榮子	80
参考『ある華僑・・・』の書評など関連記事転載	東京新聞ほか	81

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

山口淑子のこと 「あの時、関東軍は逃げてしまったんですよね」	大類　善啓	85

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

——「方正友好交流の会」へのお誘い——	編集部	88

報告・編集後記

互いに感謝の気持ちをもってこそ

―方正県「中日友好園林」を訪れて―

東洋学園大学教授　朱建榮

「中国で一番うまい方正米」で方正を知る

2010 年 9 月、私は『中国で尊敬される日本人たち』と題する本を中経出版で出した。第 2 次大戦後から 21 世紀初頭までの各時代に中国の大地で活躍し、現地の発展に貢献した日本人を紹介したものだが、本の第 5 章では「現代中国で唯一の日本人記念碑が建てられた藤原長作」という一節を書いた。

藤原氏を取り上げたのは、「方正」というブランドのお米が「日本人が指導して栽培した中国で一番うまい米」との評判を故郷の上海で耳にしたのがきっかけだった。なぜ日本の岩手県で「水稲王」と呼ばれた方が 60 代の後半になってから何年も何度もやってきて、中国の東北地方になかった「早育稀植栽培法」を教え、日本国内にも劣らない米の品種を育成し、現地の農家一人当たりの収入を 9 倍も向上させたのか、その疑問を持ち続けた。

2014 年 8 月、日本華人教授会議訪中団の一員として北京と黒竜江省を訪れたが、予定に入っていなかった方正県の訪問を黒竜江省外事弁公室に要請し、実現した。

方正県に中国唯一の日本人公墓があることを前から聞いており、現代中国でたった一人の日本人すなわち藤原長作氏の記念碑も同じ場所にあると教えられ、現地外事弁公室の方の案内で「中日友好園林」を訪れた。話は前後するが、見学後に立ち寄った園林の中にある資料館に、藤原氏の功績について詳しい紹介があり、それを読んで心の中の謎が解けた。

中国側は民衆から政府に至るまで藤原氏を非常に尊敬し、高く評価していることが分かった。彼が画期的な水稲栽培法を現地に教えたことは 2 年目の 1982 年、さっそく党機関紙『人民日報』に「あふれんばかりの友情」という長編レポートで紹介され、藤原氏の献身的努力が讃えられた。藤原氏は自らの手で育成したこの米の品種を「方正」と名づけた。

83 年 12 月、方正

県人民代表大会常務委員会は彼に「方正県栄誉公民」の称号を贈った。89 年、中国への貢献をたたえる最高の賞「中国国際合作賞」が授与され、国務院副秘書長劉忠徳は中国政府を代表して「あなたが中国に貢献されたことに感謝する」と藤原氏と握手して語った。98 年、彼が亡くなり、遺骨の半分を中国に埋めたいとの遺言に基づいて方正県で墓が作られ、そして「藤原長作記念碑」が建てられた。

中国人の寛大な気持ちに感動した藤原長作

藤原氏は 1980 年、日中友好農業使節団の一員として初めて方正県を訪問した。彼は後に「かつて日本の軍国主義が中国を侵略し、善良な中国人を大勢殺害しました。侵略は罪です。私はこの侵略戦争に参加していませんが、日本人の一人として非常に後ろめたい思いがあります。中国で水稲栽培を教えるのは、一つは中国の建設のために自分の微力を尽くすため、もう一つは日本軍国主義の罪を償いたいからです。この目的のためには喜んで中国の大地にこの老いの身を投げ出します」と米の栽培方法を指導した理由を語った。この話は自分の本でも紹介したが、方正県に来てみて、一般論としての「贖罪意識」だけでなく、ここにある 1963 年に周恩来首相の許可を得て作られた中国唯一の日本人墓地を見て感動し、「中国に恩返ししよう」との気持ちがあったのがその直接的な原因だったのではないかと直感した。

日本帝国主義が中国を侵略した時代、旧満州すなわち中国の東北地方でも数えきれないほどの中国人を殺戮し、方正県からそんなに遠くないところに、悪名高い「731 部隊」の基地があり、中国人の多くはここで秘密裏に生物兵器製造のための実験に使われた。日本から来た「開拓団」は何もないところで開墾したのではなく、現地に住んでいた中国の農家を追い出し、中国人が開墾した土地を奪って「開拓」したのがほとんどだった。だから、戦後になっても現地の住民の間では日本人を恨む感情が根強く存在し、そのため、「何で中国を侵略した日本人のために墓地を作るのか」との反発が強く、終戦当時に中国で命を落とした数千数万の日本人のための安らぎの場所も長く作れなかった。

終戦から十数年たってからの 1963 年、日本側の要請があるが現地では反対論が多く、なかなか決められなかった墓地建設の問題が一国の首相である周恩来の机に上げられた。周恩来首相は決断して建設の許可を与えた。その理由は園林の資料館の壁に掲げられた説明に書かれている。

> 「『方正地区日本人公墓』は周恩来総理の許可を得て現地で命を落とした 5000 人余りの開拓団民のために作った。日本の開拓団は日本軍国主義の中国侵略に利用された道具であり、彼らも侵略戦争の犠牲者だった」

中国があの戦争で数千万人の犠牲者を出したにもかかわらず、その罪をごく少数の「軍国主義者」（靖国神社に合祀された東条英機ら A 級戦犯のこと）に帰し、大半の日本国民に対して、かつて実際に中国での侵略と略奪に加担した一般の日本人を含めて、責任を追及

しない方針を毛沢東、周恩来ら中国の指導者が決定した。それが日本人公墓の建設が許可された根拠にもなった。このいきさつを知った藤原氏の内心に激震と新しい決意が湧いたのであろう。

残留孤児が報恩の心で中国養父母公墓を建立

ちなみに、大半の日本国民をごく一部の軍国主義者から区別する方針は今の中国指導部にも受け継がれている。14 年 9 月 3 日、習近平主席は抗日戦争勝利記念座談会における談話で、「日本が発動した侵略戦争が中国人民にもたらした災難は、日本軍国主義が作りだしたものであり、中国政府と人民が、この責任を日本人民のせいにしたことは一度もない」と強調した。

園林の中で、私は、「方正地区日本人公墓」と「麻山地区日本人公墓」という二つの記念碑（右の写真）を見て、手を合わせた。

そしてそこからあまり離れていないところに、「日本人残留孤児」が建てた「中国人養父母公墓」と養父母の実名を刻んだ記念碑を見た。資料館の説明によると、方正県だけで終戦直後、現地の中国人は 4500 人以上の日本人女性と子供を収容し、そのうちの多くの日本人の子供を成人まで育てた。残留孤児の一人、遠藤勇が 1974 年代に帰国したが、養父母の恩義を忘れず、1995 年、養父母公墓を建てた。

自分の尊敬する宮本雄二元中国駐在大使が現役時代に夫人とともにこ

こを訪れ、中国人養父母と一緒に撮影した記念写真も資料館に陳列されている（前頁左下の写真)。

この園林と記念館を見て、私の脳裏に「美談」という言葉が浮かんだ。中国はここで終戦当時に亡くなった侵略者の国の一般民衆のために公墓を作った。藤原氏はこれを見て、中国のためにおいしいお米を栽培し、恩返しした。現地政府と一般民衆は藤原氏の功績を讃え、中国唯一の日本人記念碑を建てた。そして中国で育てられた日本人の残留孤児も養父母の恩に感謝するため中国養父母公墓をここで建立した。互いに感謝の気持ちを示すものとして、この園林に日中友好のシンボルが生まれたのである。

「中日友好園林」を日中友好促進の新しいバネに

しかし近年、日中関係はどん底に陥り、この 11 月の北京 APEC の際に首脳会談が 2 年半ぶりに行われたことで一縷の光が見えたが、真の改善まではまだ道のりが長い。では方正県に示されたこの「美談」はいつからこじれたのだろうと思った。

やはり 20 世紀の最後の 10 年から 21 世紀初頭にかけて、両国の社会に生じた変化がその背景にあった。中国では経済成長に伴って社会の多様化が進み、ナショナリズムが台頭した。それにのっかった反日感情が両国間で起きた一連の問題に刺激されて高揚した。日本ではこの背景について「中国政府による反日教育の結果」と簡単に決めつける人がいるが、正直に言って、中国政府の国民教育はそれほど成功しておらず、「反日教育」だけが成功したという説は成り立たない。日本軍国主義の中国侵略は多くの中国人にとって「過去」ではなく、まだ現在進行形である。強制連行、従軍慰安婦などの問題は未解決で、旧日本軍が終戦時に中国各地に遺棄した数十万発の化学兵器も未処理のままだ。この社会的な底流の上に、日本では時折、戦争責任を否定する高官の発言が出てきては中国人の怒りを増幅させ、それが社会の多様化、インターネットの急速な発展によるナショナリズムの台頭によって相乗効果が現れ、一時、コントロールを失った。2011 年 8 月、方正県の日本人公墓の石碑に赤ペンキがかけられたのはまさにその極端的な表現だった。

一方、日本社会でもバブル経済の崩壊で内向きの保守化が進み、かつての侵略戦争に対する記憶が風化し、勃興する中国を脅威と見なす雰囲気も蔓延した。それが対中感情の大幅な悪化につながった。ナショナリズムを煽るような日本のマスコミの報道もそのような感情的対立の拡大に拍車をかけた。

その結果、1972 年の国交正常化から 90 年代初頭までの、日中間の友好協力に向かうスパイラルがその後、互いに貶しあうスパイラルに反転してしまったのだ。

ただ、私は、日中間の民間感情が再度好転する時期にそろそろ来ているのではないかと感じる。ここ数年、政府間関係が険悪であるにもかかわらず、中国から日本への観光客はうなぎのぼりに伸び、特に 14 年は前年比で 8 割も伸びたとの統計が出ている。

両国間の真の相互理解、協力関係の構築にはまだ時間がかかるが、習近平・安倍晋三両首脳の北京会談の実現で、さらなる悪化に歯止めをかけた点を評価したい。では次に日中

関係が互いにとって大事との認識を根付かせ、再度の大幅な後退が起きないようにするにはどうすればよいか。

様々な努力が払われるべきだが、まず、日中両国がこれまで歩んできた関係修復、改善の道が簡単ではないこと、それは先人たちが一枚一枚のレンガを積み重ねてできた建物のようなもので、「造るのは難しいが壊すのは簡単」ということの理解を共有する必要がある。そのためには、私は、もっと多くの日本人が方正県の「中日友好園林」を訪れて、中国の民衆が日本に対して示した広い胸襟と善意を体験すべきだと勧める。一方、より多くの中国人にもこの園林に足を運ぶよう呼びかけたい。この中に、中国人の善意に感銘を受けた日本人が中国のために献身的に貢献し、最後にここに骨を埋めたことの意味も感受してほしい。

自分が好きなミュージカル映画『サウンド　オブ　ミュージック』の女性主人公マリアが愛の気持ちを大佐に打ち明けた時、「何もないところからは何も生まれない」と歌っている。日中関係を改善し、真の友好を打ち立てていくには、大木を苗から育てると同じように、両国の多くの人々は一緒に水をやり、栄養を与える必要がある。その水と栄養は方正県にある。そして中日友好園林に隠された最重要な示唆の一つは「互いに感謝の気持ちを抱く」ことだと、私たち一行が乗るバスが方正県を離れる途中、そう考えた。

（しゅ・けんえい：1957 年上海生まれ。86 年、総合研究開発機構(NIRA) の客員研究員として来日。96 年より東洋学園大学人文学部教授。『毛沢東の朝鮮戦争―中国が鴨緑江を渡るまで』(岩波書店、現在「岩波現代文庫」) で大平正芳記念賞受賞、他に著書、論文は多数)

『葛根廟事件の証言　草原の惨劇・平和への祈り』

― 念願の証言集を刊行して ―

興安街命日会代表　大島　満吉

葛根廟（かっこんびょう）事件と聞いても知らない人が大半です。

旧満州国の中で、ソ連との開戦時に一番大きな被害を出した事件にもかかわらず、メディアの中でも余り知られていないのが葛根廟事件でした。

開拓団の被害状況の方は、かなり知られるようになったのですが、どの事件も 300 人から 500 人の犠牲者を出したものでした。葛根廟事件の方は、1,000 人を超える死者、行方不明者を出しているのです。民間人の集団で犠牲者が 1,000 人を超えた事件は、この事件だけです。

場所は、現在の内モンゴル自治区の中にありました。当時の満州の行政地区でいうと、興安南省・王爺廟、1943（昭和 18）年に興安街と改称され興安総省の首都が設置された場所で、そこを脱出する避難民の出来事です。

この興安街の郊外には、第 13 次東京荏原開拓団と第 12 次佛立郷開拓団が近くに入植しておりました。避難行動は別々でしたが、共に大惨事になっています。

開拓団が襲撃されたのは主に地元の現地人でしたが、葛根廟に向かった避難民を襲撃したのはソ連軍であり、その点が少し違っています。

2014 年の 8 月 14 日は、犠牲者にとって 70 回忌に当たります。

そこで、記念になるような証言記録を編纂したいと、手もとにある資料を基に構想を練りました。足掛け 3 年を要したのですが、当初に考えていたものより頁数が多くなり、最初の構想にあった新聞報道の章を割愛せざるを得なくなってしまいました。

過去に出版されている本の中に生々しい証言が多くあり、そちらを優先すべきと考えたからです。

私は戦後 8 回中国を訪れました。その都度、訪中仲間と旅行記を作りました。旅行記の中には得難い貴重な実録が書かれています。旅行記は公開されているものではありませんから証言記録集を作る上ではどれも新鮮なものでした。急に書いてくれと言われても、何年か前のことを思い出すのは大変です。その意味ではこのような記録が残っていて、とても助かりました。記憶は記録が大事です。記録すれば何 10 年経っても消えることはありません。未公開の手記も有りましたし、インタビュー記事もとれました。

かくして 563 頁の本が完成したのです。素人の本としては頁数が多過ぎる感じがします。ただこの本には、最終章に資料編を載せたのが特徴です。

犠牲者名簿・生還者名簿・残留孤児一覧・訪中団一覧・教職員の実態・外務省記録・厚生省記録・興安の関連団体・草創期の役員名・当時の会費・命日会への出席者の変遷・命日会への寄付状況・菩提寺である五百羅漢寺との関連・命日会及び興安会の名簿・今では懐かしい人々の名前が掲載されています。

旧満州を研究している学者やジャーナリスト・作家・関連団体には貴重な資料になる筈です。

葛根廟事件が一般に知られなかった要因は、一に生還者が少なかったことです。1,300 人で行動しながら、翌年の引き揚げ時に日本へ辿り着いたのは 110 数名にすぎませんでした。全滅してしまった家族の事は、誰も証人になる人がいませんから、表に出るのが遅くなったのも理由の一つです。

次に、あまりの惨劇で一切口外したくない心の傷を負った人が多かったのです。戦車に追われた時、子供の手を放してしまった場合とか、自分は逃げ切れたが年寄りを犠牲にしたとか、身内と生き別れになったとか、傷ついた家族を救えなかった悔恨が口に出せないのです。自決を覚悟しながら自分だけが生き残ったとか、やむなく幼児の首を絞めた場合もあるのです。

葛根廟事件の現場を脱出できても、その後の逃避行で半数は行き倒れになったのが現実でした。やむなく子供を中国人に預けた人もいます。自決をほう助しながら自分は生還した場合は口が裂けても言えないのです。これらの苦しい胸の内は誰にも話すことが出来ず、墓場まで持って行くしかなかったのでしょう。

犠牲者の名前は 734 名しか判明しませんでした。その中で小学生以下の子供は 241 名です。仮に一学年 40 名学級の学校が有ったとしたら、全学年が死亡した人数になるのです。

その後の調べで分かったことですが、8 月 14 日の事件現場から脱出した人の数は 330 名位に上っていました。それなのに、日本に帰り着いた人は 110 数名にすぎません。半数以上が倒れてしまったのです。如何に逃避行が苛酷なものであったかを表しています。

戦後 30 年も経ってから、残留孤児の肉親捜しが始まりました。その時になって、葛根廟事件の現場から生き残っていた孤児が 25 名も居たことが判りました。その後も増え続け 34 名が葛根廟事件の遺児だと認定されました。

そうなると、もっと現場から救出された可能性があるのです。日本人だと養父母が明かさない場合もあるでしょう。売買されて行き先不明の人もいるでしょう。肉親捜しの前に病死した人も居る筈です。孤児本人が、日本の事を諦めて中国人になりきっている場合もあるのです。それらを考えると、あの現場から救出された人数は 50 名も居た可能性さえあるのです。

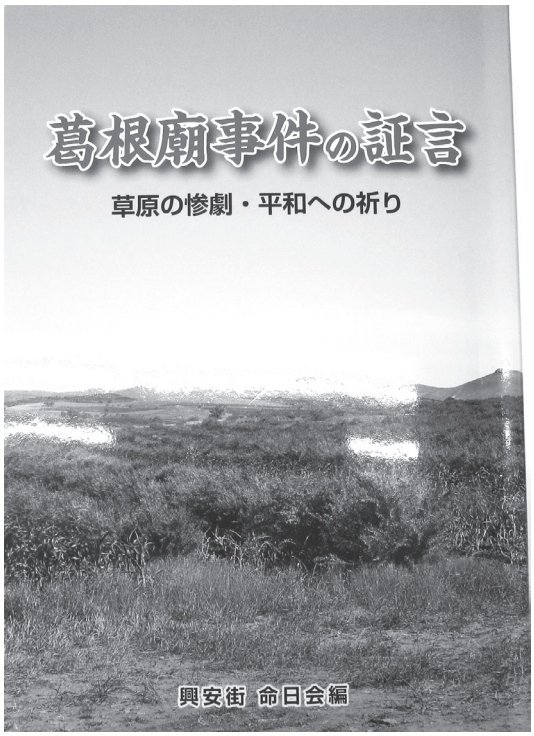
私が言いたいのはどんな事情があったにせよ、日本人の子供の命を救ったのは地元の中国人或いはモンゴル人だったということです。

敵国の子供を養育した養父母の立場は、穏やかではなかったと想像されます。外圧や迫害のあるなかで、孤児を成長させた養父母は立派だと思うのです。利害を考えず博愛精神一途の為せる技だったと感謝を禁じ得ません。

このような諸々を記録に残したいと考えたのが本書です。歴史は記録の積み重ねだと言う人がいます。本書もその一部になると思っています。

事件の証言は、成人 10 名・当時の子供 7 名・残留孤児 9 名です。

旅行記や当時興安に住んで別のルートで脱出した人の話も 40 名が書いています。出版された関連の本も紹介されています。事件の生存者で残留孤児となりながら、砂漠化防止の植樹活動に半生を捧げる烏雲（ウユン）さんの話は圧巻です。このような話が満載されている証言集となりました。



「葛根廟事件の証言　草原の惨劇・平和への祈り」

編集　　興安街命日会　　〒178-0065 東京都練馬区西大泉５－６－８　大島満吉方

発行　　㈱新風書房　　〒543-0021 大阪市天王寺区東高津町５－１７

Ｂ５版　５６４頁　発行日：平成２６年８月１日　定価：３，７００円

７００部限定発行　　※お問合せは上記大島　☎０３－３９２４－７７６４

（おおしま・まんきち：1935 年、群馬県みなかみ町生まれ。3 歳ごろ、父親の仕事関係で旧満洲へ。敗戦時を 9 歳の時、興安街（現在の内モンゴルのウランホト市）で迎え、〈葛根廟事件〉に遭遇。1946 年、帰国。葛根廟事件犠牲者の追悼団体・興安街命日会の代表を務める。現在、東京の練馬区に在住）

東京新聞 2014年7月19日付朝刊より転載

終戦前日 国は見捨てた

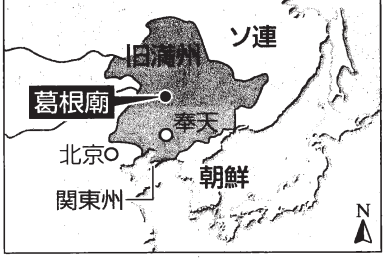
太平洋戦争の終戦直前、旧満州（中国東北部）で起きた旧ソ連軍の日本人虐殺事件「葛根廟事件」の生存者らが証言集をまとめた。「私たちは国に見捨てられた棄民だった。せめて満州に散った人々の『紙の墓標』となれば」。当時九歳で助かった大島満吉さん（七）＝東京都練馬区＝は思いを語り、事件の舞台だった中国と日本の最近の関係悪化を憂う。（安藤恭子）

伝言 あの日から70年

「葛根廟事件の証言―草原の惨劇・平和への祈り」（新風書房）を製作したのは生存者や遺族でつくる「興安街命日会」。戦後七十年を前に、代表の大島さんを中心に二年がかりでまとめた。生存者や遺族五十五人の証言や、調査で確認できた七百三十四人の犠牲者名簿を収録している。

旧満州・葛根廟事件 生存者が証言集

旧満州の地図（1945年当時）



事件が起きたのは終戦の前日。ソ連の対日参戦で満州西部の興安の民間人らがラマ教寺院「葛根廟」に向かって逃げた。戦車は避難民をなぎ倒し、機銃弾を浴びせた。

当時国民学校四年だった大島さんは母や弟妹と細長い自然壕に飛び降りた。中ではカーキ色の軍服を着たソ連兵が日本人の集団に機関銃を連射。三十人ほどが倒れた。「次は自分たちだ」。恐怖に血の気が引いた。

虐殺・自決…「紙の墓標に」

壕には何百もの遺体が残された。生き残った人々は死を選ぼうとした。幼い大島さんは「死にたくない」と思ったが、言葉にできなかった。「ごめんね。すぐ行くからね」。母は大島さんの目の前で三歳の妹ののどを日本刀で突き、幼い命が絶えた。

さらに一家で死のうと、在郷軍人が刀で自決を手助けする順番を待っているときに、はぐれた父らと再会した。父が母を説得し、金品を奪おうとする現地民から逃げ、翌年帰国した。

強いはずの関東軍は民間人より先に南方へ逃走していた。大島さんは「逃げる手段も食べ物もなくて絶望した。人間は弱いものだ」と集団自決を振り返る。

「遺骨も持ち帰れず、死者のために何もできない生き残りの私たちには、時効も免罪符もない」

証言集には、現地民に救われた残留孤児らの体験も含まれている。かくまってくれた養父母への感謝や日中友好への願いをつづっている。

事件から六十九年。日本では嫌中感情が広がりつつある。大島さんは「生存者は皆どこかで中国人に助けられている。大陸の広い心を持った中国を嫌いにはなれない」と話し「武器をかざせば敵ができ、抑止力にはならない。憲法の戦争放棄を実践してきた戦後をさらに延ばし、外交や交流に力を注いでほしい」と願う。

左 完成させた証言集を手にする大島満吉さん＝東京都西東京市で（安藤恭子撮影）
右 かつて葛根廟事件があった中国・内モンゴル自治区ウランホト郊外。1984年8月ごろ撮影

葛根廟事件 1945年8月14日昼、旧満州の葛根廟（現在の内モンゴル自治区）に向けて南下する避難民約1300人が旧ソ連軍の戦車隊に襲われた。多くは非武装の女性や子どもで、9日のソ連侵攻後、関東軍に見捨てられた民間人が犠牲となった例とされる。関係者が口を閉ざすなどして正確な被害実態が分かっていない。助かったのは百数十人とみられ、うち30人以上は中国残留孤児となった。

「方正」と村山談話を未来に

村山談話を継承し発展させる会
副代表　　星野　郁夫

１、はじめて「方正」を知る驚き

私は埼玉の田舎で、地域の一市民として地方自治・市民主権の活動をしている。群馬で生れ、東京に出てからの約 50 年余を経たが、東京の三宅坂周辺で活動をしてきた。

ある時、1960 年代に活動した仲間の会合で大類善啓氏と出会い、はじめて方正を知った。その時の衝撃は忘れられない。その後送られてきた『星火方正』を読みながら、正直言って自らを恥じた。社会主義・民主主義の活動に身を投じてきた私が、中国黒龍江省にある日本人墓地を、日本と世界の人々に知らしめるべくすすめられている地道な活動とその意義を、改めて思い知らされたからである。

２、方正と村山談話の接点

方正は、1963 年、当時中国の周恩来首相による指示で建立されたとのこと。ソ連の参戦と日本の敗戦によるパニック状態の中で、日本への帰還がかなわず、生命を失い放置されたままの約 5 千人の遺体が、手厚く葬られているのである。

今の日中関係は、2010 年当時の野田首相が、尖閣列島を国有化したことを契機に氷のように固まってしまった。この冷えた関係を溶かす材料に窮している安倍首相は、方正の存在を果たして承知しているのであろうか。しかも村山談話もある。

村山談話は、1945 年 8 月 15 日の敗戦から 50 年たった 1995 年に「戦後 50 年に際して・談話」として出されたものである。その核心は、「わが国は、遠くない過去の一時期……植民地支配と侵略によって、多くの国々、とりわけアジア諸国の人々に対して多大の損害と苦痛を与えました。……ここに改めて痛切な反省の意を表し、心からのお詫びの気持を表明いたします。」にあるといえる。

方正と村山談話は、日本が今後新しい平和と国際関係を築く、未来志向のベースとなりうるものである。

３、いま何故村山談話か

村山談話を継承し発展させる会（略称・村山談話の会）は、昨年 11 月 11 日につくられた。当時日本の政治状況は緊迫していた。特定秘密保護法、憲法が否定する集団的自衛権の行使、村山談話の見直し……など。私も地域における活動を進めながら、いたたまれず、村山談話の会に参加することになった。

今年の 5 月 25 日には、駿河台にある村山元首相の母校、明治大学リバティータワーで本人を迎えての記念講演会が開かれた。右翼も街頭で行動を起こしたが、約 300 人が会場を埋め尽くした。村山元首相は、「談話はごく当たり前のことを言っただけで、自民党を含め満場一致で決めた」と述べ、「国際的な定説になっている。否定すれば国際的なひんしゅく

を買う」と安倍首相らを強くけん制した。

また、安倍首相の手法についてふれ、「解釈改憲は絶対だめだ」としたうえで「集団的自衛権行使容認の事例は現実にはありえないことである」と厳しく批判した。

４、さらに燃やそう燎原の火

私は講演会終了後、村山元首相に「方正友好交流の会」の会報『星火方正』をお渡ししながら、元中国大使、丹羽宇一郎氏が方正を訪れ、墓前で手を合わせたことをお話ししてみた。その時は、元首相が既に 90 歳をこえていることを承知しながら、方正を訪問していただきたい、との思いも伝えた。元首相は「年だからのう……」と述べただけだったが、眼は笑っていたことをあえて付しておく。

本来ならば、安倍首相に方正を訪れていただきたいのだが、それはかなうまい。それでもいずれは、日本政府の現役の首相に、方正の日本人墓地に埋められた無数の遺体に向って尊崇の念を込め、お詫びと不戦を誓っていただきたい。もしこのことが実現したら、中国政府は、固かった表情を間違いなく柔らげるに違いない。

５、安倍首相の危険な執念

でも現実は厳しい。安倍首相が敷いた二本のレールは、復古調の執念が込められた危険きわまりないものだからである。聞こえは良いが「積極的平和主義」と「戦後レジームからの脱却」。

積極的平和主義は、憲法の規定にない自衛隊の海外における戦闘行為を推進する―自衛隊員に死んでこい―というもの。戦後レジームからの脱却とは、Ａ級戦犯を裁いた極東裁判を認めない、―戦争責任の棚上げ―。憲法を基本とした思想と法体系を押しつけられたものとして認めないというところに尽きる。いずれは、相対的に力の低下したアメリカからも離れ、独自の核武装に走り、戦略的互恵といいながら中国と覇を争う強大な軍事国家へと進む危険な夢を見ていると思う。

安倍内閣が成立して以降の情勢は急変している。中国や韓国を蔑視、従軍慰安婦はなかったとする相次ぐ政治家の発言。さらにヘイトスピーチの急激な高まりなどは、中国や朝鮮のみならず、欧米からの懸念を呼び起こした。今は一時的には沈静化したようにも見える。しかし国会議員の多くは、戦争の経験はなく、改憲派が圧倒的だ。諸外国は、このことに日本の危うさを見る。

「方正」は、未だ星火のままかもしれないが、燎原の火となる条件は拡がっている。諸外国にお詫びと不戦を誓った日本政府の公式文書「村山談話」は、世界に唯一誇れるものだ。このことを一体的に国内外に拡げる使命があることを、心の奥底に刻みたい。

（ほしの・いくお：1941 年、群馬県片品村に生まれる。60 年安保闘争を学生運動で闘った後、革新系の政治活動に携わる。社会文化会館館長を経て地域活動に従事。現在、埼玉県鴻巣市在住）

地域に平和学習の輪をどう広げるか

会員　先﨑千尋（まっさきちひろ）

1　友部での学習会のあらまし

茨城県で活動している内原・友部平和の会の島田修一会長から誘われて、10 月 26 日に笠間市友部中央公民館で開かれた表題をテーマにした学習会に参加した。島田さんは、私どもが編集発行した『いしくれ－谷貝忍が耕してきたもの』（同時代社刊）に序文を寄せていただき、その出版記念会で一緒になった。

谷貝忍さんは茨城県関城町生まれ。1963 年に東京大学教育学部を卒業し、茨城県水海道市（現常総市）教育委員会に社会教育主事として入り、公民館活動の中心として青年団や女性グループ活動を進め、後に市民のための図書館づくりに専念した。惜しくも昨年 10 月に 74 歳で逝去。彼の残した社会教育や図書館、文化論などの分野で多くの著述を残した。それを整理記録し、彼の息吹を後に続く多くの人たちに伝え、繋いでいくために『いしくれ』は編まれた。

島田さんは谷貝さんの大学の先輩で、卒業後長野県伊那谷で公民館活動、青年運動、伊那自由大学など社会教育分野で活躍され、後に中央大学で教鞭をとられた。

この日の学習会は社会教育・生涯学習研究所との共催。最初に内原・友部平和の会が取り組んできた「戦争と平和展」のあゆみや「満蒙開拓」事業から学ぶこと、地域に平和学習を広げる課題などを 6 人のメンバーが報告した。

内原、友部両町では 1992 年から戦争と平和、東京大空襲、原爆、原発などをテーマに展覧会を毎年開き、地域に刻み込まれた戦争の悲劇を掘り起こし、その歴史を学び、平和の尊さを地域の住民に訴え続けてきた。これまでの展示では憲法を守ることを軸に、人類を破滅に追いやる現代の問題を広く取り上げ、すべて手づくりで行い、参観者に熱っぽく語りかけてきたという。

同会ではさらに、昨年から今春にかけて水戸市内原にある義勇軍資料館を見学、義勇軍の歴史を学習、『誰も書かなかった義勇軍』（光陽出版社）の著者・吉野年雄さんの話を聞くなどしてきて、満蒙開拓の悲劇、内原地区に置かれた青少年義勇軍の訓練所や分村の歴史を学んでいった。そして今年 1 月に日本でもっとも多くの犠牲者を出した長野県阿智村を訪れ、満蒙開拓平和記念館を訪問し、現地の人たちと交流した。

こうした経緯から、この日の報告の 2 つ目は満蒙開拓平和記念館の活動報告。この日の目玉だった。阿智村役場の林茂伸さんが阿智村での活動と意義について、記念館を阿智村に作った経過や同村での平和発信事業、平和教育などをくわしく報告した。林さんは最後に、日本人として本質をつかむ努力をすべき、戦前の統帥権を盾にした軍部の爆走をどうみるのか、日本は太平洋戦争の総括をしていない国、改めて戦争責任を問うべき、と述べ、新たな「戦前」が始まっている、と警鐘を鳴らした。

最後に日本社会事業大学の辻浩さんが、公民館で社会的評価が分かれる問題を取り上げない動きが顕在化してきていること、複数の閣僚がネオナチや在特会と接触している危険性、自衛隊の海外派遣、福島や沖縄で犠牲のシステム化を図っていることなどを例にあげ、これからの平和学習の課題を整理報告した。

このあとの全体討議では、平和運動、平和学習が広がりを見せていない、盛り上がらな

い、若い人に伝わっていかない、学校の教師と結びついていないなど現場の苦悩が出された。その上で、今後の進め方として地域の実態を共に調べ、語り合う、学習の質を問い直し、自分の中で疑問を作り、見つけ、解決策を考えていく、などが提案された。

2　私の内原との関わり

私はこの会のことを知らなかった。阿智村の記念館建設については大類さんからの情報などで知っていたが、もう一つの記念館のある内原ではどのような動きがあるのかが分からないでいた。内原の記念館は阿智村のそれとは質がまったく違うが、内原にある記念館の展示を見て説明を受ければ、それで納得させられてしまうのではないか。また前述の吉野さんの講演記録には「風化とは自然現象ではなく、学校で教えない、メディアも書かない、作品の発表もしないなどによって政治的に風化を早めることができる」とある。心しなければならないことだ、と思った。

私は2年前に、戦前の茨城でサツマイモの神様と言われた白土松吉（しらとまつきち）を取り上げ、『白土松吉とその時代』（茨城新聞社）を上梓した。その中に、戦争中に食糧増産を目指した政府の「イモ類大増産運動」の一環として、白土が内原の加藤完治の日本国民高等学校などでサツマイモの苗を二千万本作り（計画では）、東京などに送ったことを書いた。その苗は、皇居、国会議事堂、日比谷公園などでも植えられた。取材過程で加藤完治の長男である弥進彦さんから話を聞き、当時の写真も借り、本には義勇軍訓練所本部前とサツマ苗づくりをする義勇軍の少年たちの2枚の写真を収録した。

私の本には、「この地（内原）が軍部の満州侵略に呼応して、満州農業移民を送り出す本部となり、また訓練の道場となった」と書いた。この満州侵略という表現に弥進彦さんが即座に反発し、満州建国は断じて侵略ではないというきつい表現の手紙をいただいた。私はそのことを私の個人的な見解ではないと書き、何度かのやり取りのあと、このことではいくら論争しても意見がかみ合うことはないので、論争を止めにしましょう、と返事を書いたことを思い出した。このときの中心人物のひとりであった白土も、農業技術者としてまごうことなく戦争協力者の一人であった。

この文と前後して、私は茨城県つくば市で発行されている『常陽新聞』のコラム「ムラから日本を見る」に次の文を書いた。転載だが、併せてごらんいただきたい。

3　誰が得をするのか

【『常陽新聞』2014年11月10日用　コラム「ムラから日本を見る」第17回】

朝日新聞がこの八月九月に、従軍慰安婦の吉田証言と東京電力福島第一原発に関する吉田調書の記事は誤報だったと謝罪したことをめぐって、新聞雑誌はあげて朝日叩き。国会でも安倍首相自らが批判の先頭に立っている。

一部新聞や週刊誌には売国奴、国賊、国辱、国益を損ねた等々の言葉が踊っている。月刊誌の『文藝春秋』や『中央公論』までもが 11 月号で「隠蔽された朝日新聞の罪と罰」、「朝日問題から考えるメディアと国益」という特集を組んでいる。

それだけでなく、安倍首相は最近の国会で「朝日の記事は捏造」「朝日は安倍政権を倒すことが社是」（民主党議員に）「殺人までする組織活動家と関わりがある」などと常軌を逸した発言を繰り返している。

こうした一連の報道を見ていて、どこかおかしいのではないか、いや狂っている、と私は感じている。自分の考えに沿わない人やグループに売国などの罵声を浴びせるのは、戦時中の大本営発表にモノが言えなかった時と同じではないか。日本の社会が歪んだ変質を遂げようとしているのではないか。しかし、国民の多くはその再来を願っているのだろうか。

では、朝日バッシングの本質は何なのか。その狙いはどこにあるのか。

朝日新聞の誤報についてここで詳しくは述べない。従軍慰安婦報道での「吉田証言」が虚偽だったこと、福島原発事故の「吉田調書」をめぐる「命令違反で撤退」という記事の二つである。これに、コラムニスト池上彰さんが朝日を批判した原稿が掲載拒否になったことが加わる。

新聞に誤報はつきものだと言われている。他社を出し抜くスクープにはその危険性が高い。記者会見や官庁などが提供する情報なら間違いはないかもしれないが、読者には面白くない。間違えば取り消し、その過程を検証し、より正確な記事にすればいい。

従軍慰安婦の問題について見れば、強制連行があったという 32 年前の「吉田証言」が虚偽だったことを今になって取り消すのはなんだ、という批判は一応もっともである。しかしそれで朝鮮半島などの女性が日本軍の「慰安所」に連れていかれ、「慰安婦」とされたこと、慰安所があったことは消すことができない。どんな経過で連れていかれたにせよ、日本軍が設置運営管理する「日本軍慰安所」に入れば、監禁拘束され、強制的に兵士の性の相手にさせられた。このことが問題の本質であり、強制連行の有無が慰安婦問題の本質ではない。

「吉田調書」について朝日新聞は「所長の命令違反」があったと書いた。当時、原発の現場は所長の指示が末端まで伝わらないほど混乱していた。吉田所長は「死を覚悟した。東日本は壊滅だ」と認識していた。原発が一時期完全にコントロールできなくなっていたことが本質的なことであろう。そのことを、朝日を叩く他のメディアが伝えたか。今に至るも、原発事故の本質が隠され、正確な情報が私たちに伝わっていない、と感じている。吉田所長以外の東電役員の調書は公開されていないではないか。伝えていないことの方が問題なのではないか。

安倍政権になってから、特定秘密保護法の制定、武器輸出三原則の破棄、憲法解釈の変更による集団的自衛権の行使容認の閣議決定など、戦後の日本が堅持してきた価値を根本からひっくり返す政策が次々に出されてきている。また、リベラルな価値観を嫌悪し、靖国参拝を強行し、中国や韓国との関係を悪化させている。

一方、ヘイトスピーチの横行、「嫌中・嫌韓」本が本屋に並び、愛国を鼓舞し隣国への憎悪を煽る言動が幅を利かせている。これらのことと朝日バッシングはつながっていないだろうか。

池上さんは『週刊文春』9 月 15 日号で「『売国』とは、日中戦争から太平洋戦争にかけて、政府の方針に批判的な人物に対して使われた言葉。問答無用の言論封殺の一環」と書いている。言論を封殺して誰が得をするのだろうか。

（まっさき・ちひろ：1942 年、茨城県那珂市生まれ。農協職員、瓜連町長、ひたちなか農協代表理事専務を経て、前ＮＰＯ法人有機農業推進協会理事長、元茨城大学地域総合研究所特命教授。那珂市経営戦略会議委員長、環境自治体会議監査役。著書に『農協に明日はあるか』『ほしいも百年百話』『前島平と七人組』など）

＜歴史実践＞の場としての旧満州

今野　日出晴（岩手大学）

はじめに

2014 年 9 月 13 日から 20 日まで，私たちは，旧満州（中国東北部）を訪問調査した。私たちとは，研究課題「地域をつなぐ自省的な『歴史認識』形成のための基礎的研究－東北地方を基軸に－」（研究代表者：今野日出晴）[1]を共に探求している，日本と中国の研究者である。この共同研究によって，日本と中国との間で感情的な対立が激しさを増すなか，隘路に陥りがちな「歴史認識」問題に対して，自省的な「歴史認識」を育成するために，歴史教育プログラムを提案したいと考えている。小さなグループによるもので，スタートしたばかりの共同研究であるが，副題にもあるように，東北地方を基軸にしていることが特色の一つになっている。東北からの「満洲移民」の植民地体験や戦後東北に戻っての開拓体験などを軸に，東北地方と旧満洲（中国東北部）の二つの地域をつなぐ人びとの活動と体験（「生きられた経験」）に着目して，自省的な「歴史認識」を生みだすものとしての＜歴史実践＞の場を構想しようという試みなのである。どのような歴史的事実が，歴史的な経験が，感情的に固着した「歴史認識」を揺り動かし，「歴史対話」や「歴史和解」に向かって開かれたものになりえるのか，そのための＜歴史実践＞の場を探求するために，今回の調査がおこなわれた。

１．＜歴史実践＞の場

靖国神社問題や歴史教科書問題，さらには，領土・領域の問題と，アジア諸国との間に歴史認識をめぐる相克や摩擦が深刻化し，日本と中国の関係も，これまでにないほどの緊張関係にある。こうした状況は，両国民の感情に深刻な影響を与えている。例えば，「第 10 回日中共同世論調査」（日本：言論 NPO，中国：中国日報社）によれば，日本人の「相手国に対する印象」は、「良くない」（「どちらかといえば良くない印象」を含む、以後同じ）が 93.0％で，中国人では「良くない印象」は 86.8％であり，依然として８割を超えている。そして，日本人が中国に「良くない印象」を持つ最も多い理由は、「国際的なルールと異なる行動をするから」が 55.1％（昨年 47.9％，以後同じ）、「資源やエネルギー、食料の確保などの行動が自己中心的に見えるから」が 52.8％（48.1％），「歴史問題などで日本を批判

[1] 科学研究費　基盤(B)：研究課題番号：25285241

するから」52.2%（48.9%）と続いている。また，中国人が日本に「良くない印象」を持つ理由では、「日本が魚釣島を国有化し対立を引き起こした」の 64.0%（77.6%）と、「侵略の歴史をきちんと謝罪し反省していないこと」の 59.6%（63.8%）の２つが突出していると分析されている[2]。

歴史認識の問題に焦点をあわせれば，「侵略の歴史をきちんと謝罪し反省していない」という中国からの視線は，日本からすれば，いつまでも「歴史問題などで日本を批判する」というように受けとめられ，今度は，逆に，そうした態度が，中国からは「侵略の歴史」を反省していないと見られてしまう。ここには，堂々巡りの，ある種の脱しがたいループ構造がある。日本についていえば，「歴史問題などで日本を批判するから」という言い方には，いつまでも批判してくる「厄介な隣人」という中国イメージが存在し，それは，容易に，理不尽な非難をする「邪悪な隣人」へと進み，それが感情的に固着してしまうかもしれない[3]。しかし，その一方で，「日中両国民の相手国に対する国民感情の悪化」を「望ましくなく心配している」（日本：32.5%，中国 35.2%），「問題であり、改善する必要がある」（日本：46.9%，中国：35.2%）という認識も確認できる。両方を合算すれば，日本では 79.4%と８割近く，中国でも 70.4%と７割が，現在の国民感情の悪化を憂慮し，なんとか改善すべきと考えていることは注目してよい。

こうした現在の国民感情をめぐる問題を解きほぐしていくためにも，過去の「生きられた経験」を探求し，＜歴史実践＞の場を措定し，「歴史対話」や「歴史和解」に向かって開かれたものにしていくことが求められているように思う。そこで，私たちは，９月 15 日に，長春の東北師範大学で「第３回　東北アジア歴史認識研究会」（学術交流会）を開催した。日本からは，私のほかに，宇佐美公生，藪敏裕，劉海宇（以上，岩手大学），河西英通（広島大学），外池智（秋田大学），伊藤大介（東北大学），小瑶史朗（弘前大学），中国からは，韓東育，劉暁東，周頌倫，李小白，王来特（以上，東北師範大学），王鉄軍（遼寧大学），陳東（曲阜師範大学）の各氏が参加し，他にも東北師範大学の大学院生を中心に 30 名ほど

---

[2] 2005 年より毎年実施されており，今年は，18 歳以上の男女で日本が 1000 名，中国が 1539 名の回答者であった。詳しい内容は
http://www.genron-npo.net/world/genre/tokyobeijing/10-7.html

[3] この点については，別稿で検討した（拙稿「日本と中国，戦争認識をどう深めるか」，歴史教育者協議会編『歴史教育・社会科教育年報　2014 年版』三省堂，2014 年 12 月刊行予定）。

の参観者が集った。報告は，「<歴史実践>の場としての『中国東北部』」（今野），「満洲移民史研究の現状と課題」（伊藤）の２本であり，その後に質疑応答をおこなった。

私の報告は，今回のプロジェクトの目的や内容など，全体の概要を中心にしたものである（本稿はその一部）。最初に，長春出身の孫歌氏の「感情記憶」を紹介して，プロジェクトの方向を示した。孫歌氏は，「偽満州国の首都」に生まれ育ったという「個人的な経験の次元において，個人的には帰せられないそういった複雑な情緒」があり，「歴史の怨恨」に直面せざるを得ないもので，「感情記憶」は「言葉以前」の「個人生活，社会生活の襞の内奥に隠された文化の浸透力」[4]としてあった。しかし，孫歌氏は，同時に，「感情的な歴史記憶」それ自体を「一民族から解放させるには，日常生活レベルから努力することが必要であり」，「そのための方法についてともに考えなければならない」[5]としていることは注目される。そこで，私はその日常生活レベルにおいて努力するという点において，<歴史実践>という方法が有効ではないかと提案したのである。<歴史実践>とは，「歴史学者の研究書や学校の歴史の授業とは無縁の場で，我々が日常的に歴史とかかわる営みをしている」ことをとらえて，保苅実氏が，「日常的実践において歴史とのかかわりをもつ諸行為」を「歴史実践（historical practice）」[6]としたことによっている。ここでは，それを踏まえながら，日々の暮らしのなかで，歴史とかかわる営みを意識化すること，あるいは，歴史とかかわるなかで，沈殿されていくもの（「感情記憶」もその一つ）に自覚的になることと捉えている。「感情記憶」を否定するのではなく，自らの「感情記憶」がどのようにして立ち上がり，固着していくのか，具体的な歴史の場に立って，そ

---

[4] 孫歌『アジアを語ることのジレンマ』（岩波書店，2002 年）13～20 頁。

[5] 南誠「歴史記憶の共生と研究実践に関する国際的対話の試み」（『星火方正』第 18 号）。

[6] 保苅実『ラディカル・オーラル・ヒストリーーオーストラリア先住民アボリジニの歴史実践ー』（御茶の水書房，2004 年）。

れらを究明していくこと，宇佐美公生氏の言葉を借りれば，「感情記憶を解きほぐし，感情記憶を包みこえる」ことにつなげていきたいと考えている。具体的には，後述するように，黒竜江省「中日友好園林」（「方正地区日本人公墓」・「中国養父母公墓」等），依蘭岩手開拓団跡などを＜歴史実践＞の場として位置づけて，歴史教育プログラムへとつなげていきたいのである。

また，伊藤大介氏の報告は，日本における満洲移民史研究の現状を報告したもので，特に，「満洲移民の地域的偏り」として，いくつかの例外もあるが，「長野県や新潟県，及び東北６県のような寒冷地から，多くの移民が満洲に創出された」ことを指摘した（２：山形，４：福島，６：宮城，11：秋田，14：青森，18：岩手）。近代の東北は，冷害による凶作や津波災害（1896 年・1933 年）によって，大きな被害をうけた。そのために，地域振興の対策として，満洲移民が提起されたこと，さらには，満州事変の実行部隊が仙台第二師団であり，その「勲功」を誇る意識があったことなども指摘された[7]。

質疑応答では，「感情記憶」と史実との関係，中国における満洲移民史研究の現状，その史料の所在，日本の東北地方と中国の東北部との関係と位置づけ，一国史と地域史との関係などが議論された[8]。

２．依蘭から方正へ

９月 17 日には，「依蘭岩手開拓団」跡の村へ向かった。ここから，写真家の宗景正氏，そして，京都の第二天田郷開拓団の大中はつゑさんと合流した。「依蘭岩手開拓団」は，岩手県下閉伊郡小川村・大川村（現.岩泉町）及び九戸郡江刈村（現，葛巻町）が中心となって送り出した開拓団である。1940（昭和 15）年４月には，先遣隊が千振駅に下車し，三江省依蘭県松木河（現，黒竜江省佳木斯市樺南県東民主村・西民主村）へ入植する[9]。以後，1944（昭和 19）年　には，58 戸 348 名，そして，終戦時は，283 名の団員となり，生存帰還者はわずかに 84 名という状態であった[10]。

---

[7] 伊藤大介『近代日本と雪害－雪害運動にみる昭和戦前期の地域振興政策』（東北大学出版会，2013 年）。

[8]詳しくは，後日刊行予定の報告書を参照のこと。

[9] 依蘭岩手開拓団を偲ぶ会編『依蘭岩手開拓団　その生い立ちと残響』（私家版，2002 年）

[10] 依蘭岩手開拓団史編集委員会『流れる　依蘭岩手開拓団史』（私家版，1999 年）

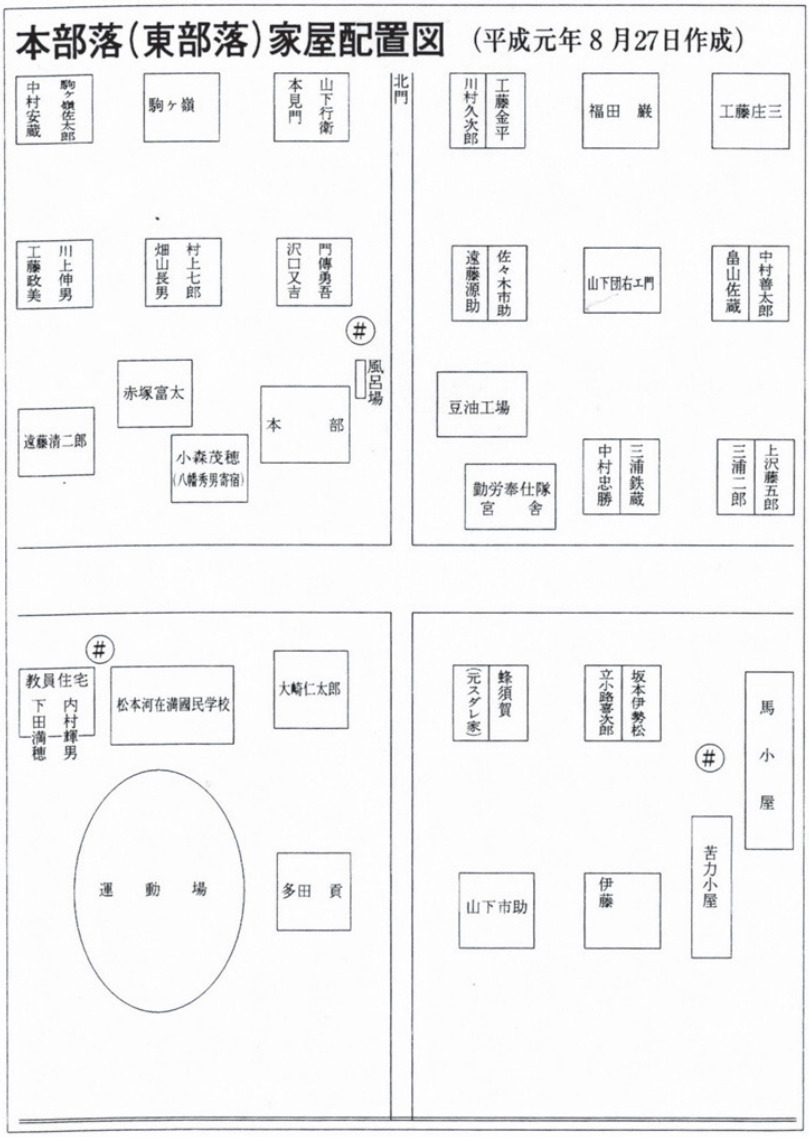
ハルビンから高速道路で依蘭まで進み，ポプラ並木の 307 省道を土龍山鎮まで行く。ここから北上すれば，東民主村へと到達する。土龍山鎮は，あの土龍山事件の舞台となったところである。1934（昭和９）～39（昭和 14）年まで，日本人の移民用地取得に反対する現地の地主や農民たちが，土龍山を拠点に武装蜂起をして抵抗を続けたのである。開拓団の団長であった小森茂穂氏は，1940 年に先遣隊として千振荘に宿泊して，これから松木河に入植しようというときに，弥栄開拓団の団員から，そこは「匪賊の巣窟ではないか」と言われて動揺したことを手記に書き残しているが，まさに，土龍山事件が鎮圧された直後に，依蘭岩手開拓団は入植したのであった[11]。土龍山鎮から東民主村へは，悪路が続く。次第に，東民主村に近づいてくると，見覚えのある山が見えてくる。おそらくは，開拓団の人々が，故郷の岩手山と似ていることから，岩手山と呼んだという山であろう。確かに，なだらかな稜線がよく似ている。

松木河にかかる橋をこえて，ようやく東民主村に到着する。ハルピンからおよそ８時間の距離である。本部のあった本部落（東部落）の家屋配置図をもち，村の人々に聞いてみるが，誰も，ここがかつて開拓団の村であったということを知らない。ようやく，かつて井戸のあった場所を知っているという張桂栄（86 歳）さんが，出てきて案内してくれることになった（写真中央が，張さん，その隣が大中はつゑさん）。次頁の図でいえば，北門に向かって歩きな

[11]依蘭岩手開拓団を偲ぶ会編『依蘭岩手開拓団　その生い立ちと残響』（私家版，2002 年）

がら，本部の北にある井戸に向かっている。これで，ようやくここが，かつての依蘭岩手開拓団の村であったことが確認できたのである。

また，図の中央，本部の西に，団長の小森茂穂氏の自宅があり，一つおいて，「遠藤清二郎」の自宅が確認できる。この「配置図」では，「清二郎」となっているが，別の「東部落見取り図」では[12]，「遠藤清一郎」となっていることから，ここが，「中日友好園林」の「中国養父母公墓」を建立した遠藤勇氏[13]の自宅であったことは間違いない。遠藤勇氏の父が清一郎，祖父が清次郎であることから，世帯主を誰にするかによって，「本部落（東部落）家屋配置図」と「東部落見取り図」で異なる記載となったのであろう。



いずれにせよ，東民主村でもっともよく知っている張さんも，この村へ嫁いできたときには，すでに，開拓団の人々が去ったあとであり，現在は，わずかに井戸の位置を記憶しているにすぎなかった。今回の調査でも，他にかつての開拓村の跡を見出すことはできなかった。張さ

[12]依蘭岩手開拓団を偲ぶ会編『依蘭岩手開拓団　その生い立ちと残響』（私家版，2002 年）

[13] 遠藤勇氏に関しては，大副敬二郎「自力で建立した遠藤勇の物語」（『風雪に耐えた「中国の日本人公募」ーハルビン市方正県物語ー』東洋医学舎，2003 年）が詳しい。

んも高齢であり，今後ますます，日本の開拓団の跡を探ることは難しくなる。(右写真は，C 宗景正)

次に，方正へ戻る途中に，土龍山鎮を過ぎて，307 省道脇に，華南県人民政府によって建立された「土龍山農民抗日武装暴動記念碑」（2012 年）を見学した。「中国農民武装抗日第一砲」と位置づけられている。

翌 18 日に，「中日友好園林」を訪れた。2011 年の「日本開拓民死者名録」碑事件の影響で，園内での写真は禁止されたが，「方正地区日本人公墓」，「麻山地区日本人公墓」，「中国養父母公墓」，そして，「藤原長作　記念碑」[14]，陳列室なども参観することができた。これらの施設に込められた意味や戦略については，南誠氏が指摘するように，「これらの史跡を保存し，それを愛国主義教育基地と日本訪中団の訪問地として活用することで，中日両国人民の平和，戦争反対，友好交流の意志を強化していくと同時に，方正僑郷のイメージに対する認識を高めていく」[15]ことが企図されているであろう。そして，＜歴史実践＞において，重要なことは，このような宥和と寛容を記念・顕彰する施設や史跡の持つ意味と意義を自覚的に認識していくということである。こうした点を考慮しながら，歴史教育プログラムを構想することが求められる。

---

[14] 大類善啓「水稲王　藤原長作物語」（『風雪に耐えた「中国の日本人公募」－ハルビン市方正県物語－』東洋医学舎，2003 年）。

[15]詳しくは，南誠「中国『方正日本人公募』にみる対日意識の形成と表出」（駒井洋監修・小林真生編『レイシズムと外国人嫌悪』明石書店，2013 年）参照のこと。また，方正僑郷の具体相については，山下清海・小木裕文・張貴民・杜国慶「ハルビン市方正県の在日新華僑の僑郷としての発展」（『地理空間』第６巻第２号，2013 年）が詳しい。

その点において，ハルビン市の「侵華日軍第 731 部隊罪証陳列館」における「中国母親的博大情懐(中国人養父母の寛容な心)」と題する序文はとても興味深い。そこには，満洲移民が避難していくなかで，残留日本人孤児となっていく状況が記され，「中国養父母も侵略戦争の苦しみを経験したばかりだった。苦しい生活をしていた中国人は人道的にこれらの子供を受入，さんざん苦労して，これらの子供を一人前に育て上げた。彼らの愛と手で，これらの不幸な子供たちにも幸せになった」とその寛容な心，人間愛が明示される。私たちは，「哈爾浜市日本遺孤養父母聯誼会」の名誉会長胡暁慧さんから直接にそれぞれの展示に即して，説明を受けたが，胡さんは，ハルピン紅十字会（赤十字会のこと）の中に設けられた「養父母聯誼会」で、日本人残留孤児や養父母同士の交流活動を進めてきたのであり，その活動にも，養父母の寛容な心とつながるヒューマニズムが確実に存在する。それに敬意を表しつつも，同時に，大中はつゑさんの体験[16]をも思い起こすのである。

大中さんは，1945 年 6 月に依蘭県の第二天田郷開拓団として入植する。しかし，すぐに敗戦になり，ハルビンに向かうが途中で，「たくさんの中国人が家財道具を奪っていった」。そして，父も継母も弟も病気でなくなり，「とうもろこし売り」にもらわれていく。朝 2 時からの重労働で手の皮がむけ，たびたび養母から殴られる。ようやく引き揚げ事業で，日本に帰れそうになるが，書類を隠され，いじめられ続ける。そして，ようやく 1979 年に自費で日本に戻ってくる。展示で示されることが「美談」であるとしたいために，大中さんの体験を紹介したのではない。さきの遠藤勇氏のように，中国人養父母は，勇氏が日本人であるとわかれば，いじめられるから，それを隠し，それが露見すれば，引っ越しまでして，勇氏の

[16] 大中はつゑ「中国で，日本で，何度もほかされた」（文：樋口岳大・写真：宗景正『私たち，「何じん」ですか？－中国残留孤児たちはいま…』高文研，2008 年）。

将来を考えていた。それゆえに，黒竜江大学で高等教育を受けることができたのであり，貿易商として成功したのであろう。まさに善良な養父母を思いおこすからこそ，「養育之恩永世不忘」は偽りのない真情として表現される。

遠藤氏と大中さんという二人の「生きられた体験」の幅のなかで，人間をとらえること，そして，それを強いた戦争というもの，満蒙開拓というものを見据えるということ[17]，それは，国家を主語にして一元的に語られるような認識から出発するのではなく，日本の東北地方と中国東北部（旧「満州」）の地域をつなぐ，固有名をもったさまざまな人びとの「生きられた経験」に着目することから始まっていくと考えたい。

おわりに

今回の訪問調査は，歴史学，倫理学，中国思想史，日中比較文学，日中比較思想史などなど，日本と中国の異なる専門の研究者によって，さらには，写真家，残留孤児の方などとともにおこなわれた。先に示したような研究会での議論，さらには，さまざまなフィールド・ワーク，それらをもとに，それぞれが，加害と被害の記憶，宥和と寛容の回路，責任の主体と謝罪の対象，地域と国家，「東北」意識などの主題を考察し，「感情の記憶」を包み越えて，自省的な「歴史認識」に到達するための道筋を構想していた。その際，やはり，重要であったのは，狭義の研究者の活動のみに閉じていないことの意味であろう。近年，「公共」の文字を関する学問分野が登場してきていることをとらえて，「学問の公共性」を視野におさめるべきことが提唱されている[18]。歴史学においても，「公共歴史学」というかたちで，「歴史学の公共的なあり方，あるいは社会実践を考える歴史学の方向性」が示されている。そこでは，過剰に専門化，職業化した歴史学を批判し，制度的アカデミーの外に，歴史学の研究成果を届かせようとするために，歴史学自らもその姿を変えることを求めている。そうした点からいえば，今回の活動と調査は，意図せざるものであったが，＜歴史実践＞という

---

[17]長野県下伊那郡阿智村の「満蒙開拓平和記念館」の展示説明文に，「土地の買収は，初期は関東軍が取り仕切り，その後は満洲拓殖公社などが担いました。一般開拓団員の多くは実態を知らず，あるいは目をつむりながら現地に入っていきました。“満蒙開拓”とはいえ実際に開拓をした人々は少なく，現地の人々にとって開拓団は自分たちの土地を奪う存在であり，満蒙開拓は侵略の加担という側面もありました。満洲への農業移民は，日本国内の諸問題を解決する施策だった一方で現地の人々に苦難を強いることとなりました」とある。そのことをまず前提に理解すべきであろう。

[18] 菅豊『「新しい野の学問」の時代へ』（岩波書店，2013 年）。

かたちの「公共歴史学」であったのかもしれない。そうであれば，なおのこと，国民感情をめぐる問題を解きほぐしていく可能性をもっていると考えたい。いずれにしても，具体的な歴史教育プログラムをつくり，実際にそれを実施し，さらに，その有効性を検証するというプロジェクト自体の目的からすれば，ようやく，その入口に立ったという段階である。課題の大きさとともに，いくつかの方向性も確認することができたように思う。

※今回の訪問調査は，私たちだけでは到底実現することが叶わなかった。岩手依蘭開拓団に関しては，山下辰郎氏・伊東保男氏，調査全般に関しては，満蒙開拓平和記念館の三沢亜紀さん・向山敦子さん，方正友好交流の会の大類善啓氏，そして，一緒にフィールド・ワークをしていただいた宗景正氏・大中はつゑさん，みなさまに，心からお礼を申し上げます。ありがとうございました。

（こんの・ひでは る：1958 年、山形県生まれ。岩手大学教育学部教授，専門は，歴史教育・社会科教育。著書『歴史学と歴史教育の構図』他、多数。この８月、第 12 回飯田市地域史研究集会で「『被爆者の声』、その力―『口述資料』と文献資料」というテーマで講演）

日中関係の現状と未来を考える

藤野（ふじの）　文悟（ふみあき）

≪**解説**：藤野文悟さんのこの講演は、今年（2014 年）6 月 8 日、方正友好交流の会、第 10 回総会後に行われたものである。藤野さんは 1937 年、広島市生れ。大阪外国語大学中国語学科卒業し伊藤忠商事に入社後ずっと中国畑を歩まれ、91 年中国総代表の後、常務取締役など歴任。現在、藤野中国研究所を主宰。富山県環日本海経済交流センター長、伊藤忠商事理事、日本国際貿易促進協会顧問、日中経済協会評議員などを務められている。私などがまだ仕事として中国に関わる前から、藤野さんの新聞紙上に表われたコメントは、現実の中国ビジネスに携わったものでしか掴めないリアリティーがあった。世の中国通の評論家や研究家と一線を画するもので、実に中国の実情がわかったものである。講演は森一彦がまとめた。（大類善啓記）≫

■最悪の日中関係

大類さんからいただいたテーマは「日中交流を振り返る」というものでしたが、あまり振り返ってばかりいると時間がいくらあっても足りませんので、一時間ほどのなかで、ポイントとしては、日中交流の現状、今後のあり方、を中心にお話をしたいと考えております。

先ほど司会の方からご紹介いただきました様に、伊藤忠商事という会社にずっとおりました。中国と関わりがあったのは、1959（昭和 34）年に会社に入ってからです。それからずっと関わりをもって、中国以外とは関わりがなく、半世紀にわたって中国とつき合ってきたことになります。それが私の個人の歴史であります。

講演する藤野文悟さん

1963 年に最初に中国へ行きましたが、それから、いろいろな事件に遭遇してきました。文化大革命もあり、胡耀邦の問題からの天安門事件もあり、６４事件があり、またそれまでにも毛沢東が亡くなり、周恩来が亡くなり、鄧小平が復活し、いろいろな局面で、私はほとんどその現場に立ち会ってきました。

それを振り返ってお話をすると、時間がいくらあっても足りなくなります。自分の紹介はこれくらいにして、本題に入りたいと思います。

実は最近、私は非常に悲しい思いをしております。日中関係がこれほど悪いということを、残念ながら過去の歴史のなかで私は見たことがありません。確かに、日中関係が悪いことはたくさんあった。しかし、誰かが引っ張っていって、そして良くなっていった。ところが今は、誰も引っ張っていく人がいない。日本は一方的にひとつの方向に流れ始めた。これが、私が感じている今の状況です。

もう一つ、非常に悲しい現実は、日本人のなかで、８割の人が中国は嫌いだと言っている。中国人のなかで、８割の人が日本は嫌いだと言っている。こういう現実は、今まで見たことがありません。ではどうしてそんなことになるのか、いろいろと複雑な事情があってそうなるのでしょうが――。

私が現状の日本に危惧を抱いているのは、私のような戦争を知っている世代がどんどんと減っていることです。戦争が終わったとき私は小学校２年生で、広島で被爆をしましたから、被爆者でもあります。そういう戦争を知っている世代は、もう 80 歳を超えつつあります。

ですから、戦争を知らない世代が、今の日本を引っ張っている。政治家はほとんどそうですね。戦争を知っている人たちは辞めてしまっている。戦争を知らない人たちが、集団的自衛権だとか、武器輸出三原則だとか、憲法第９条の改訂だとか、そういう話を進めている。そのことに、ものすごく危機感を感じています。なぜ、そういうことになるのかを、考えなければいけない、と思っております。まあそれが、今の日本の現状なのです。

今日は大類さんがこんなに立派な会を率いておられて、また皆さんがこうして休みの日にお集まりいただいたので、私の気持、所感をですね、少しでも理解していただきたい、そう考えております。

講演に聴き入る会員及び会報読者たち

■被害者と加害者がどう向き合うのか

日中関係について、いろいろなエピソードがありますが、ものすごく大事なポイントが、ひとつあります。それは、加害者と被害を受けたひととの関係です。私が尊敬する大先輩である亀井勝一郎という人が――もうとっくに亡くなりましたが、皆さんもお読みになったことがおありだと思います、著名な評論家ですね――１９６０年に、日本の小説家・作家の代表団として中国を訪問されました。私は亀井さんの弟子をもって任じていまして、私は亀井さんに弟子にしてくれと言ったのですが、亀井さんは弟子は取らんとおっしゃって、弟子にはなれませんでした。亀井さんは私に、訪中時の話を直接すべて話してくれました。

1960 年に作家協会代表団の副団長で訪中されたときに、当時の外務大臣・副総理の陳毅さんに会った。陳毅外相ですね、かつては上海の市長もやった方です。人民解放軍の戦士でもありました。この陳毅さんと会談をしたときに、冒頭に亀井さんは、「私たちは中国に対して大変失礼なことをした、損害を与えた、私は一生これを忘れずに生きて行く」、と陳毅さんに話されたそうです。

そうしたら、陳毅さんが、「いや私は忘れたいと思っています」――と返された。

「亀井先生は、日本軍国主義が中国を侵略したことを永久に忘れないとおっしゃる。私たちは忘れたいと考えている。これは良いことです。逆に私たちが忘れないと言い、日本側が忘れたいと言うことになれば、これは悲劇です」

私は忘れたいと思っている。加害者が忘れないと言い、被害者が忘れたいと言えば、これはお互いの関係で理想的な関係だと、陳毅さんは言われた。それがもしも逆になったらどうでしょうか。半世紀前の話ですが、その逆になった状態が、今の状態なのです。

日本は忘れたいと言っている。日本政府は中国包囲網を一生懸命に作って、地球儀外交などと言っていますが、隣国の韓国と中国へは行かない地球儀外交、こんな馬鹿な話がありますか。価値観を共有するところと付き合うと言っていますが、その価値観とはなんぞや――？それは米国の価値観ですか？！

「加害者が忘れないと言い、被害者が忘れたいと言って、隣同士の付き合いをしたら、これは絶対にうまく行く。しかし、加害者が私は忘れたいと言い、被害者がいつまでも忘れないと言えば、これは悲劇です」――そう陳毅は言った。これを今、安倍さんに言ってあげたいのだけれど、残念ながら私にはそのルートがない。安倍さんの周辺は、同じ意見の人たちで囲っていますから、入る余地がない。これが、悲しいかな現状ですね。

そういう状態が、今の日中関係ではないか、そう思っています。

■問題の発端はどこにあるのか

では、なぜそうなったのか。いろいろと考えてみると、発動したのは日本側ではないか。皆さんのように、草の根活動を熱心にやられている方は別ですが。実際に例えば、今の日中間に横たわっている２つの大きな問題。ひとつは尖閣列島の問題であり、ひとつは歴史認識の問題ですね。先ほどの陳毅さんの話は、歴史認識の話です。この２つの問題について、仕掛けをしたのは日本側です。

石原慎太郎氏が国有化すると言い、その国有化するという話を、わざわざ米国に行って話している。米国さん助けてよと、国有化するから助けてと。米国が助けてくれなかったら日本は生きていけないのです、とこう言っているのです。この歴史感が基本的に間違っていますが、当時の野田民主党総裁は、唯々諾々として受けた。しかし東京都じゃ具合悪いから国有化しましょうと。

それから、歴史認識の問題は、これははっきり判るでしょう。靖国神社とはいかなる神社で、皆さんも行かれたことがあると思いますが、あの中に遊就館という小さな展示場がありますね。戦車や飛行機が置いてある。そこに日本がかつておこなった戦争は、聖なる戦いだと、こう書いてある。我々はサンフランシスコ条約で１９５２年に独立した。聖なる戦いだとしたら、どういうことになるのですか。極東裁判で、１０人のＡ級戦犯が絞首刑になった。それを、聖なる戦いだと書いてある所へ、時の内閣総理大臣が行くとは、いかなることかと、そう思います。

どちらの腹が奥深いのか、日本と中国と、どうでしょう。私は家でもそうなのですが、完全に孤立しています（笑）。わかりますか、何故孤立しているか。あれだけ朝から晩までテレビで、中国は馬鹿だけしからん、南沙諸島、東シナ海にどんどん進出して来る、飛行機も異常接近してきた、防空識別圏も勝手に作った、こればっかり放送する訳です。朝から晩までやっている。これを皆で見ている。今の若い人は新聞を読まないですから。新聞には論説記事とかがありますが、テレビは煽るだけです。それと何て言うのですか、インターネットとかスマホとか、あれを歩きながらやっている。そうすると、彼らは完全に洗脳されているのです。悪いけど。

だから中国へ行く人が、激減している。日本から中国への留学生も激減です。８０％の人が中国は嫌いだという。では、本当に嫌いなのでしょうか？あれだけいろいろと報道されているけれども、本当に彼らがそうなのか、誰も自分で調べたことはありません。でもテレビやラジオでやっているのだから、本当でしょうと。これが、今の日本なのです。

我々のような、もう８０歳に手が届きそうな人はね、考えますよ。じゃあなぜ防空識別圏を中国は設定したのか、じゃあなぜ靖国神社への参拝に反対するのか、そして長い歴史を紐解けば尖閣諸島は誰のものなのか、誰のものでもないのですけれどね。といったことについて、探求する人はいない。もう面倒くさいから、あいつらは悪い奴だ、と決めてしまいたいのです。簡単だから。

この間も北京へ行きましたが、観光客は誰もいませんよ。長富宮飯店という日本が作ったホテルがあるでしょう。観光客ゼロ、ゼロに近い。我々はビジネスの代表団で行き、そこに泊まったのですが、あとは中国の人たちばかりです。それくらい減っているから、日本の旅行社は商売あがったりなので助けてくれと言っていますが、助けようがない。これが今の実態です。

■日本はどこへ向かうのか？

私が先ほど申し上げたように、日本の社会には大きな断裂が起きています。我々のような世代、皆さんも同じような世代の方が多いと思います。そして若者、あるいは現実の社会に直接コンタクトしていない人たち、家でテレビやスマホばかり見ている人たち。その両者の間には、認識のギャップがものすごくある。これは誰の責任なのか？これはねえ、私が言わなくても皆さんもお判りだと思います。皆さんが選んだ政治家の責任ですね。彼らはタダでやっている訳ではない、何千万円もの年俸を私たちが払って頼んでいるのですよね。それともう一つは、メディアの責任です。メディアに対して発信をしなかったら、もうどうにもならない。メディアが判ってない。あるいは、変に言うとクビをかられる。官邸の都合が悪いことを新聞が書いたら、情報がもらえませんよとなる。

かなり抵抗しているのは、先ほどから話の出ている東京新聞。これはかなり抵抗しているけど、なかなかスクープは難しい。人の書いた記事の後追いになる。だけど、コメントはできる、論説はできます。そんなことで、日本の社会は今、分裂を起こしている。あと十年経ったらどうなると思いますか。僕らはいなくなる。戦争を知っている世代はいなくなる。戦争を知らない世代が、この国の主役になるのです。その人たちは、もう歴史のことは関係ないと。ようするに、日本は誰に食わしてもらっているのか、誰に庇護してもらっているのか、となる。

日米安全保障条約を結んだときがスタートです。私たち武力は持ちませんから、あとは助けてください。憲法９条で武力は放棄しますから、あとは助けてください。基地はすべて提供します。何人でも来てください。とやってしまったから、最後までずるずると来て、世界でもこんな先進国はありませんよ。日本だけですよ、いくらでも基地を作ってくれって言ったのは。沖縄だけの問題ではなくて、東京にも基地があります。赤坂にもある、ヘリコプターの基地がある。そうすると今、何が問題かというと、日本の将来は如何にあるべきか、ということを誰も考えなくなってしまった、ということです。

若者はですね、ものすごく情緒的になってしまった。米国に守ってもらっているのだから、米国の言うことを聞かなければならない。米国の言うことを100％聞いていれば、日本の外交はできる。中国の言うことを少しでも聞こうとすれば、米国がうるさいからちょっと止めておこうと。これが実態ですね。

ですから、日本がこのまま行くと、今若い人は情緒的だと言いましたが、日本が独立してやっていくのであれば、核を持つべきだと、こうなるのです。石原慎太郎が言っています。だから日本は原発を止めない。プルトニウムがいっぱいになった。いつでも核弾頭ができますよ。

だけど憲法９条で戦争は放棄しましたと言って、歯止めを掛けてきた。ところが、米国から独立してやっていくとなったら、どうなりますか。若い人は、それならもう少し武器を持って、核を持って、北朝鮮にも侮られないようにしたい、中国に馬鹿にされたくない、となります。間違いなくこうなります。これは発想が単純なのです。右か左かなんです。

日本人はそんなにアホだったのか？！どう思いますか？１足す１は２だという、そんな算術しかできないのか、連立方程式はできないのか･･･。１引く１はゼロ、そんな算術しかできないのですか？連立方程式を解き、微分積分をやるから日本人は立派だったのです。今の人は、悪いけどできない。私たちはそれをやろうと言っても、メディアがそういう記事は書かない。

■問題の本質はどこにあるのか？

勝手に言いたいことを言っていますが、いいのでしょうか？（笑）そういうことですから、日中関係はですね、例えば歴史認識の問題は、それは日本には日本の立場があるだろうと、中国は言うわけです。安全保障条約を米国と結んで、それがビールの蓋になってアジアは平和になっているところも、私たちは理解できない訳ではない、と。日本の安保も認めましょうと、いうことでずっと来ている。

それから靖国神社については、私たちは被害者なのですよと。あなたたちは加害者なのだと。加害者の最たる東条さん以下１０名の戦犯があそこに祀られている。祀ったのは松平という宮司で、政府が勝手なことを言ったらいかんなんて言っていますが、あそこは戊辰戦争で戦った人の神社ですから、ローカルな神社なのです。それが何故、日本国家の神社なのかというのだけど、それを祀り上げて、「靖国で会おう」――と言って、みんな戦争に行った。戦争で死んだら、靖国に祀った。それはそれでいいけれど、極東裁判で裁かれ極刑となった人まで、祀っている訳です。

そこに、日本の政治家のトップが行くのは止めようということで、実は日中間で秘密協定というか、ある種の協定を結んだのです。ですから、総理大臣と官房長官と外務大臣は行かないと。その他はまあ目をつむります、まあ日本にも右翼もいればいろいろな人がいるのだから、と。これは、中国の懐の深さです。

次に尖閣問題ですが、元をただせば、サンフランシスコ条約というのは、日本と米国の単独講和なのです。戦争に参加した中国も入っていない、参加もしていない。ソ連は参加したけれどサインはしていない。それで講和を結び、尖閣の所有をどうするかもいろいろとなって、台湾のものだとかややこしくなった。

それで、田中角栄が訪中したときに、日本の右翼、とくに青嵐会という親台湾派が、あれはおかしいから周恩来と話をつけて来いと、田中角栄を送り出した。そして訪中したら、中国は二分論といって、戦争をした軍閥は悪いが日本の国民は悪くないと、毛沢東と周恩来は二分論を言い、賠償を放棄した。そうして手を握った。田中さんは全てが終わったその後で、なんと言ったか、あの尖閣の問題はどうしましょうか、と言った。いやそれは止めたほうがいいでしょう、ここでその問題を出したらキリがありませんから、日中共同宣言はできなくなります、そう中国側が言って、棚上げになった。

そのときの当事者が日本にはいます。一人は当時の条約局長だった栗山尚一さん。そして、先日亡くなられた橋本恕さん、元駐中国大使、当時の中国課長です。この時の、対話のメモがない筈がないのです。中国側は綿密にメモを残しています。これが実態です。

これはもう棚上げしかないのですよ。いろいろなことを言い出したらお互いに自分の主張はある。ところが日本は、尖閣諸島は我が国固有の領土で、歴史的にも国際法上もなんら問題がないから、あなた方の言うことは一切受け付けませんと。よく言うでしょう、門前払いって。外交に門前払いなんかある訳がない。話し合いで解決するのです。話は聞かない、寄らば斬るぞ、です。それでは中国は怒るでしょう、いくらなんでも。怒ると思いますよ。それでややこしくなってきている。胡錦濤さんは、民主党で総理大臣だった野田さんに、これはちょっとやめてくれと言ったのだけれど。

■政冷経熱という二分論

ですからこの尖閣諸島の問題は、もう棚上げ論しかないのです。領土は一歩たりとも引かないなんて言っていたら、話にならない。お互いの話し合いで棚上げにして、共同開発をすればいいのです。わざわざあの周辺で、中国と漁業協定まで結んだのですよ、一時は。今、台湾とは漁業協定を結んで、具体的に棚上げになっている。これが領土問題。

そして、もう歴史認識問題についは言わずもがな、どうするのか。今年３月だったか、河野洋平さんが率いる国貿促のミッションで私も一緒に行ったのです。中国は副総理の汪洋さんが出てきて会ってくれました。中央政治局委員ですね。昨年も彼が会ってくれた。去年の彼の話と今年の話で、ものすごく違ったところが一点ありました。この難しい環境のなかでよく来てくれた、ありがとうと、彼はそう言った。経済交流は大いにやりましょうと。

経済交流は日中でどうなっているか、皆さんご存知ですか？日中貿易は、かつては３，３００億ドルまで行ったのです。今、日本の対外貿易相手先の圧倒的な１位ですよ、中国は。昔は米国だった。米国とは落ちてきていて、今は中国が圧倒的に１位です。我々商社は、中国がなければ食っていけない。そんなことは誰も言わないけれど、知らん顔して商売しています。日本から中国へ出ている企業は、２５，０００社、約１，０００万人の中国人の雇用を生み出しているといわれています。これが日中経済交流の実態ですよ。日本で作ってももうコスト高でダメなものは、中国へ行っている。中国から持ってきても商売にならなかったら、中国で売る。あるいは、中国から他の国へ輸出する。ですから実は、日中貿易は少し減っています。３，３００億ドルから、３，０００億ドルちょっとになった。それはある程度はやむを得ない。事業が中国へ出ていって作っているのですから、それは貿易にはならないのです。一部の部品とかはなりますが。そういう、日中の貿易関係を大事にしましょうと。

そうして、例えばＰＭ２．５とか、中国は今、環境問題が大変ですね。湖の汚染も激しい。河には垂れ流しで、どうにもならない。水が飲めない。本当はそればかりではないけれど、日本のテレビはそればかり報道するから（笑）。日本はかつて、公害問題、環境問題を通ってきています。東京の空は真っ黒だといわれていた時代があった。ですから我々は、日本には、環境問題を良くするためのノウ・ハウがあります、それで協力しましょうと。

先日、東京都知事の舛添さんが北京市に行きましたね。石原はダメだけど舛添はまあい

いと、北京市長も会った。北京市の環境浄化に大いに協力できますよ。汪洋さんも環境シンポジウムをすぐにやりましょう、こう言ってくれた。ここは良かった。

あっ、これは変わったなと。それはそれだけ厳しい状況なのです。

■中国の新しい体制

中国は習近平体制になったでしょう。習近平という人はね、ここでこんなこと言って間違ったら困るけど、かなりの人物ですよ。ぼくは４回会っています。寡黙ですね、あまり話しません。だけど彼は、自分の言葉で語る。お父さんは習仲勲という革命の元老の一人ですけど、習近平は文革で地方へ送られ、辛酸をなめ、いろいろなところを歩いていますから。まあ言ってみれば、修羅場をくぐって来た男です。

習近平という人は、福建省の省長を務めた人ですが、この人がトップに上りつめるなんて誰も思っていなかった。ところが中国共産党にも民主化の流れが押し寄せてきていて、中国共産党は３回か４回、内部で投票をやっています。次は誰がいいか。この前までは、鄧小平が決めていたのですから、江沢民、胡錦濤までは。今度は決める人はいない。みんなで決めないといかん。何度も投票をやった結果、残ったのが彼だった。やっぱりそれはねえ、それなりの人物だと思いますよ。私も４回会っていろいろな話もしましたが、これはなかなかの人だなと思っています。

ところが、日本では評判が良くない。あれは独裁者だ、権力を全部集中させている。でもね、権力を集中させなかったらやれないですよ、仕事は。安倍さんが今いろいろやれているのは、権力を持っているからです。彼が持っているのは、人事権です。６月に内閣改造をやるぞと。お前をクビにするかどうか、これで瀬踏みをしている。

習近平さんは３つの権力を握りました、党と政府と軍。特に中国では人民解放軍の勢力を握ったら強い、軍です。それを彼は、一年かかってやって来ている。習近平という人は、よほどのことがない限り、二期 10 年やるのですから。失脚しない限り。そうすると、最初の５年、2015 年までは、彼はまわりの整備をすべてやります。最大の問題は、ポケットに入れる汚職ですよ。汚職を叩く。トラもハエも同じだ、と言ったんです。強い奴も同じだと、まあ周永康のことだと思われていますが、トラもハエも叩くと言った。

今中国の街へ行ったら節約令が出ていて、贅沢な接待はすべてノーです。大きな料理屋さんは潰れそうです。かつて日本でもノーパンしゃぶしゃぶとか、変なこと言ってすみませんが（笑）、大蔵省の接待事件がありましたね。習近平は北京の街角へ行って、餃子を食べてみせたから、餃子屋は繁盛している（笑）。まあ、そんなことで、先ずは汚職を叩く。そんなことをしているのは、軍にもいます。軍のワルを叩くのは、よほどのことがない限りできない。でもこれをやろうとしている。

それから、今、中国は大きな曲がり角なのです。今までは、モノを作れば売れました。世界の工場と言われて。コストも安いし。でも、作れば売れるという時代はやがて去って行く。いいモノを、作らなければいけない、少量でもいいから、いいモノ。それから、産業構造を改革して行かなければならない。エネルギーをばんばん消費するようなものは止

める。そして環境に悪い産業は止める。そういうことも必要。そうすると、今の中国はですね、ものすごい曲がり角なのです。その曲がり角を、どう乗り切れるのか。

これはねえ、習近平さんは寝ている暇はないと思う。

■中国とどう向き合うのか

そういう習近平時代が、今来ています。その中国と、日本はどう向き合うのか、という話になって来ます。

ＴＰＰってご存知でしょう、環太平洋パートナーシップ協定。米国はですね、自分の価値観を日本に受け入れろと、こう言ってきた。関税だけじゃありませんよ、豚肉とか牛肉とか米とか、もっともっと奥が深い。ようするに、米国はモノ作りに失敗した。いや失敗したのではなくて、モノ作りがダメになって、モノ作りは日本へ行き、日本から中国へと行ってしまったから、米国はもうモノ作りでは生きて行けない。モノを作ることで生きて行けるのは、武器を作ることだけ。

そうすると、後は金融ですよ、金融でどう世界をリードするか。だから米ドルです。米ドルをどんどん刷っている。ドルは日本がたくさん買ってくれます。国債を１，３００億ドルも買っている、我が国は。中国も 1,500 億ドルくらいの国債を買っています、米国のですよ。だから中国がウォーと吠えたら、米国はもうアウトなのです。日本は言ってみれば手先だから、米国にしてみたら日本は自分の手先だから、日本に持たせるのは当たり前だと思っていますから。こんな刺激的なこと言ったら、今日は帰してもらえないかな（笑）。いや本当にそう思っていますよ。

だからそこでＴＰＰをどうするのか？米国は自分の価値観、平和で民主的で自由な市場経済をどうやってやらせるかと。日本は元々違いますね。日本は官僚国家で、霞ヶ関が燦然と輝いて、その下でいろいろとうまくやって来た。それはまあ今はだんだん変わって来たけれど。しかし日本のＤＮＡというのは、米国のＤＮＡとは異なるのです。むしろ中国のＤＮＡに近い。それは皆さん、孔子や孟子を勉強しているでしょう、友あり遠方より来るまた愉しからずや――。

ここにきて米国は日本に、米国流を押し付けようとして来た。日本がアジアで、ＴＰＰを受け入れたら、アセアンの国はすべてなびくと思っている。これは日本の、大いなる間違いとなる。これはたぶん今年中には無理でしょう。オバマさんが仮にＯＫしても、米国の議会がありますから、議会がＮＯと言ったらできないのです。議会に力がある。

今、我々がやるべき大切なことは、中国とどう組むか、なんです。中国との自由貿易協定をどうするか、ＦＴＡですね。日中に韓国も入れば、これは何かやれそうじゃないかと、言ってこれまで積み上げてきた。元々は金大中さんが提案をして、それが日本でずっと官僚の間で暖めてきていた。ほぼ出来上がっているのです。ところが、日本の霞ヶ関は米国が怖い。日中韓が先に出来てしまったら、ＴＰＰなんか関係ないやとなるから。

米国は絶対に認めたくないから、ものすごい圧力を掛けて来ますよ。昨日、米国のキャンベル前国務次官補が、公明党の山口代表に秘密会談で会いに来ています。集団的自衛権

を公明党はＯＫしろと。米国はお金がだんだんなくなって来たから、中東やアフリカで戦争をしてもお金がないと続かない。それに米国の兵隊さんももう疲れて来ているから。日本の自衛隊に、来て助けてくれと、言いたい訳です。我が国にはあまり関係がないような所へ、自衛隊が行くのです。その話し合いを、公明党は頑として聞かない。創価学会が反対していますから。創価学会がＮＯと言ったら、公明党の政治家は当選できません。ところがどうもやっぱり、権力の座からは外れたくないらしい。公明党支持の方、ここにおられるでしょうから、これ以上は言いませんが（笑）。

■今やるべきこと

まあそんなことで、いろいろとありますが、今中国とどう向き合うのか、を考えることがものすごく大切です。その為には、二つのことをやらないといけません。

一つは、尖閣問題は棚上げ。もう一つは、靖国神社には行かない。少なくとも総理大臣は行かない。これを腹に入れて、習近平と安倍晋三が会えばいい。今年１１月のＡＰＥＣは中国で開かれますから、中国がホスト国ですから、向こうがやろうと思えば出来る。事前にある程度言わなければダメです、受けてこない。寝技がいるのです。その寝技は誰がやるのですか？大類さんにやってもらいたいね（笑）。

こうしたことを、今までは日中間でやって来たのです。そういう人たちがいたのです、日本にも中国にも。今日本にはその寝技をやる人が誰もいない、誰もいませんよ。これはもう最悪の事態なのです。

このまま行くと我が国はどうなるかと言えば、見事に明らかなのですが、日本の米軍の基地は絶対になくならない。オスプレイはどんどん来る。なんでオスプレイが来るのか、それは尖閣があるからです。そういう理屈です。尖閣を守る為には、航続距離の長いオスプレイが必要だと、こう言っている。実際はそうではないですよ。北朝鮮がどうだとかこうだとか。北朝鮮を出せば、日本は納得する。ですからまあ早い話が、今回の拉致被害者の話だけでも先に解決してくれたら、米国に対するプレッシャーにはなりますね。だけど米国は、それは認めたくないでしょう。核とミサイルがパッケージじゃないとやらない、そう言っている。

ですからこの二つの問題を処理して、まあ、連立方程式を解かなきゃならん訳ですよ。我々は独立国家なのですから、米国の５２番目の州ではないのですから。今まさに、ハワイの次の州に成り下がってしまっている。独立国家なのですから、米国とも中国とも手を握って、中国とアセアンも含めてアジアの安全保障を考える。米国が必要なら、米国もどうぞ来てください。米国は欧州でも居場所がなくなって、もうみんな太平洋に出てくる訳です。だいたいモンロー主義というものがありますから。立派な国があって、３億５千万しか人がいなくて、資源はいっぱいありますでしょう、米国というのは。そこへ帰ればいいじゃない。それをいやいやオレはアジアだと言って、クリントンさんや誰彼が来てえらそうなことを言っているから、中国も頭に来る。

最後にひとつ申し上げたいのは、文化の問題です。皆さんは、我々は欧米の文化と価値観を共有していると思いますか？そこまで突き詰めて、日本の民族、文化というものをお考えになられたことがありますか？欧米の文化の根源はイエス・キリストですね。我々は八百万（やおよろず）の神です。神道もあれば仏教もあれば、まあ儒教が宗教かどうかは別として。それを全部、我々のなかにひっくるめて生きている。お坊さんを呼んで、仕方がないからお経をあげてもらっていますと言うけれど、これをやらなかったら気持ちが悪いのです。七回忌とか、そうでしょう。それが日本の文化なのです。中国も似ているのです。

中国は、それはそれで孔孟の思想はどこかへ行ってしまったじゃないか、と言われていますが。習近平さんのやっていることは、孔孟の思想、まさにその通りです。毛沢東の書斎は漢籍ばかりだった。

■東アジア共同体

そうなると、その後に来るものはいったい何なのか？

東アジア共同体です。東アジア共同体をどう作るのか。それに我々はどう参画するのか、できるのか。日本がリーダーシップを握れるのか。その為には、日中が手を握らなければあかんのですよ。恐いよね、へたすれば、米国が乗り込んで来て、外務省の役人ぜんぶクビだと言われたら、やれない。

だから、政治家が必要なのです。一方に偏らず、両方見られる政治家を、我々は養成しなければならない。５０代か６０代で、そういう政治家が必要なのです。８０に近い男がえらそうなこと言っているけど、こんなのはもう何の役にも立たない。実際は５０代とか６０代の人がやるのでしょうから。だけど日本はそれをやらなかった。小選挙区制は、最悪の制度だった。田舎の人が入れてくれれば出て来られるから、人間は育ちませんよ。ダメだって言っているのに、やってしまった、２大政党政治だと言って。

後は、習近平さんと差しで話して、日中間はＦＴＡをやり、そして東アジア共同体をやるぞと言ったら、安部さんは救国の総理になりますよ（笑）。いや本当に。だけど、殺られるかもしれない。でも日本はね、割と暗殺というのがないね。前に社会党の書記長が暗殺されたけれど、それ以外はない。日本人は割とゆるやかな民族なのです。それが我々のＤＮＡだから。後は度胸ですよ、米国に対して少し腹を出して、一人では難しいかもしれないけれどね、今は米国贔屓の人たちで周りを囲っているから。そうでない人は自民党ではダメなのかな、と思いますけど、どうなのでしょうか。

これはしかし、自民党の問題ではなく、皆さんの問題なのですよ。皆さんの一票も学生の一票も、同じ一票です。民主主義というものは、考えてみればアホな制度なのです。チャーチルもそう言いました。民主主義というものは、アホな制度だけれど今はこれしかない、と。何を言っているのだ、でも確かにそうかもしれない。

皆さんみたいに経験豊かな人の一票も、スマホばかり見ている若者の一票も、同じ重さなのです（笑）。それを、中国は心配している訳です。中国共産党が、一党独裁で中国を引

っ張る、その替わり一生懸命人材を養成しますと。もう習近平の後継者も育てているのです。それくらい彼らはやります。中国共産党組織部というのがあってやるのです。日本はもう小選挙区制で同じ一票でやるから、太子党ばかりです、日本で出てくるのは（笑）。地盤とカバン＝お金です。なかにはかつては優秀な人もいたけれど、今は会社のサラリーマンスタイルになってしまったから。

■最後に言いたいこと

最後に申しあげますけれど、腹をくくって、日本は独立国家だと。米国に守ってもらうのは、これは仕方がないけれど。中国や韓国やアセアンとも経済交流を進めて行かないと、安倍晋三の第三の矢は出来ませんと。それくらいのこと、言わないといかんね。第三の矢はできませんよ。今朝の新聞では年金で株を買えと言っています。年金で株を買えば、株価が上がる、一時的には。しかし、ドーンと下がったらどうするのか？　年金は大損ですよ。そういう危ない綱渡りを平気でやろうとする。

連立方程式も解けるような頭の良さと、度胸の良さ――天下国家の為に頑張る、という度胸がなければ、政治家ではないです。

ということで、この辺で失礼してよろしいでしょうか。（拍手）

お前の話はけしからんとか、何でもご意見・ご質問をお受けします。

■質疑応答

（質問）日本では意識のギャップがあるというお話でしたが、政治家やメディアもぜんぜん判っていないと。では、日本の将来は誰に助けてもらえるのか、これから日本はどうなって行くのか？先生のお考えをお聞かせください。

（回答）助けてもらう必要はないでしょう。誰かに助けてもらわなければ、日本民族は生きて行けないのですか？　我々は自立すればいいのです。自立する為には、核が要るのか？しかしそれは、もう世界の大きな流れに逆行するだけですね。自分を守る為に、一定の武力は必要かもしれない。隣の人がワァーっと言いに来たら、ちょっと待ってください、というものは必要かもしれないけれど。自立することです。幸いにも陸の国境がないのですから。だから我々はやって行ける筈なのです。

誰かに守ってもらわないと日本は生きて行けない、と言ったら、それは最初から議論にならない。それはもう米国しかないでしょう。

（質問）中国との関係がギクシャクしています。船が入り込んで来たり……

（回答）船が入り込んで来たって、そればっかりメディアでやっているから。その前の経緯は知らないでしょう？　まあいろいろある訳です。例えば漁船が体当たりしてきたと。日本の船が囲んで逃げ場を失くしたから、体当たりしたのです。そんなことは誰も言わない。

（質問）日中国交正常化後に、ＯＥＤ経済開発援助の政策をとり、戦争責任のケジメもつけない、賠償もしなかった、そこが問題の発端ではないかと思いますが、如何でしょうか？

（回答）毛沢東と周恩来がなぜ賠償を放棄したか。賠償を放棄しなかったら、日中正常化はできなかったでしょう。賠償放棄が判ったから、日本は、田中角栄は行ったのです。ですから、当時の国際情勢で、中国共産党は日本と手を結ぶ必要性があった、ということが一つの客観情勢としてある。その為には、二分論をとったのです。悪かったのは日本の軍国主義者で、大多数の日本国民は被害者であると。軍国主義者は叩くけれど、被害者である国民が、今後数十年にわたって巨大な不利益を被るような賠償は、払わせるべきではないと。という理屈で、周恩来は全中国を説いて歩いた。

では、その時に徹底的にやればよかったじゃないか、と言ったら、日中国交正常化はできていない。賠償額は天文学的な数字になりますよ、それは。払える訳がない。だから中国側は賠償を放棄した、だから田中角栄は行った、そして手を握った。今になって、それは間違っていたんじゃないのか、と言うことはちょっとできない。

だけど、戦時中に例えば三井船舶がやったものは払ってくれよと。それはドイツもやっています。シーメンスだって、もうみんな払っています。ですから、それはまあしょうがないなと。

（質問）賠償問題がこれから燻ぶり出されるということはないですか？

（回答）それは、日中関係、政治関係に掛かっていますね。日中関係が蜜月の時代を迎えれば、そんなことは言わないでしょう。そういう意味では、私は楽観的です。

しかし、一般的な日本人たちは、中国は黙ってなんかいないぞ、うるさく言ってくるぞ、だからあんな人たちとは付き合うな――となっているのが、80％は中国が嫌いという調査結果なのです。この辺の考え方には、個人差が出て来ますね。

（質問）リーマンショックもそうですが、長引く不景気によって日本の中小企業は大きな痛手を負いました。中国の安い人件費ばかりを頼りとせずに、日本の大企業がもう少し国内の中小企業を守ることができなかったのか、中国に経済大国を譲らなくてもよかったのではないか、とも思うのですが。

（回答）それは無理だったでしょう。日本はずっとデフレですから。しかもバブル経済がはじけて。中国は広大な領土があり、広大なマーケットを持っていますから。１３億という人口もいる。日本はもう少子高齢化で、どんどん人が減っている訳ですから。それは無理ですよ。戦えませんよ、こんな国と、経済的にいくら頑張っても。

戦えるとしたら、優秀な技術、それで戦う以外にはない。だけど、技術もやがて彼らは追いついてくる。そうなったら、日本はどうするのですか？　日本は少子高齢化で人口は減り、しかも外国人の労働力は入れたくないと。日本は一つの民族なのだから、等と言っ

て。これはもう、我々に未来はないでしょう。あると思いますか？
　だから、ＦＴＡをやりましょうと。自由貿易協定を結んで、ここはこちらがプラス、そこは中国がプラス、お互いがプラスとなるようにしよう。ＴＰＰは、日本は米国の従属国だとされてしまっているのだから。まあ、この話を始めたら、あと２時間も３時間もかかるね（笑）

（質問）今日は大変面白かったですし、貴重なお話でした。２ヵ月ほど前に、ドイツ語翻訳家の池田香代子さんの講演会を聴きました。秘密保護法に反対する会合だったのですが。そこで、池田香代子さんがたまたま中国へ行った時に、向こうのテレビでは、日本の自衛隊や軍団がどんどん尖閣諸島を包囲していると、ガンガン流していた。そうして日本に帰ってみたら、今度は日本のマスコミが、中国はどうだこうだとガンガン流している――というのですね（笑）。日中が、お互いにお互いを利用して煽っている。頑張っていると言われる東京新聞を読んでいても、なかなか踏み込んだ今日のようなお話は出てきません。多角的に中国を見たいと考えると、今日のようなお話が、日常的な情報としてあればいいな、と思いました。

（回答）ありますよ。でも本屋に積み上がっている本は、中国は明日崩壊するとか、ダメな国だとか、そんな本ばかりです（笑）。まじめな本は、隅のほうに寝ています。大類さんも頑張っているけど、シンポジウムも勉強会もいろいろとあります。しかし、私は最近つくづく思うのだけれども、そういった会合に、現役世代が来ないんだ、現役の人が。まずＯＢで、いっちょう上がりの人（笑）――こう言ったら悪いけど。会社や実業界で、現役で何かをやっているような人が、そういうところに出てきて意見を言うということが、まったくないのです。日本は。だから、何しているのかな、寝ているのかな、と思うと、それは月給もらっていますから、ちゃんと働いています。
　だけど、そういうことに割と関わらない、という世代になってしまった。なんとなく分かるでしょう。下手に関わると、何か変なことになるのではないか、と。月給をもらって、家庭が円満で、子どもが立派に育って、それでいい。私たちの時代は、会社に入って、将来何になりたいかと聞かれれば、社長になりたいと言った。今、社長になりたいなんて言う人はいませんよ（笑）。そうでしょう？みんなもう諦めているのか、そういう発想は、我が国ニッポンにはもうない。非常に豊かになった。豊かになったから、うつうつとして盛り上がるものがない。年寄りはうつうつとして盛り上がっている（笑）。私もここで大きな声でワーワーと言っていますが、何の役にも立ちませんよ。家でも言われています、外へ出てワーワー変なこと言わないでくれと（笑）。

それからね、中国は言論を弾圧していると言うけれども、中国と言う国家を、中華という社会、世界を、きちんと見る必要がある。57 の民族がいる。92%は漢民族ですが、８％は少数民族です。その少数民族が 56 もいて、省の数が 30 いくつもある。みんな違う。話している言葉も違えば、社会風俗も異なる。それを一つにまとめて行かないと、やって行けない。だから、中国共産党は、戦後６５年間ずっと生き残ってきた。

習近平さんの時代に、政治の民主化をもうやらないといけない。習近平はどこまでやれるのか。彼の任期の前半の５年で、どこまでやれるか。それをやる為には、軍と党と政治と、この３つを握らないと出来ない。それが今の、習近平のやり方なのです。それを、日本のメディアは独裁者だと。胡錦涛さんは評判がいい。改革開放を進めたと。だけど結局彼は出来なかった。そういうことを考えたら、中国は中国の価値観と、中国の客観情勢のなかで、１３億５千万人の大国を率いて行く。

日本は日本という、１億人の小国ですよ。小国は小国なりの、凛とした生き方がある筈でしょう。だから憲法９条を、あなた方はずっと守ってきたのですよね。そうじゃなかったら、守って来られないでしょう。それが今、大きな曲がり角に差し掛かっている。

安倍晋三さんの考えが分からない。価値観外交と言っていますよね。価値観を共有する国とやります、と言っている。韓国とは価値観を共有できる、では中国とはどうですか？自由がない？　では中国で考える自由とは何か、中国で考える民主とは何か？

私は大学の先生もやっていましたが、若者はね、そういう考える勉強を何もしてきていません。それでは育ちませんよ。世界はものすごく複雑なのです。単純なのが一番簡単です。米国にくっついていればいい。何でもやってくれる。オスプレイが来れば、どうぞいらっしゃいと、基地も提供します、お金も差し上げます。日銀の黒田さんは日本円をどんどん刷って、日本円をどんどん出す。だけど、そんなことじゃあアカンですね。

すみません、お答えになっていませんね。

（質問）商社というのは、ＴＰＰに対して、一方アジアとの結び付きが相対的に弱くなることに対して、どういった戦略を立てているのでしょうか？

（回答）商社は儲かれば何でもやります。日本の最大のパートナーが米国だった時代は、商社の社長はみんな米国で仕事をして偉くなった。その頃中国は、すごくなりますよと言っても、誰も聞かなかった。実際に動き出して、中国がどんどんと大きくなって来たら、さっと変わる。もう少ししたら、中国駐在のトップが、社長になる時代が来ます。これまではみんな米国です。

商社というのは、あらゆる情勢を見て、変化に機敏に対応する。機敏にと言えば聞こえはいいですが、まあ儲かることならなんでもやると、そういうことですな。今は中国だけれども、中国が成長率７％台まで落ちて来たから、じゃあどうするかと、首を傾げている経営者もいますが……。ここで首を傾げたらダメで、今こそやらないとつまらないよと、私は言っている。まあその辺になると、会社の、商社ごとの戦略の問題になって来ますね。

そんなところで、よろしいでしょうか。

どうもご静聴ありがとうございました。（拍手）

「国境を越えて共に考える旧満州と満蒙開拓」

～「満蒙開拓国際シンポジウム」を開催　～

満蒙開拓平和記念館
副館長・専務理事　寺沢秀文

去る１０月１２日、「満蒙開拓平和記念館」のある長野県阿智村の「阿智村コミュニティーセンター」において、「国境を越えて共に考える旧満州と満蒙開拓」というテーマで国際シンポジウムが開催されました。

当シンポは、米国・中国・日本で旧満州または満蒙開拓の調査研究に携わる民間研究者並びに満蒙開拓二・三世出身研究者を招いてのパネル・ディスカッション形式にて開催されたもので、同時に、この１０月１日に満蒙開拓平和記念館の中に新たに併設した「満蒙開拓研究所」（当方が所長に就任）の開設記念イベントを兼ねてのものでもありました。

旧満州や満蒙開拓に関する調査研究等については、当然ながら主には日本側でされていることは言うまでもありません。もちろん、その舞台となった現地の中国側でもこれらについての研究者も少なからずいらっしゃいますが、この中国側での研究内容等は学術研究者等を除いては日本国内でも余り知られていないところです。ましてや、日本、中国以外ではこの旧満州や満蒙開拓についてはほとんど知られていないのが実際です。また、朝鮮半島からの満蒙開拓団送出のことも知る人は研究者等を除いてはほとんどいません。

満蒙開拓を総体的に考える時、日本側からの視点だけではやはり十分とは言えず、当方自身としても、当記念館の開設以前から、この旧満州並びに満蒙開拓について、日本以外の中国等海外からの視点等も含めて、多角的、国際的に検討を重ねていく機会を持たなくてはならないという構想を持っていました。また、この６月には当記念館のスタッフ等により旧満州への調査訪中を実施、その中で、以前から交流のあった中国側の「ハルピン市中国養父母連絡会」との交流、また同会があの７３１部隊陳列館の中で開催している「中国養父母特別展」を実査してきたこと等もあり、中国側との研究交流等を更に進めなくてはならないと思ってもいました。

この「中国養父母特別展」のことは以前からこの「星火方正」でも紹介されており、その紹介記事を書いた方、前記のハルピン市中国養父母連絡会の事務局長であった石金楷さんは、日本人残留孤児である奥様に同行して今年１月から日本に移住し、東京都内でお暮らしになっていることもあり、この石さんにも是非どこかでお話をして頂きたいと思っていました。

そんな折りも折り、この「星火方正」でも以前に紹介させて頂いた、旧満州からの引き揚げ実現に大きな功績のあった在満邦人救済代表団のリーダーであった丸山邦雄氏の三男であり、丸山邦雄氏らの活動を著した著書『満州・奇跡の脱出』を日米双方で出版されたポール邦昭丸山氏が来日、当記念館にも再訪問されることとなりました。ならば、この機会に、石さん等にも声をかけ、以前から構想を持っていた米・日・中の三ヶ国の主として

民間研究者等によるミニ国際シンポを開催しようと思い立ちました。そして、最初に相談したのは、この方正友好交流の会の理事でもあり、中国残留婦人の三世でもある長崎大学の南誠助教でした。南助教は満蒙開拓平和記念館のアドバイザーのお一人としていつも助言等して頂いている方でもあり、またこの２月には、この「星火方正」の前号でも紹介させて頂いた通り、阿智村で長崎大学主催の国際シンポジウムを開催し、中国側の著名な研究者等を招いてのシンポジウムを実現させてもいました。

その南助教からの協力、アドバイス等も得て、かくして実現なったシンポには、下記の４名の登壇者によるパネル･ディスカッションとなりました(以下は当日配布のパネラーの紹介)。いずれも国籍が異なると共に、また何らかの形でご自分や家族等が旧満州に関わりを持つ民間研究者並びに若手研究者の南助教という共通項を持っての多彩な顔ぶれでした。

◎ポール邦昭丸山（ポール・くにあき・まるやま）

＊１９４１年東京生まれ。現在はアメリカ・コロラド州在住。日系三世。在満邦人救済代表団のリーダーであった父・丸山邦雄氏(故人。飯山市富倉出身)の三男。終戦の冬を中国・大連で過ごす。

＊アメリカ在住の民間研究者であり、父・邦雄氏の活動等をテーマとした大著『満州・奇跡の脱出』(英文・和文)の著者でもある。

◎石金楷（せき・きんかい）

＊１９５７年中国・黒竜江省ハルピン市出身。会社員勤務の傍ら２００１年よりハルピン市中国養父母連絡会の秘書長(事務局長)として長年ボランティア活動。今年１月に日本人残留孤児である奥さんと共に永住帰国し現在東京住まい。

＊ハルピン市の「７３１部隊陳列館」で中国で初めての「中国養父母特別展」の常設展を企画、実現した。

◎南誠（みなみ・まこと）

＊１９７６年中国・黒竜江省樺南県生まれ。中国名・梁雪江。現在、長崎大学多文化社会学部助教。祖母が下伊那郡平谷村出身の残留婦人。小学生当時に日本に永住帰国。

＊京都大学大学院博士課程修了。人間・環境学博士。中国帰国者や満蒙開拓等を研究調査。この分野での若手有力研究者の一人。

◎寺沢秀文（司会。てらさわ・ひでふみ）

＊１９５３年長野県下伊那郡松川町生まれ。満蒙開拓平和記念館副館長兼専務理事。両親が元満蒙開拓団員であったことから本業の傍ら日中友好協会活動等に参加。

＊記念館建設に構想当初より取り組む。現在、身元未判明中国残留孤児肉親調査員、長野県日中友好協会副理事長。旧満州開拓現地への調査訪中等２０回以上。

当日のシンポ会場には、遠く九州や新潟、東京などからの遠隔地参加者を含む約５０名程度の聴講参加があり、当方の司会進行の中、パネラーの皆さんからの発言に熱心に耳を傾けて頂きました。

まず、ポール丸山さんからは、お父様の丸山邦雄氏らが在満邦人帰国実現のために命を賭して日本に渡り、ＧＨＱ(連合国占領軍)のマッカーサー総司令官に面会して直訴し、あ

の葫蘆島(ころとう)からの邦人帰国実現の道を開いたという戦後秘話とも言える救済活動の概要をご紹介頂くと共に、そのことをテーマとした本をポール丸山さん自ら書こうとされたきっかけや思い等について話して頂きました。ポール丸山さんもおっしゃっておられましたが、アメリカでは旧満州のことや満蒙開拓のことなどはほとんど知られていないテーマとのことでした。また、この丸山邦雄氏らの業績についてもっと多くの人にも知って頂きたいと語っておられました。私事ながら当方の母親も、邦雄氏らの働きにより実現した葫蘆島からの引き揚げにより無事に日本に帰国出来ました。葫蘆島からの邦人帰国に奔走した丸山邦雄氏の二世と、それにより帰国出来た元満蒙開拓団員の二世である当方とが、現代になってこうして共にシンポジウムの壇上に立つことのご縁の不思議を思わずにはおられませんでした。

また、ハルピン市中国養父母連絡会の秘書長として７３１部隊陳列館の中での「養父母特別展」を実現するに際しての中心的存在であった石さんは、この特別展をやろうとしたきっかけや思い、実現までのご苦労やこれに対する反応等について紹介して頂きました。このハルピン市での特別展のことは日本国内でもほとんど知られていません。そして、これを実現した養父母連絡会もボランティアにより支えられている会であり、秘書長を務めていた石さんご自身も無給での活動であったということでした。中国側でもこういった活動をされる皆さんがいるということはもっと日本側でも知らなくてはならないことと思います。

残留婦人の３世でもあり、旧満州や満蒙開拓等についての研究者となった南誠助教からは、中国の黒竜江省に生まれ、１３歳の時に御家族と共に日本に永住帰国した時の思いや苦労等や、現在、こういった研究に従事されている中での思い等についてもお話頂きました。また、南助教からは中国側における満蒙開拓等の研究状況等についてもご紹介頂きました。南助教も、現在旧満州等に関する学究活動に関わっているきっかけとしてはやはりご自分の出自に影響があること、日中双方の友好交流の架け橋としても活動していきたいと語っておられました。中国と日本の両方に基盤を持ち、現地にも精通し、何回も現地に足を運んでいる南助教のような存在は極めて貴重であり、またこれからの活躍が大いに期待されるものであることを改めて感じました。

このシンポジウムについては、現在その報告書を作成中であり、後日、ブックレット形式にて記念館で発行する予定ですので、シンポジウムの具体的な内容等については改めてこれをご入手頂けたらと思います。

なお、今回の国際シンポを企画実施した満蒙開拓研究所は、満蒙開拓平和記念館の中の併設機関ですが、満蒙開拓という一般市民にとってはやや難解なテーマについて、市民目線で見て、これをわかり易く市民の皆さんに伝えていくという当記念館のスタンスをより充実させるために、今後も研究活動等を続けていく予定です。市民目線により運営する記念館、そしてその併設の研究所ですが、今回のシンポに登壇頂いた３人の皆さんにも客員研究員になって頂いており、こういった皆さんからのご協力ご指導等も得つつ、満蒙開拓についての研究等を続けていく予定ですので、今後ともご支援の程、どうか宜しくお願い申し上げます。

中島多鶴さんを偲ぶ

満蒙開拓平和記念館
副館長・専務理事　寺沢秀文

去る１１月７日、長野県泰阜（やすおか）村の中島多鶴（なかじま・たづる）さんがお亡くなりになりました。享年８９歳。同村から旧満州に送り出された「泰阜分村開拓団」の元団員であり、戦後は中国残留邦人の帰国支援に尽くし、「残留婦人の母」とも呼ばれ、またつい先頃まで満蒙開拓平和記念館などで「語り部」としても活躍されてきた方であり、多くの方に「多鶴さん」と慕われた方でした。

多鶴さんは１９２５年（大正１４年）、長野県下伊那郡泰阜村の農家の５人姉弟の長女として生まれ、後に旧満州に渡満。幾多の多難を乗り越えて激動の大正、昭和、平成の時代を逞しく生き抜いてこられた方でした。多鶴さんは１１月３日の朝、ご自宅にて脳梗塞のために倒れ、そのまま意識も戻らぬまま帰らぬ人となってしまいました。倒れる１週間前の１０月２８日にも満蒙開拓平和記念館で「語り部」としてお元気でお話をされており、多鶴さんが倒れたという一報を聞いた時には本当に信じられませんでした。

多鶴さんのことは残留邦人問題等に関わられたことのある方ならばご存じの方も多いことと思います。多鶴さんの活動等の中で特に知られているのは、１９８９年（平成元年）に全国放送されたＮＨＫのドキュメンタリー番組「忘れられた女たち」で、旧満州等に残された日本人残留婦人のことを取り上げたことによってでした。この番組により残留婦人の存在と多鶴さんの活動は全国的にも知られるところとなり、それ以降も長年にわたる残留邦人の支援活動等を続けた多鶴さんは平成１８年には瑞宝単光章を叙勲、信毎文化賞や菊池寛賞など沢山の受賞もされています。また、多鶴さんの半生を描いた『沈まぬ夕陽』（中繁彦著。信濃毎日新聞社刊）を通じてもその半生を良く知られた方でもありました。

多鶴さんは前出の通り、天竜川の谷間の山村・泰阜村からの「大八浪泰阜分村開拓団」の一員として１９４０年（昭和１５年）に１５歳で一家を挙げて渡満しています。この泰阜村はあの映画『嗚呼、満蒙開拓団』（羽田澄子監督作品）にも出てくる山村です。長野県内から送り出した分村開拓団としては、諏訪郡富士見村（当時）からの「富士見村分村開拓団」に次ぐ規模の大きな開拓団でした。多鶴さんは渡満の翌年にはハルピンにあった満蒙開拓青少年義勇軍の附属病院の看護婦養成所で学び、２年後には看護婦となり、当時の三江省樺川県（現在の黒竜江省樺南県）にあった「泰阜村開拓団」の診療所に勤務、そして運命の昭和２０年８月９日、突然のソ連軍侵攻に遭遇します。混乱の中、妹たちを次々と失い、終戦の冬をあの方正県の松花江河畔の村・伊漢通で過ごされています。翌年夏、多鶴さんは幾多の困難を経て、単身、泰阜村へと戻ります。泰阜村開拓団からの帰国第一号でした。現地で４人もの妹を亡くし、お父さんは終戦直前の「根こそぎ動員」により召集されてそのままシベリア抑留となり昭和２３年に帰国、また現地に残ったお母さんは中国人と再婚し、後に昭和２８年に帰国されるなど多鶴さんの御家族もまた多くの多難な人生を辿られています。

その後、多鶴さんは、泰阜村の保健婦として働く中で、この村から送り出された開拓団の中から現地に残された残留婦人３２人の存在を知ります。そして、「この３２人が全員帰国する

までは私の戦後は終わらない」と懸命の帰国支援活動を続けることになります。何度も訪中を繰り返し、その活動等が紹介されたのが前出の「忘れられた女たち」でした。１９８９年（平成元年）９月に放送されたこの番組は全国で大きな反響を呼び、それまで余り知られていなかった残留婦人（１３歳以上で現地に自分の意思で残ったとされた日本人女性）の問題が全国的にも知られるところとなり、この番組を契機として残留婦人帰国支援のためにと多鶴さんの所には２千万円を超える寄付が寄せられたと言います。

「３２人全員が帰国出来るまでは私の戦後は終わらない」と言い続けてきた多鶴さんの念願が叶い、最後の一人が日本に永住帰国したのは２０１０年（平成２２年）のことでした。多鶴さんは残留婦人の帰国支援と共に、あの旧満州での悲惨な体験を次世代に語り継がなくてはならないと、早い時期から「語り部」として全国各地で講演を重ねてこられ、また飯田日中友好協会の副会長などとしても長年活動されてきた日中友好活動の大先輩でもありました。２０年ほど前、飯田日中友好協会の中に女性委員会と青年委員会とが新設され、それぞれの初代委員長として多鶴さんと当方、共に活動に励み、共に旧満州など中国の地を旅したこともありました。戦後の国内生まれながら開拓団二世でもあった当方をいつも気にかけてくれ、「寺沢さん、後のことは頼むよ」と声をかけてくれました。そして、「あのお年で、あんなに頑張っておられる大先輩がいるのだから、まだまだ若い自分たちはもっともっと頑張らなくちゃ」と、いつも手本とし、また励みとしてきた本当にありがたい生き仏のようなご存在の方でした。

２００６年（平成１８年）から飯田日中友好協会が母体となって全国で唯一となる「満蒙開拓平和記念館」の建設計画に着手し、その言い出しっぺとして事務局長、後には専務理事として飛び回る当方をいつも気遣い、そして記念館の実現を心待ちに応援し続けていてくれたのもまた多鶴さんでした。数年前、阿部守一長野県知事に協力要請に訪問した時にも熱心に知事に訴えていた姿が今も忘れられません。そして、昨年４月の記念館開館を誰よりも喜んでくれ、そして開館後の記念館の中でも誰よりも多く「語り部」として活動し、「戦争は絶対にいけない」と語り続けてくれた多鶴さん、正しく記念館の「看板娘」でもあり、９０歳近いお年になっても頑張り続ける多鶴さんの姿は私たちにとってもお手本そのものでした。記念館に来る度に自ら漬けられた美味しいお漬け物等を持ってきてくれ、いつもニコニコと接してくれていた多鶴さん。つい最近まで自分で車を運転されていて本当にお元気であったのに、突然の急逝で、我々記念館の関係者も今さらながら「もっと沢山お話をお聞きしておけば良かった」と後悔するばかりです。

多鶴さん始め当時を知る貴重な体験者の皆さんが次々と旅立たれていきます。来年は戦後７０年。どんどんと少なくなっていく体験者の皆さん等の思いをどのように受け継ぎ、平和を語り継いでいくか、その責任の重さを改めて思う、中島多鶴さんのご逝去でした。

残留婦人の帰国のために「私がやらなかったら誰がやるの」という思いで懸命に走り続けてきた多鶴さん、どうかゆっくりとお休みください。いつも人なつっこい笑顔で、そして懸命に平和を語り継ぐためにと頑張ってきた多鶴さん、その思いを受け継いでいきたいものと思います。多鶴さん、長い間、本当にありがとうございました。

多鶴さんの御戒名は「瑞宝院満里孤鶴大姉」、満州の「満」の一文字が入り、「満州」に関わり、拘り続けた多鶴さんにふさわしい御戒名です。多鶴さんのご冥福を心からお祈り申し上げたいと思います。合掌。

戦争体験を語り継いでいこう

山下 美子

金沢の方々と≪平和への旅≫

この 10 月 25 日から 26 日にかけて、長野県の満蒙開拓平和記念館、無言館（編集部注：正式名称は一般財団法人戦没画学生慰霊美術無言館）、松代象山地下壕（注：太平洋戦争期、本土爆撃から日本の中枢を守るため、皇居、大本営を長野県松代に移転する工事を行った。その施設跡）を見てきました。

無言館では、私の親と同年代の方々が戦争（学徒動員）でなくなっており、何度訪れても哀しくなる無言の場所です。松代象山地下壕は以前、少なからず脇坑（注：施設の中心となった地下坑道の側面）をのぞくことができましたが、今回は網が張ってあり、本坑のみしか見ることができませんでした。

松代地下壕を造る時、近所の人たちを追い払い、半島出身の男性が労働者として強制的に働かされていました。そして、この場所にも慰安所があった事実を今回知りました。慰安婦は半島出身の女性、同じ強制連行で、日本で出会った立場の違う同胞、それを思うと胸が熱くなり、憤りをおぼえました。

満蒙開拓平和記念館では、入植が始まってからの歴史がわかりやすく書かれており、また、開拓団の入植場所の位置、日本に帰られた方の話もモニターで見る事ができます。週２回ほど、語り部の話も聞けます。隣は残留孤児の父、山本慈昭和尚の寺があります。

戦後 69 年、私の身近にも満洲や満蒙開拓団の言葉さえ知らない人も多くいます。なぜだろう・・・と思った時、日本は近代史を軽視している結果にあると思い至りました。今の平和（きな臭い匂いが漂っていますが・・・）の根底には、たいへん大きな国民の犠牲の上に成り立っているのに、あまりにも考えられない人が多くおり、“満洲”に関心ある私にとって満蒙開拓平和記念館はひとつの光です。

残留孤児捜しに顔色が変わった母

生前、「大陸はよかった」と言っていた母と残留孤児の肉親捜しの放送を見ていた時、「知っている人はいないの？」と何気なく言ったら、母の顔色は変わりました。私は、これはふれてはいけない事だと感じ、亡くなるまで聞きませんでした。亡くなったあと、“満洲”へのツアーがあり、母の一言、「大陸はよかった」という“満洲”への旅に参加しました。

総勢 40 名、一度は“満洲”の土地を踏みたいと願った人たちでした。

大連港、旅順、203 高地、長春の関東軍本部、ハルピン 731 部隊など、関東軍の関わった施設などを見て、日本人の残忍な行為に、つい、中国人ガイドさんに「ごめんなさい」と言ってしまいました。“満洲”で生活していた人は、生活より敗戦から引き揚げまでの苦労話がほとんどで、聞きながら母を思い出し旅は終わりました。

その後、方正のツアーに参加。開拓団の跡地捜し、現地の人との交流、麻山事件、方正での悲惨な事実と残留婦人の事、そして日本人公墓の存在などを知りました。また参加者の“満洲”での生活、敗戦から帰国するまでの体験談を聞かされた時は衝撃でした。この旅で、＜もうひとつの“満洲”＞を知りました。識者の方々と共にしたその旅は、本当に勉強になりました。

実は旅を終えた後で、私の伯父もノモンハンに衛生兵として出征していたことを知りました。

戦争体験の語り部を育成しよう

その後も“満洲”へのツアーがあると足が向いてしまいます。どうして“満洲”の虜になったのか。ひとつは、あと一年、母の帰国が遅れていれば私も孤児になっていたかもしれないと思う事。もうひとつは、やはり母の青春の地、「大陸はよかった」の言葉、そして満蒙開拓団を知った事です。戦争を語る時、切り離す事のできない大きな事実ですから。

今回私は、昨年立ち上がった北陸満友会に参加し、今年の春から月１回、語り部の話を聞きに金沢へ行っております。

語り部の話はほとんど敗戦から引き揚げるまでの事が多いです。助けてくれるはずの関東軍がいない怨みつらみ、この事を誰に訴えればいいのか、あれもこれも言いたい事がいっぱいある語り部です。

今のところ、これでいいのかもしれませんが、何でこうなったのか・・・と考える事。会長が＜「語り部」も私たちの年代（75 歳～80 代）が最後です＞、と言っておられます。本当にこの体験を無駄にせず、語り部を継ぐ語り部を育成する必要があると思いました。

私たちの年代、子供たち、孫たちと切れることなく伝えられるといいですネ。戦争のない平和の日本のために。

（やました・よしこ：1947 年、奈良県で生れる。石川県出身の夫と出会い結婚。現在、夫の故郷である石川県中能登町に住む）

出版OB九条の会ニュースNo.44 より転載（2014年11月18日発行）

敗戦まぢかの満州移民
―満蒙開拓平和記念館を訪ねて―

唐沢　修（もと岩波書店）

9月末、「民主長野県人会」（東京周辺の長野県出身者等でつくる会の一つで、会長畑田重夫氏）のツアーで長野県南部の阿智村の満蒙開拓平和記念館を見学した。昨年春の開館以来、全国からの参加が予想外に多くその数すでに4万名に達するという。

かつて存在した幻の国「満州国」へは1936年（昭和11年）から45年（昭和20年）まで約27万人の日本人が満蒙開拓団・同青少年義勇軍として渡って行った。「20町歩の地主になれる」「満蒙は日本の生命線」と謳われ、国策に従い、当時のソ連国境に近い地域に続々と移住した。

昭和恐慌のあおりで養蚕地帯は大打撃を受け、貧しい農民たちにとっては夢を「満州」に託したのだったが、「開拓」の実相は多く現地人の土地を取り上げての入植だった。

長野県の開拓民送出は全国1位で、4万人近い人びとが渡満した。村を挙げて送り出す「分村」や近在の村々合して送出する「分郷」形態の開拓団が多く、満蒙開拓青少年義勇軍徴募には伝統ある信濃教育会や小学校高等科教員等また県も率先協力したといわれる。

1945年（昭和20年）8月のソ連軍の突然の侵攻の際には、開拓団では既に成人男性は軍に根こそぎ動員され、残された女子ども・老人ばかりの団を組んでの悲惨な逃避行が始まった。圧倒的なソ連軍の進撃のかたわら、抑圧されていた現地人が暴徒と化し、略奪・襲撃を行い、足手まといの子どもは遺棄させられ、集団自決を迫られ、たどりついた果ての収容所では飢えと寒さで大勢が亡くなった。こうして計8万もの人が命を落としたといわれる。45年5月に渡満した阿智村開拓団も190人のうち帰国できたのは47人のみ。

45年といえば3月10日の東京大空襲はじめ日本本土は殆ど壊滅状態となり敗戦色濃厚で、4月、沖縄に米軍上陸、ソ連は中立条約不延長を通告いつ破棄されるか分からない、この時期の5月初め長野県から、6月末には東京から「疎開」と称して「開拓民」が渡満していた。

すでに関東軍は実力部隊を南方に転用し、「案山子」の状況でソ連参戦では満州の大部分を放棄、開拓民遺棄已むなしの方針を採っていた。

「満州は日本の生命線」といわれ、その確保は日本の死活問題と信じ込ませ、多くの国民を戦争に駆り立て、敗戦に直面してはその実態をのっぴきならぬ破局に至るまで隠し通した為政者の罪はまことに大きいといわねばならぬ。

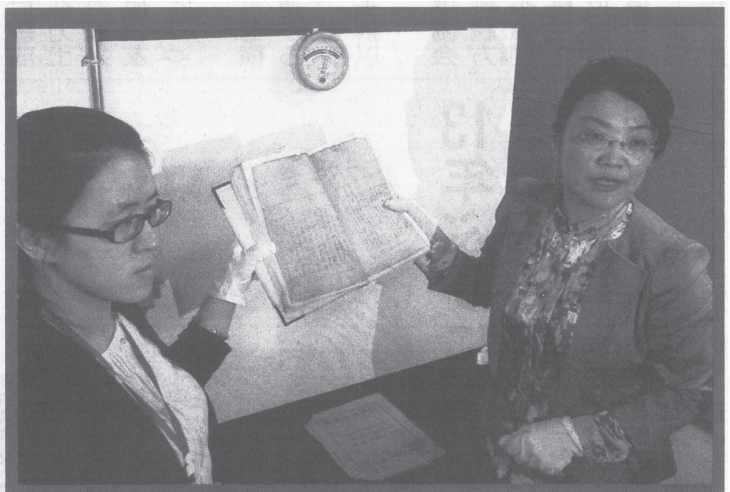
今また、時の政府は秘密保護法で情報の隠蔽を図りながら「邦人救出」「エネルギー確保」等で「自衛」の名を借りて、海外で武力行使する道を開こうとしている。記念館の庭の碑文（「前事不忘、後事之師」＝前事を忘れず、後事の教訓とする）の意味を今こそ噛みしめていきたい。

東京新聞 2014年5月28日付より転載

公文書 中国語で翻訳出版

浮かぶ満州の姿

中国吉林省公文書館が、保管している旧満州国時代の公文書の一部をまとめ、旧日本軍による「侵略の証拠」として出版した。歴史問題を題材とした対日批判の一環だが、満州国の社会や経済を知る新たな手掛かりも記されており、当時の歴史を研究する資料集として価値がありそうだ。（中国総局・新貝憲弘、写真も）



中国吉林省長春市の吉林省公文書館で、保管されている旧満州国時代の公文書原本を示す職員

日本批判の一環「共同研究せず」

「鉄証如山（証拠が確かで動かすことができない）」と題された資料集は、旧日本軍の戦地調査報告や戦地から出された郵便の検閲記録、各地の憲兵隊報告など八十九件について資料写真と併せて中国語訳を掲載する。一九三七年に起きたとされる「南京大虐殺」や細菌兵器の研究で知られる「七三一部隊」など旧日本軍の戦争犯罪を裏付ける証拠として紹介している。

公文書館によると、これらは五三年に地下から掘り起こされ保管されていた約十万件の一部で、旧満州国を実質的に統治していた関東軍が処分しようと土に埋めていたとみられる。二年前から南京虐殺や強制連行などテーマごとに翻訳、解読チームを作って作業を進めた。今年、国家社会科学基金の特別委託重大プロジェクトに指定されて出版に至った。

紹介されているのは「侵略の証拠」だけではない。軍需工場の賃金が「物価の上昇に追いつかず」、賃金の高い他の工場に労働者が流れていると嘆く記述や、待遇が募集時の約束と異なっていたため不満を持った労働者が集団脱走したという報告もあり、戦争末期の労働力不足の深刻さをうかがわせる。

日本人開拓団が中国人農民の土地を買収しようとしたが、現地地主の強烈な反対で中止に追い込まれたとの記述もある。「日本商人は満人商人と対等では到底対抗できない」などの表現もあり、日本人が中国人を虐げていたという単純な構図では割り切れない旧満州国社会の様子が映し出されている。

旧満州国時代の科学技術史を研究する山口直樹・北京日本人学術交流会代表は資料集について「植民地統治の実態を知る上で参考になる」と、さらなる公文書の公開を期待する。中国各地の公文書館や博物館などに保管されている日本の公文書は、まだ閲覧できないものも多いからだ。

穆占一副館長は「日本の一部が侵略の歴史を美化しており、公文書内の真相を公にする責任がある」と話し、今後も随時、資料公開するとしている。ただ、十万件すべてを解読しようとすれば「五十人で重要な公文書を選んで翻訳するだけでも七、八年はかかる」半面、日本語ができる職員は五人しかいないという。

日本の専門家と共同で研究した方がより効率的で客観的との意見もあるが、穆副館長は「国内の専門家が出した成果と結論が最も権威がある」と、日本側との共同研究の計画はないと明言する。資料を対日批判の道具として利用したい思惑もかいま見える。

旧満州国　中国東北部を占領した旧日本軍の主導で1932年設立、45年８月の終戦で崩壊した。清王朝最後の皇帝・溥儀を擁立したが、実態は日本の半植民地として軍需産業振興や農地開拓が進められ、米国など多くの国が日本の「かいらい」として国家承認しなかった。

信濃毎日新聞 2014年6月17付より転載

中国の木蘭県関係者（左）に連れられ、旧川路村の開拓団にあった小学校跡を訪ねる記念館スタッフら＝16日、中国黒竜江省木蘭県勝利村（本社　前野聡美撮影）

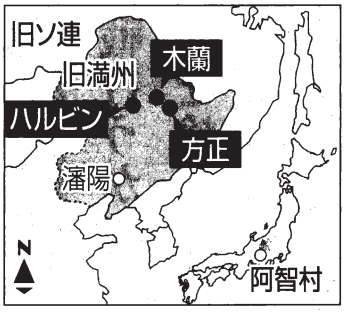
開拓団員の悲劇

旧満州訪ね調査

阿智の記念館スタッフら 初の訪中

遺構訪問や聞き取り

【中国ハルビン＝本社前野聡美】第2次大戦中を中心に旧満州（現中国東北部）に渡った満蒙開拓の歴史を伝える全国初の施設、下伊那郡阿智村の満蒙開拓平和記念館のスタッフらが、現地調査のため中国・黒竜江省を訪問し、16日は木蘭県勝利村にある旧川路村（現飯田市川路）の開拓団跡を訪れた。訪中は記念館開館前を含めて初めてで、開拓団があった場所を訪ねたり、当時を知る中国人の話を聞いたりして調査。中国側から満蒙開拓の歴史を知ることで展示の充実に生かしていく。



記念館の寺沢秀文専務理事（60）を調査団長として、三沢亜紀事務局長（47）ら職員と日本国内の満蒙開拓の研究者ら計7人が13日に訪中。17日までの日程で黒竜江省都のハルビン市、同省方正県、木蘭県を訪れている。

旧川路村の開拓団跡では、木蘭県関係者らが案内。広大な水田やトウモロコシ畑を約1時間かけて抜けると、300世帯ほどが暮らす小さな村の外れに、開拓団の子どもたちが通っていた小学校の建物が残っていた。周辺には、旧日本軍の倉庫のほか、当時開拓団が暮らしていたようなかやぶき屋根の家や、オンドル（床下暖房）のある家も。現在は使われておらず鍵も閉められているが、一行は開拓団の暮らしに思いをはせた。

14日には、中国残留孤児の養父母に関する資料展示があるハルビン市の史料館「侵華日軍第七三一部隊罪証陳列館」を訪問。金成民館長は「中国と日本は歴史を後世に伝える義務がある。記念館の趣旨に共感する」と、今後の交流に期待を寄せた。

方正県にある人口300人ほどの村を15日に訪問した際は、終戦直前の旧ソ連参戦で九州地方の開拓団員が散りぢりになった様子を覚えていた地元の孫敬芳（たんふぁん）さん（90）が「開拓団が大羅密（たあらみ）の川を渡る時、子どもが流されていくのを見た。日本軍は手を貸さなかった」と証言した。

満蒙開拓平和記念館は2013年4月に開館し、開館1年で3万人超が訪れた。

信濃毎日新聞 2014年7月4日～10日まで6回に亘っての連載

戦後70年の記憶　阿智の平和記念館訪中団

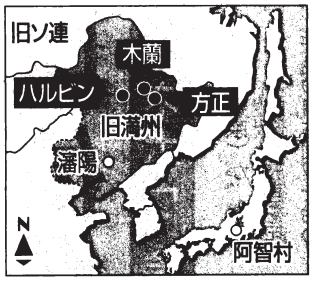
満蒙開拓の地をたどって 1

国の移民政策 加害の側面

声にならぬ声を聞く

下伊那郡阿智村の満蒙開拓平和記念館の職員らが6月13～17日に、聞き取り調査などのため旧満州（中国東北部）を訪問した。第2次大戦中を中心に、全国の都道府県で最も多い3万3千人余りを県内から送り出した満蒙開拓の歴史を中国の側から捉え、展示を充実させようと計画した。訪れたのは長野県からの開拓団が多かった黒竜江省の省都ハルビン市、方正県、木蘭県。来年に戦後70年を控え、戦争の教訓をどう伝えていくべきか。記念館職員らは、戦争の記憶が刻まれた大地を踏みしめながら考えた。

（前野 聡美、写真も）



黒竜江省方正県の中心部から数十キロ、トウモロコシ畑と水田が広がる農村地帯。6月15日、調査団は日本の開拓団がいた当時を知る老人がいると聞き、70戸、300人が暮らす興隆屯を訪ねた。

団長で記念館専務理事の寺沢秀文さん(60)＝下伊那郡松川町＝には、中国でぜひ聞きたいことがあった。「中国の人に申し訳ないことをしてしまった」。吉林省舒蘭県水曲柳の水曲柳開拓団員だった父幸男さんが生前、言い続けた言葉が胸にあった。

国は戦前、「五族協和」「王道楽土」「20町歩（約20ヘクタール）の地主になれる」と宣伝文句を並べて開拓団員を集めた。だが、与えられたのは中国人が切り開いた土地を強制的に奪ったり、安く買いたたいたりした農地だった。軍への食糧供給を急ぐためだった。開拓団員の多くが侵略の片棒を担がされた。

幸男さんは戦後、深く悔いていた。「開拓団には被害と同時に加害の側面があった。歴史の教訓として伝えなければいけない」。加害の側面に触れることは、寺沢さんらの訪中の目的の一つだった。

「引き揚げられず村に残った人がたくさんいた」。開拓団について語る孫さん(右)と、調査団長の寺沢さん(左)＝6月15日、黒竜江省方正県興隆屯

案内を頼んだ地元の作家、郭相声さん(64)とともに興隆屯の1軒の家を訪ねた。出てきたのは村の最年長、孫敬芳さん(90)。孫さんには右目がなかった。戦後、日本軍が残した爆弾を拾ったところ爆発し、失明したという。

「日本人に家や畑を取られたことはあったか」「買われたが、取られたことはなかったと思う」

「日本人と中国人で賃金格差はあったか」「日本人の下で伐採の仕事をした。賃金は中国人が2元とすれば日本人は7元くらいの差があった。そんなものだと思う」

寺沢さんは孫さんにさらに尋ねた。「日本人を恨んでいるか」「メイヨー、メイヨー（いいえ、いいえ）」。孫さんはそう繰り返した後でつぶやいた。「恨む勇気がなかった」「恨むことすらできなかった」

孫さんは、ソ連軍の侵攻から逃れて南下する関東軍に仲間を殺され、1人だけ生き残った、とも明かした。だが、怒りは口にしなかった。「（日本人を）嫌いになる理由がない」とまで言った。

「本心からの言葉だったのか」「恨む勇気とは何か」。1時間余りの聞き取りを終え、孫さん宅を出た一行はそんな話をしながら歩いた。恨みをぶつけられることを覚悟してきた寺沢さんたちに、孫さんの言葉は意外だった。

郭さんは「中国に『順民』という言葉がある」と言う。多民族社会の東北部ではさまざまな民族が国をつくり、治めてきた。順民はほかの民族の支配に「屈した」のではなく、支配を「受け入れた」民族を指すという。「孫さんも従うことが生きるすべだったのではないか」。郭さんは思いやった。

孫さんは被害を声高には叫ばなかった。だが、「声にならない声に耳を傾ける必要がある。力が弱い人の立場に立って歴史を捉えたい」と、記念館職員の島崎友美さん(29)＝下伊那郡泰阜村。孫さんは頼りの左目を見開き、遠くで一行を見送っていた。

満蒙開拓　日本が昭和恐慌後の農村の「人減らし」や、事実上支配していた「満州国」の辺境警備の目的で打ち出した移民政策。日本、朝鮮、漢、満州、モンゴル5民族が共に栄える「五族協和」、東洋の徳による統治（王道）で理想的なアジア国家（楽土）をつくる「王道楽土」を宣伝文句に、1936（昭和11）年に国策とした。敗戦までに約27万人が満州に渡ったとされる。県内からは全国最多の約3万3千人を送り出し、飯田下伊那地域からは約8400人に上った。敗戦直後の混乱で大勢が死亡し、残留孤児、残留婦人も生んだ。

満蒙開拓の地をたどって ②

731部隊資料館に残留孤児養父母の展示

過去を忘れず後世に

6月14日、中国黒竜江省の省都ハルビン市。満蒙開拓平和記念館（下伊那郡阿智村）の調査団は、郊外にある「侵華日軍第七三一部隊罪証陳列館」を訪ねた。旧関東軍防疫給水部（731部隊）が進めた生物兵器開発の実態を伝えるため、中国政府が建てた施設だ。

その一角に、中国残留孤児を育てた中国人養父母に関する展示室ができたのは2012年。同年9月に日本が沖縄・尖閣諸島を国有化したことで対日感情が悪化し、中国人から攻撃の的にされるのを懸念して今は誰でも入れる状態にはしていない。

「日本人の子どもだと知り、長い間ためらった。しかし、弱々しい息遣いの孤児は本当にかわいそうだ」―。展示室では、顔写真を添えた幾組もの家族の物語が中国語と日本語で紹介されていた。

展示室設置を働き掛けたのは、地元で残留孤児の帰国支援や養父母の生活支援を担う「哈爾浜市日本遺孤養父母聯誼会」だった。一行を出迎えた名誉会長の胡暁慧さん(72)は、「養父母の愛は血縁関係を超え、国家を超え、恨みを超越した」と強調した。

1945(昭和20)年8月、旧満州（中国東北部）にソ連軍が侵攻し、男たちが徴兵されてほぼ女性や子どもだけになっていた開拓団は、関東軍による援護もなく逃避行を強いられた。陳列館によると、その最中に親と離れ離れになった孤児は約4千人に上る。

平和記念館専務理事の寺沢秀文さん(60)＝下伊那郡松川町＝は「孤児の中には家庭の労働力となった人もいた。ただ、貧しい中で孤児の命を救った中国人がいたことに日本人として感謝したい」と話した。

陳列館側（右側）との懇談会で、質問を投げ掛ける満蒙開拓平和記念館の調査団メンバーら（左側）＝6月14日、黒竜江省ハルビン市

731部隊　旧関東軍防疫給水部の別称で、1936（昭和11）年発足。生物兵器開発のため、「マルタ（丸太）」と呼んだ中国人やロシア人の捕虜ら約3千人を生きたまま解剖したり、細菌を使った人体実験を行ったりした。終戦後、連合国軍総司令部（GHQ）は初代部隊長の石井四郎中将らを取り調べたが、実験データなどの提出を受けて免責した。関係者には戦後、大学などで要職を務めた医師が少なくない。森村誠一氏の小説「悪魔の飽食」出版を契機に80年代以降、元隊員らによる証言が相次いだ。

731部隊は、25年のジュネーブ議定書で使用を禁じられた生物兵器の開発を目指した。ソ連軍の侵攻後、関東軍は施設の爆破などで証拠を隠滅。部隊幹部の一部は、研究データを米軍に提供して責任追及を免れたともされる。

「なぜ731部隊の資料館に養父母の展示があるのですか」。平和記念館のボランティア木村多喜子さん(44)＝同＝は見学後、陳列館側との懇談会で尋ねた。

25年にわたり、731部隊を研究してきたという金成民館長は「陳列館を単に残忍な歴史を暴露し、責任追及する場にしたいのではない。戦争の中に垣間見られた人間愛を伝えたい」。「前事不忘　後事之師（過去を忘れず後世の教訓とする）」とも繰り返した。

調査団メンバーで、満蒙開拓を研究している筑波大大学院（つくば市）の1年新谷千布美さん(24)＝上伊那郡宮田村出身＝は「日本の軍人は、どうして生きた人間を実験するという残虐なことができたと思いますか」と聞いた。

「日本人が中国人を劣等民族と認識していたことと、資源や国土を求めたことが複合的に絡み合った」

そう分析した金館長に、新谷さんは伝えた。「日本のこれからの世代は歴史から学んで反省しなければいけない。なぜそんなことをしたのかを考えることで、同じ過ちをしないように考えていきたい」

満蒙開拓の地たどって ③

「金銭渡し引き受け」養母の告白

文化的・社会的背景も

「子どもがいないのはとても恥ずかしいことだった」。満蒙開拓平和記念館（下伊那郡阿智村）の調査団に向き合い、中国黒竜江省の省都ハルビン市に暮らす李淑蘭さん(87)が話し始めた。戦後、中国残留孤児を育てた養母の一人だ。

調査団が見学した同市の「侵華日軍第七三一部隊罪証陳列館」の一角にある展示室で、愛が強調されていた養父母と孤児の物語。李さんの口からは、多数の孤児と養父母を結び付けた中国の長い歴史に基づく文化的、社会的な背景が語られた。

李さんは16歳で結婚し、終戦の時は19歳だった。貧しい人が多い地域に住み、夫は印刷会社で、自身はたばこ工場で働いていた。戦争が終わると、おかゆや肉まんじゅうを売る料理屋を始めた。

「女の子は要らないか」。中国人の仲介人に連れられ、日本人の親子がやってきたのは1945（昭和20）年11月だった。女児は5歳、母親はその弟も抱いていた。女児は熱があり、「細くて汚い格好をしていた」。母親は李さん夫婦に、子どもの命を助けてほしいと懇願した。

中国には「養児防老」（子どもを大事に育て、老後は世話をしてもらう）という言葉がある、と李さんは言う。儒教では祖先をまつり、親を敬い、子を養うことを繰り返し、子々孫々、一族が永続するとの考えもある。

李さん夫婦には子どもがいなかった。当時の中国には日本人の子に限らず、金銭と引き換えに子どもをやりとりする風習があったという。夫婦は200円（当時）を渡して女児を引き受けた。

シラミがたかっていた女児の髪を丸刈りにし、新しい服を着せた。自分の子も生まれるようにと「来順」と名付けた。その後、李さんは5人の子を産んだ。貧しかったが、来順さんも5人と同様に育てた。

来順さんが日本に帰った日のことを「特別な日だから、はっきり覚えている」と話す李さん＝6月17日、黒竜江省ハルビン市

日本人の孤児を受け入れた李さん一家は、権力闘争の嵐が吹き荒れた文化大革命（66～77年）にのみ込まれた。来順さんは日本人だとして仕事を奪われ、親日派とみなされた李さん夫婦も非難を浴びた。

中国残留孤児の身元調査が注目され始めた80年、来順さんの実母が見つかった。41歳になっていた来順さんは、81年9月27日に夫と4人の子どもを連れて日本へ渡った。李さんは経済発展を遂げた日本を見て、「子どものためにも行った方がいい」と背中を押した。李さんも生みの親とは別の人に育てられた。来順さんが実母に会えたことは、自分のことのようにうれしかった。

ただ、多くは語らないものの、李さんは来順さんの日本での暮らしについて「必ずしも順調ではない」とつぶやく。96年に夫を亡くした来順さんが「中国に帰りたい」と連絡してきたこともあったが、李さんは止めた。「（実母やきょうだいの）愛は薄かったようだ。来順は精神的に病気になった」

総人口が1千万人を超し、高層マンションの建設も相次ぐハルビン市。李さんは、来順さんらを育てた古びた集合住宅の1階で息子と2人、静かに暮らしている。来順さんとは、もう何年も音信が途絶えている。

中国人養父母　1945（昭和20）年8月9日のソ連参戦以降の混乱で、両親と死別したり、手放されたりした日本人孤児を引き取って育てた中国人。日本による救済がなかった当時、多くの孤児の命を救った。養父母には経済的に貧しい人も多かった。戦後、吉林省長春市に日本の篤志家による支援で養父母のための住まい「中日友好楼」が建設されたほか、黒竜江省方正県の「中日友好園林」には、孤児の支援で「中国人養父母公墓」が設けられた。

満蒙開拓の地をたどって ④

残留孤児認定されぬ女性

「何度見捨てる」憤り

満蒙開拓平和記念館（下伊那郡阿智村）の調査団が中国黒竜江省ハルビン市に到着した6月13日夜。同市に住む女性、郜鳳琴さん(70)がホテルを訪ねてきた。

「皆さんの力でどうか助けてください」。そう懇願した郜さんは、県内の元開拓団員だったという日本人の母の写真や、母が書いた書類を差し出した。

「娘は5歳だが、私は生活が困難で養えない。娘の将来を思い、郜広忠さんに扶養を願い出る。今後、娘との親族関係を絶つと誓う」。そう記された書類は1949（昭和24）年6月21日付で、母の署名があった。郜さんをハルビン市の中国人養父母に渡すための「契約書」だった。

郜さんの父親が誰なのかは分からない。母は敗戦後の逃避行で病気にかかり、中国人男性に助けられた。生きるためにその愛人になった。生活力は乏しく、郜さんはそれ以前にも別の養父母に預けられたことがあった。

自宅のベッドに母親の写真を広げて話す郜さん。壁には和服姿の女性の写真が張られていた＝6月17日、ハルビン市

新たな養父母の家には4人の兄弟がいた。「唯一の女の子だったので、かわいがってくれた」。だが、近所の子どもに日本人への蔑称である「日本鬼子」と呼ばれ、「日本人に捨てられた」とからかわれた。子ども心にも日本人の子だと気付いていたが、「養父母の気持ちを害すると思って聞けなかった」という。

67年に結婚した中国人の夫も、けんかのたびに「日本鬼子」と言った。中国共産党は「日本の国民も軍国主義の被害者」との立場だったが、日本の侵略による民衆の傷は癒えていなかった。日本が高度経済成長に沸いていたころ、中国に残された日本人たちは戦争責任を背負わされていた。

郜さんの養父母が「おまえの母は日本人だ」ときちんと明かしてくれたのは72年の日中国交正常化の前後だった。

残留孤児の集団訪日調査が始まった翌年の82年、郜さんの母が日本から会いに来たという。「帰国のために手続きをするから」。うれしくて、郜さんは母を自宅に招待した。だが、いったん帰国した母からは何年待っても連絡がなかった。何通もの手紙に返事は来なかった。「（終戦前後の）中国での生活をほかの人に知られたくなかったのかもしれない」と、郜さんは寂しそうに話す。

母の連絡を待ち切れなかった郜さんは2002年、日本政府に自身が残留孤児だと確認するよう申し立てをした。だが、返事は「あなたを帰国支援の対象とはみなしません」。日本政府は、父母がともに日本国籍と認められない場合、残留孤児と認めずに帰国支援の対象にもしない。父親が分からず、郜さんは何度申請しても認定されなかった。

母が会いに来てから四半世紀余りがすぎた6年ほど前。日本へ行った知人が郜さんの母の消息をたどり、「亡くなったようだ」と教えてくれた。

70歳の郜さんに、いまさら日本に住むつもりはない。「中国では『日本人だ』と言われながらずっと生きてきた。日本は何度私を見捨てるのか。帰る、帰らないではない。ただ日本人としての身分を認めてほしい」

中国残留孤児の認定基準　日中両政府は、▽国籍の有無にかかわらず、日本人を両親として出生した者▽中国東北地方などで、ソ連が参戦した45年8月9日以降の混乱により、保護者と生き別れになったり、死別したりした者▽当時の年齢がおおむね13歳未満▽本人が自分の身元を知らない▽当時から引き続き中国に残留し成長した者―の5点全て当てはまる人を中国残留孤児と認めている。今年6月末までに認定されたのは2818人で、このうち2555人が永住帰国した。

満蒙開拓の地をたどって ⑤

根を深く下ろした残留孤児

「養父母と中国社会に感謝しています。だから今も中国で仕事をしています」。6月14日、中国黒竜江省ハルビン市で開いた食事会。同市に住む男性、楊治国さん(74)が満蒙開拓平和記念館（下伊那郡阿智村）の調査団に自己紹介した。

楊さんは、日中両国の政府が中国残留孤児と認定した1人。残留孤児の帰国支援や養父母の生活支援を担う「哈爾浜市日本遺孤養父母聯誼会」の誘いで食事会に参加した。

これまでに中国残留孤児と認定された人は2818人（6月末時点）。永住帰国したのは2555人で、全てが帰国を望んだわけではない。日本による孤児救済が1981（昭和56）年の集団訪日調査開始まで遅れる間、楊さんのように中国社会に深く根を下ろした人もいた。

楊さんは5歳だった終戦直前の45年春、ハルビン市街地の神社境内で、両親から養父母に引き渡された時の光景を覚えている。ただ、実の両親がどんな人だったかの記憶はない。

「中国で生きる」決意

ハルビン市内の自身の事務所で語る楊さん＝6月17日

父は日本の軍人で、家族を連れて旧満州（中国東北部）にいたが、敗戦を察知して無事に子どもを連れて帰ることはできないと考えた―。いずれも後になって、訪日調査などの際に父を知る日本人から聞いた。

養父母はイスラム系の少数民族「回族」だった。鉄道関係の会社に勤めていた養父は、教育を受けられなかった自分の分まで子どもに教育を受けさせようと、苦労して実子の姉と楊さんを大学に通わせてくれた。楊さんは吉林省長春市の大学で地質や建築を学んだ。

「養父母の偉大さに感謝している」と楊さん。だから養父母に自分の出自を確かめることができなかった、と振り返る。「最後まで自分の子として育てようと思ったのだと思う」。楊さん自身は気付いていたものの、2人は楊さんが日本人の子であることをひと言も告げず、80年と81年に相次いで亡くなった。

「養父母の子としての役割は終わった。そろそろ自分のルーツを調べてもいいのではないか」。親類に促され、中国公安当局を通じて日本の厚生省（当時）に連絡したのは80年代半ばだった。87年、集団訪日調査に参加した。

日本でテレビ番組に出演して自身の話をすると、翌日、軍人だった知人によく似ていると言って日本人2人が訪ねてきた。だが、実父は46年、実母は86年に亡くなっていたと知らされた。

「日本の両親がいなければ自分はいなかった。祖国は中国と日本の二つ。ただ、私の生活習慣や仕事は中国にある」。日本に永住帰国する選択肢もあったが、選べなかった。楊さんには同じ回族の妻がいて、建築関係の大事な仕事があり、日本とは異なる食習慣や宗教の下での回族の暮らしがあった。

実の両親の身元が判明したのに、戦後の長い時間で日本は遠くなっていた。「不幸であったけれども、幸せでもあった。恩返しのつもりで、中国で生きることに決めた」。楊さんはそう締めくくった。

日本による中国残留孤児の帰国措置　終戦前後に旧満州（中国東北部）で孤児となった日本人の引き揚げは1946（昭和21）年に始まり、49年の中国建国で中断。日本赤十字社など民間による集団引き揚げが58年まで続いた。日本が帰国の措置を取らなかったなどとして、2002年以降に残留孤児の約9割に当たる約2200人が全国15地裁に賠償を求めて提訴。原告は07年以降、残留孤児、残留婦人への支援策を盛った改正残留邦人支援法を受け入れて順次取り下げたが、早期帰国対策について国の責任は不明確なまま残された。

満蒙開拓の地をたどって 6

若い世代 歴史受け継ぎ

国の言葉 疑ってみる

6月16日、中国黒竜江省木蘭県。満蒙開拓平和記念館（下伊那郡阿智村）の調査団が、川路村（現飯田市川路）の開拓団が敗戦まで入植していた勝利村を歩いていた。1軒の家の前で話し掛けた中年夫婦の表情が変わったのは、通訳を通じて一行が日本人だと分かった時だった。

「日本の首相はまた戦争を始めようとしているのか」「中国の民衆は許さないぞ」。激しい口調で、憲法解釈の変更により集団的自衛権の行使容認を目指す日本政府への怒りをぶつけた。

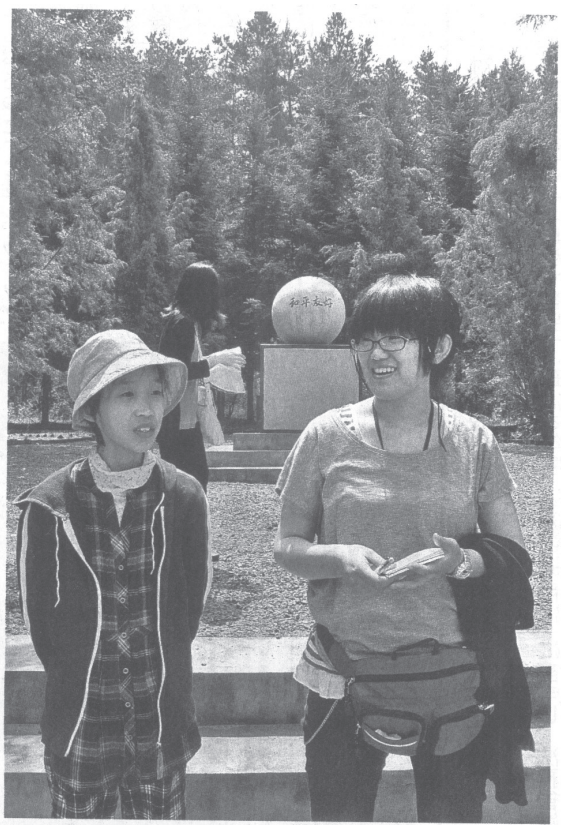
「私たちの団体は戦争をやろうとは思っていない」。調査団メンバーで筑波大大学院（つくば市）1年の新谷千布美さん(24)＝上伊那郡宮田村出身＝はそう伝えたかった。

新谷さんは中国の近現代史を学んでいる。「中国は日本と文化、政治、経済的に切り離せない関係。合わせ鏡のように、中国の視点から日本を考えたい」と思ってきた。それだけに、夫婦に考えをうまく伝えられなかったことは「とても悔しかった」という。

旧満州（中国東北部）に暮らす人々は、今も戦争の記憶を生々しく刻んでいる。

調査団は黒竜江省方正県興隆屯で、村の最長老、孫敬芳さん(90)が終戦直後に逃げていく開拓団が渡るのを見たという大羅密川のほとりに立った。「戦後、川辺に多くの子どもの死体が上がった。地元の子どもは川で遊ぶのを怖がり、村人はナマズをしばらく食べなかったと聞いている」。案内役の地元の作家郭相声さん(64)が説明した。

木蘭県でも地元の人が古い建物を指して言った。「ここは日本軍が使っていた倉庫」「ここには日本軍の上層部のための慰安所があった」。新谷さんは「中国側に残る地域の記憶に出合った。相手の記憶に寄り添って歴史を捉えたい」と話した。



旧満州の地を歩き、平和や戦争について話をした新谷さん（右）と島崎さん＝6月15日、方正県

満蒙開拓平和記念館初の訪中調査団には、新谷さんと記念館職員の島崎友美さん(29)の2人の20代が加わった。記念館専務理事の寺沢秀文さん(60)ら上の世代から、満蒙開拓の歴史研究を受け継ぐ世代だ。

島崎さんは「自分なら満州に渡っただろうか」と自問自答する。「今でこそ（自分は）国の言うことを批判的に捉える理性を持っていると言える。しかし、満蒙開拓が進められた当時、貧しい暮らしの中で、果たして国を疑うことができただろうか」

戦前、日本は「20町歩（20㌶）の地主になれる」「アジアの民族が共存する理想的な満州国をつくる」という、豊かさや平和を印象付ける掛け声で国民を満州へ送り込んだ。応じた開拓団員には、満蒙開拓に侵略の側面があると考えていた人はほとんどいなかった。

「国が言う『平和のために』という言葉をまず疑ってみる。満蒙開拓が今に投げかける大切な要素ではないか」と新谷さん。島崎さんは「葛藤しながらの議論を続けることが平和な社会をつくっていく。自分たちを取り巻く社会や歴史について関心を持ち続けたい」と、5日かけて満蒙開拓の地をたどった旅を振り返った。

（おわり）

（前野 聡美）

満蒙開拓平和記念館　昭和恐慌などを背景に、日本が国策として進めた満蒙開拓の歴史を伝える全国初の施設。飯田日中友好協会（飯田市）が2006年に設置構想を正式決定し、足掛け7年で昨年4月25日に下伊那郡阿智村に開館した。設置理念には、記念館を満蒙開拓の史実を記録、保存、展示、学習する拠点とし「平和の尊さ、戦争の悲惨さ」を発信していくことを盛った。同協会を中心となり、国、県、南信州広域連合の補助金や全国の寄付金で総事業費約1億2千万円を確保した。阿智村駒場の用地は、村が村有地を無償で貸与した。問い合わせは同館（☎0265・43・5580）へ。

茨城新聞 2014年7月22日付より転載

旅 travel

長野県の山あいにある小さな歴史館が、盛況という。戦前、中国東北部などに送り出された人々の足跡をたどる「満蒙開拓平和記念館」。静かな温泉郷や山の幸にも恵まれた阿智村を訪ねた。

長野・阿智村

満蒙開拓の歴史 リアルに

「美肌の湯」人気

にぎわう昼神温泉の朝市

中央自動車道を南下し、伊那谷が開ける辺りで阿智村に入る。記念館は明るい谷あいにあった。昨年4月に開館し1年間で3万人以上が訪れる反響があり、この日も県外からの団体客が大型バス2台で来ていた。

満蒙開拓とは、日本のかいらい国家満州国（現中国東北部など）に、入植のため人々を送り込んだ国策で、終戦直前までの約13年間に長野、山形、熊本などから27万人が渡った。旧ソ連の対日参戦や日本軍の敗走といった状況で、やっと帰国した人も多いが、悲惨な歴史は風化しつつある。そうした中、記念館は体験者の証言を収集。満蒙開拓に特化した、全国初の記念館として注目を集めている。

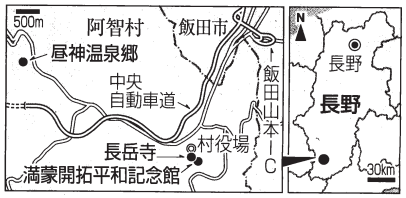
館内では満州国の成立から日本の敗戦、引き揚げまでの歴史に関する写真や、当時の公文書などを展示。DVDの映像を見ると、送り込まれた人々が、当時の記憶をぽつりぽつりと語っていて、実にリアルだった。

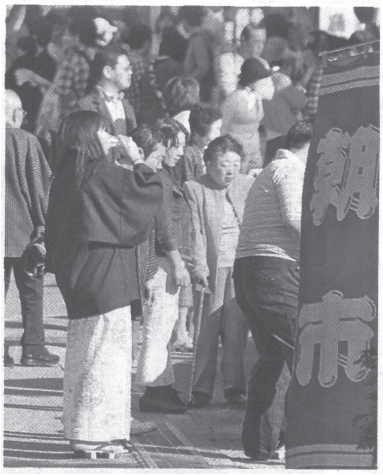
記念館の三沢亜紀事務局長は「思想信条や政治的な立場を超えて、平和のありがたさを確かめてほしい」と案内してくれた。それを聞きながら、自分が国民学校に通っていた戦時中、愛国者の先生が授業で熱っぽく満蒙開拓について語っていたのが、鮮やかによみがえってきた。

記念館を出て近くの長岳寺まで歩く。元住職の故山本滋昭さんは体験者の一人で、中国残留孤児の問題に尽力したことで知られる。鐘楼に立ち、80歳をすぎた今も旅を続けていられる幸せに感謝しつつ、鎮魂と平和を祈って鐘を突いた。

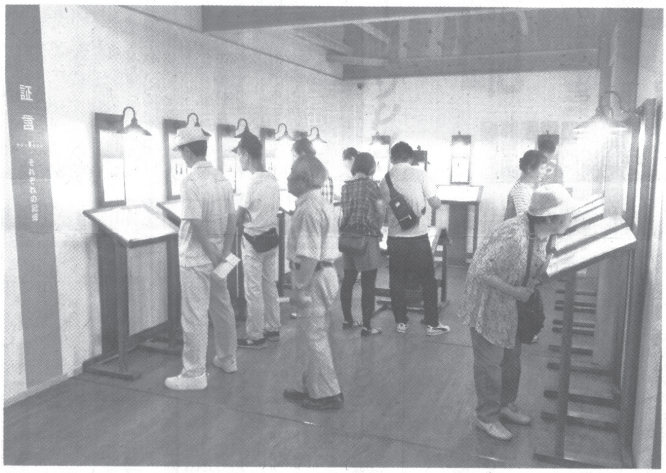
今夜の宿は、記念館から車で10分ほどの昼神温泉郷だ。開けた明るい雰囲気があって、「美肌の湯」として人気という。どの旅館も清潔で落ち着ける雰囲気がいい。のんびりと湯につかった後は、自然の中の散策路をぶらり。翌日、温泉郷の一角にある朝市を冷やかすと、地元の新鮮な野菜などが売られ宿泊客らでにぎわっていた。（文・伊佐九三四郎＝紀行作家）

【メモ】満蒙開拓平和記念館は☎0265（43）5580。火曜と第2、4水曜が休館。

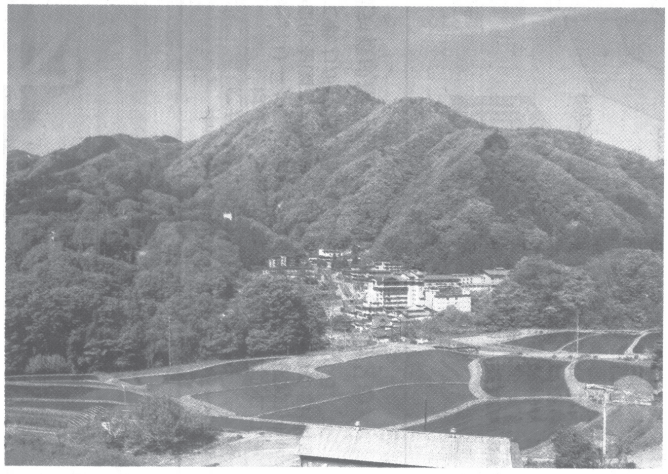




毎日開かれている昼神温泉郷の朝市では、泊まり客らが浴衣でそぞろ歩く＝長野県阿智村



国策で渡った開拓民の中には15、16歳の少年が少なくなかったことを伝える資料も＝長野県阿智村の満蒙開拓平和記念館



昼神温泉郷の周りにはのどかな山里の風景が広がっている＝長野県阿智村

新潟日報 2014年8月12日付より転載

乳飲み子抱き自決覚悟

地方と国策

波立つ海を越えて

この国は敗戦から立ち上がってきた。国家総動員体制で徴兵された男性、銃後の守りを強いられた女性や子どもたち。戦後とは、戦争という最大の国策に翻弄された国民一人一人の平和への祈りが築き上げてきた道のりといえる。安倍政権は武力行使に道を開く集団的自衛権の行使容認を決めた。日本海は緊張の海へと逆戻りしていくのか。対岸と向き合い、地方外交を進めてきた本県から「平和とは」を考える。

幻の「楽土」

＜1＞

平和とは 新潟から問う 集団的自衛権

〈花嫁部隊きょうもまた、モンペりりしく野良仕事

90歳の渡辺ハルエさん＝佐渡市＝は遠い目をしてロずさんだ。旋律が70年余り前へと引き戻す。

「おにぎりが凍らないよう背中にぴったりと巻き付けて。オオカミもいたから怖かったよ」

振り返るその地は満州国。1932（昭和7）年3月、日本が中国東北部につくった傀儡国家だ。

「楽土」とうたわれていた。結婚を約束した男性とハルエさんの目の前に航路の出発地「新潟港」があった。夢を追い、19歳で日本海を渡った。

若い夫婦は本県出身者の「東火梨開拓団」の一員として開墾に励み、トウモロコシや大豆を軍に納め、自前の耕作地も与えられるまでになった。「柳の木で囲いをして喜んだもんだよ」

傍らには授かったばかりの長男。家族3人の肖像は、ひ孫9人の穏やかないまにつながる。

しかし実像は、大陸進出という国策に翻弄され、もがき、つないだ命だった。幸せな光景のすき間に、語ることをはばかってきた壮絶な記憶がある。

ともに大陸に渡った夫は軍に召集された後、シベリアに抑留され、行方が分からなくなった。

開拓団の村は45年8月15日の敗戦以降、食料や金目の物を物色する現地住民に連日襲撃された。

乳飲み子を抱えたハルエさんは顔にすすを塗り、さらしをきつく巻いて乳房の膨らみを隠した。「これが逆に『金を隠してる』と疑われて…。棒でよーくなぐられたもんだ」

ハルエさんがいた開拓団は前途を悲観し、自決を決める。長男を胸に抱きかかえ、手りゅう弾が爆発する瞬間を待った。

「全員死んだら、誰が日本に事実を伝えるんだ」。団長が発した一言に皆、われに返った。

「みんなおかしくなっていたんだよ」。ハルエさんは目を伏せる。

まぶたに焼き付いた苦難は、これだけではない。

32面に続く

穏やかな日本海を臨む現在の新潟西港。70年余り前、多くの人がここから満州に行き、夢を追った。「楽土」があるはずだった

新潟日報 2014年8月12日付、32面より転載

地方と国策

波立つ海を越えて

平和とは 新潟から問う

集団的自衛権

日中間 裂かれた家族

苦難 母の時代で最後に

1面から続く

自決を踏みとどまった開拓団の渡辺ハルエさんは、ソ連の侵攻から逃れるため大陸を南下した。途中、大勢が栄養失調で力尽き、沼地に足を取られ命を落とした。

幸いにもハルエさん一家は、夫の元部下だった中国人に馬車で救われた。

ただ、中国は開拓民を母国に帰そうとはせず、多くの女性が炭鉱に留め置かれた。

ハルエさんは看護師として働いた炭鉱付属病院で、院長の中国人男性、李松鶴さんとめぐり会い、4人の子を授かる。

「もう中国で骨をうずめるつもりだった」。だが、体制をめぐる闘争のあおりで李さんは失職。「子どもたちのために」と李さんは日本への帰国を勧め、自ら離婚の手続きをした。

ハルエさんは子どもたちを連れ、香港から横浜行きの船に乗る。終戦から20年が過ぎていた。

■ ■

一家にはさらに荒波が押し寄せる。

文化大革命が巻き起こった中国で、日本帝国主義時代の象徴でもある満州建国大を卒業し、日本語も話せた李さんはスパイとみなされた。

妻子を日本に戻した行為と共に共産党の怒りを買い獄中に。ハルエさんたちには「死亡した」と伝えられた。

田中角栄首相が訪中して実現した1972年の国交樹立後、長男が手を尽くし、生存を確認したが、裂かれた家族が元に戻ることはなかった。

ハルエさんは「私が生きていることが不思議」と言い、「中国でたくさんの人に助けられた恩返しをしたい」と繰り返す。

■ ■

その願いは、子どもたちがしっかりと受け継いだ。

長男は大学で中国語や日中関係史を教える。

娘の水田はなかさん(61)＝新潟市中央区＝は中国語の通訳・旅行企画を行う会社の代表として本県で行政や大学、企業の視察などをサポートしている。

はなかさんは、中国三江平原の開発に懸けた元亀田郷土地改良区理事長・佐野藤三郎氏の中国行きに随行した。

39歳で社会人入学した新潟大では、大学院で対岸交流の重要性や「環日本海圏」の概念を世に広めた故古厩忠夫教授に学んだ。

はなかさんは最近、「日中関係は曲がり角に来ている」と危機感を覚えている。

安倍政権が集団的自衛権の行使容認に踏み切ったことに加え、中国指導層の世代交代で日中の価値観のずれは一層広がっているという。

「無責任な政治のせいで悲惨な体験をするのは、どうか母の時代が最後であってほしい」

祈るようにつぶやく娘の隣で、ハルエさんが深くうなずいた。

「よく残っていた」と炭鉱徴用時代の写真を見つめる渡辺ハルエさん（左）と娘の水田はなかさん＝佐渡市

満州開拓団　人口過剰による土地不足解消や対ソ連防衛などを目的に、政府は1937年からの20カ年で100万戸・計500万人を満州に送り出す計画を掲げた。県史によると、本県からの開拓団・義勇隊員は1万2641人で全国5番目に多く、敗戦後の悲惨な逃避行で約5千人が死亡したとされる。中でも本県出身者ら約850人が在籍した清和開拓団は、ソ連軍との戦闘や自決、病気などで多くの犠牲者が出て、わずか50人ほどしか帰国はかなわなかった。大陸で家族と生き別れた人も多く、残留孤児や残留婦人の悲劇を生んだ。

新潟日報 2014年8月13日付より転載

平和とは 新潟から問う
集団的自衛権

地方と国策
波立つ海を越えて
＜2＞

消された開拓団慰霊碑

友好の証し理解されず

中国黒竜江省の方正県には、満州（中国東北部）開拓の名のもと大陸で果てた人々をまつった中国でただ一つの「日本人公墓」がある。

1963（昭和38）年、方正県政府が建てたものだ。それは本県と黒竜江省が友好提携をする20年前、国交正常化（72年）にも先立つ。

せみ時雨がけたたましい2011年夏、友好の証しともいえるこの公墓で騒動は起きた。

きっかけは、県政府が公墓のすぐ後ろに開拓団犠牲者の名前を刻んだ慰霊碑を造ったことだった。

日本円で800万円以上をかけた慰霊碑には赤いペンキがかけられ、県政府に中国各地から「売国奴」とののしる声が届いた。

碑は数日で県政府が解体、がれきになった。日本人の公墓周辺への立ち入りもしばらく禁止される。

「県政府が自発的に建ててくれたのはありがたかったが…仇になったんだね」。長田末作さん(89)＝村上市＝は胸を痛める。

碑が建つまでには現地との長い交流があった。

■ ■

長田さんは15歳で新潟港から大陸に渡り、満蒙開拓青少年義勇軍の一員として開墾をしながらソ連（現ロシア）国境を守った。ソ連領中央アジアでの抑留を経て47年、日本に帰還した。

90年代後半から、大陸で命を落とした開拓団員を弔う旅を本県出身遺族らと重ねてきた。

方正県の日本人公墓や義勇軍で入植した地にある小学校などを訪問するうちに、県政府の役人から横断幕や夕食会でもてなされるまでの間柄になっていた。

しかし、国家全体を覆うのは「反日」。靖国神社参拝を連想させるためか、中国政府は日本人による団体参拝を禁じていた。

小泉純一郎首相の靖国神社参拝などがあった05年ごろは、手を合わせている日本人を中国の若者たちが怒鳴りつける光景も見られたという。

そんな空気の中でも慰霊祭を大々的に営んでいた長田さんらを、方正県政府は「個人参拝だ」と黙認した。

「親睦を深めてきた土台がある。開拓団もまた戦争の殉難者だと分かってくれた」。長田さんはそう感じている。

■ ■

日中関係の緊張が続く。長田さんは、左目失明や腰のけがなどで訪中がかなわなくなって久しいのが、もどかしい。

「近隣の国と仲良くしたい。ただそれだけ」と語る。

現地の人たちとの穏やかな交流の写真が手元にある。「過去は水に流して交流を深めよう」と中国語でつづられた小学校長の手紙も大切に保管している。

慰霊の旅では、先々で謝罪を口にした。最初に入植地を見た時の記憶が鮮明に残るからだ。

理想の村を「荒野をひらいてつくる」と言われていたのに、着いてみると、つい最近まで耕作していた形跡があった。

「若くて分からなかったが、入植地の大部分が既に現地の人によって耕作された土地だった」

自責の念を込めるように長田さんは言う。「悔しい思いをした人がいた事実を日本は忘れてはならない」

護国神社の「満州開拓殉難者の碑」の前で故人を弔う長田末作さん＝9日、新潟市中央区

Q 本県と黒竜江省の関係

戦時中に満州開拓団などで多くの県人が居住していたことや三江平原開拓に亀田郷土地改良区が全面協力したのが縁で、1979年12月に新潟市と省都ハルビン市の友好都市締結が実現した。83年8月には県と省も友好提携し、定期航空路ができるなどして技術研修や経済、文化などさまざまな分野で住民同士が活発に往来した。同省との長年の交流実績などから、2010年に全国6カ所目の中国総領事館が新潟市に誕生。11年に県はハルビン市にビジネス連絡拠点を設けた。

東京新聞 2014年8月13日付朝刊より転載

姉と妹の死「孝行」

記憶 ―戦後69年― 中

上那須の開拓史を伝える石碑の前で、旧満州での体験を語る中込さん㊨と取材する大野記者＝栃木県那須町で

下旧満州に渡った直後の中込さんと４姉妹。長女綾子さん（後方中）、次女よ志みさん（右端）、四女とし恵さん（手前左）は現地で亡くなり、帰国できたのは三女真寿美さん（手前中）と中込さんだけだった＝1939年、旧満州で（中込さん提供）

20代記者が受け継ぐ戦争

旧満州・千振開拓団　中込　敏郎さん（87）

狂気が支配　一度も涙流れず

那須岳の麓に青々とした牧草地が広がる。終戦後に中国大陸の入植地から引き揚げ、栃木県那須町北部の地を開拓して六十八年になる中込敏郎さん(八七)が、旧満州で家族四人を失った経験を話し始めた。

「終戦直後のころは子どもが毎日死んだ。うちの妹もね。それが当たり前だったんだ」。国が宣伝した移民の末、肉親を亡くした悲しみを聞こうと身構えた私にとって、淡々とした語り口は予想外だった。

■　■

肌寒さが忍び寄る一九四五（昭和二十）年九月二十六日、満州・新京市（現長春市）郊外の赤レンガ造りの建物。狭い六畳一間で、汚れた服に包まれやせ細った中込さんの末妹・とし恵さん＝当時(八つ)＝が、静かに息を引き取った。

八月中旬、母貞志さん（故人）と二番目の妹真寿美さん(七ヵ)、とし恵さんの三人は、入植先の満州北部の三江省依蘭県（現黒竜江省樺南県）を脱出。新京市にいた中込さんと約一カ月後に再会した。しかし、食事も満足にとれず屋根のない貨車に何日も揺られる過酷な脱出行は、小さな体にこたえた。中込さんは建物裏に遺体をそっと埋めた。

終戦直後、満州の治安は急速に悪化した。中込さんは、旧ソ連兵が日本人女性を街の片隅に引きずり込んで暴行する様子を目の当たりにした。部屋に乱入してきた兵士に大切な時計を強奪されたこともあった。

混乱を逃れた日本人が折り重なるように暮らし、衛生状態も悪いこの建物では子どもが連日亡くなった。冬になると地面が凍り、小さな遺体を埋葬してやることすらできなかった。「妹は埋められただけでもよかった」

中込さん一家七人は三九年三月、山梨県から依蘭県の千振開拓団に加わった。しかし翌年には父真さん＝当時(四〇)＝が十二指腸潰瘍で、四五年七月には姉の綾子さん＝同(二〇)＝と一番上の妹よ志みさん＝同(一七)＝が結核でそれぞれ亡くなった。

「重病の姉と妹が病床で終戦を迎えていたら、母は二人と現地で自殺しただろう」。中込さんは言葉を選び静かに語った。「終戦前に亡くなったのは、親孝行だったのかもしれないな」

母や姉妹が暴行のような目に遭うことが耐えられなかったのだろう。それにしても「亡くなるのが孝行」とは。戦争の罪深さを思い知らされた。

四六年七月、中込さんは貞志さん、真寿美さんと帰国し、開拓団の一部と那須町に集団移住した。篠竹の密生地を苦労して切り開き、ジャガイモやトウモロコシの栽培や乳牛飼育で生計を立ててきた。現在は娘夫婦と静かに暮らす。

■　■

中込さんは四人の家族を亡くしながら一度も涙を流さなかった。「内心は泣きたかったのでは」と聞くと穏やかな口調が険しさを帯びた。「いちいち泣いていたら命がいくつあっても足りない。情を忘れ、狂気に支配される。それが戦争なんだ」

ふだん栃木県を取材する記者として、那須を開拓した千振開拓団に関心を抱いて取材を始めた。どこか「戦争」を安易に考えていた自分に気づき、打ちのめされた。「若い人はみな、平和が当たり前と思っている」。厳しい言葉が今も耳に残る。

満州移民と千振開拓団　戦前の日本政府は不況や農村恐慌の対策として当時の満州（現中国東北部）への移住を推進した。1933年、三江省依蘭県七虎力（チーフリ）開拓団と名付けた。千振開拓団は一時約1800人に増えたが、終戦後は集団自決などで半数近くが死亡した。帰国者のうち約80人が栃木県那須町に移住。今も開拓農協や公民館に「千振」の名が付く。

大野　暢子（28歳）宇都宮支局

この企画へのご意見、ご感想をお聞かせください。メールはshakai@tokyo-np.co.jp、手紙は〒100 8505（住所不要）東京新聞社会部、ファクスは03（3595）6919

朝日新聞 2014年8月19日付夕刊、一面トップに掲載

満蒙開拓 記憶つなぐ

長野の記念館 現地で取材

終戦前後 数百キロの逃避行

旧満州への移民の歴史を伝える「満蒙開拓平和記念館」（長野県阿智村）が今夏、満蒙開拓団＝＝の生活などを中国の目撃者から聞き取る活動を始めた。関係者の高齢化が進むなか、証言の収集を通し、若い世代に戦争を身近な問題と感じてもらう狙いがある。集めた証言や資料は今秋にも、日本で公開していく予定だ。

満蒙開拓団

1931年の満州事変後、日本で貧困に苦しむ農民の救済などを目的に、国策として全国から中国東北部に送り込まれた入植者。食糧増産と同時に、満州国の維持や北方警備の役目を担わされた。同様の任務を負った青少年義勇軍を含め総勢約32万人に上り、長野県が1割強で最多。45年8月のソ連軍侵攻後、関東軍に置き去りにされ、集団自決が起きるなど逃避行は悲惨を極めた。敗戦時に旧満州にいた日本人約155万人のうち、死者約20万人の4割を開拓団員が占める。

「開拓団員はみなぼろを着て、女性は丸刈りだった。生活は苦しく、中国人に嫁いで子供を産み、何年もしてやっと帰国できた」

黒竜江省方正県の大羅密村。村の最年長男性、孫慶芳（フファン）さん(90)は6月、自宅を訪ねた記念館の専務理事、寺沢秀文さん(60)ら一行に、終戦前後の満蒙開拓団員の逃避行について淡々と語り始めた。

一行は記念館のスタッフや、歴史を研究する大学院生ら計10人。館内の展示資料の充実と、スタッフ教育を兼ねた実地調査に自費で応募した人たちだ。

方正県は黒竜江省の省都ハルビンの東約200キロ。ソ連軍侵攻を受け、ソ連国境近くにいた開拓団員が数百キロの道のりを徒歩で逃れてきた。

撤退する日本軍の道案内を務めた経験がある孫さんによると、日本軍は逃亡中、村々で中国人農民を殺害し、主に女性と子供からなる開拓団の避難にも手を貸さなかったという。

孫さんは一行から、開拓団と中国人農民の関係を尋ねられると、「開拓団は中国人の仲介者を通じ、中国人から組織的に農地を買った。ただ、互いの交流は少なく、この地では争いもなかった」と振り返った。

調査に参加した筑波大大学院生の新谷千布美さん(24)は「開拓団員に対する孫さんの冷静さが印象深かった」と話した。東アジア近現代史が研究テーマ。日中の政府が歴史をめぐって非難の応酬を続ける現状が心配で、中国側の戦争体験者から直接証言を聴きたいと思っていた。「歴史を学び、民間交流から政治対話を促したい」と話した。

一行は5日間の滞在中、中国で暮らす残留日本人孤児の楊治国（ヤンチークオ）さん(74)、日本人孤児の認定を求めている郜鳳琴（カオフォンチン）さん(70)とも面会。郜さんは認定を求め続ける理由を問われ「『落葉帰根』（出身地に戻る）です」と涙ながらに答えた。楊さんは「日本人は戦争で加害者にも被害者にもなった。戦争は二度としてはならない」と語りかけた。

一行の調査について、中国側で応対した歴史研究者からは「若者の参加に驚いた」との声も上がった。

開拓団の生活や敗戦前後の逃避の様子を、目撃したお年寄りの農民から聞き取る寺沢秀文さん（右）＝黒竜江省方正県、石田耕一郎撮影

「戦争考えるきっかけに」

記念館は満州移民史を専門に扱う日本唯一の民間施設として昨年4月に開館した。開拓団員の証言や手紙を展示し、これまでに4万人以上の参観者があった。約1割が首都圏の訪問者で、修学旅行で訪れる大阪の中学校もある。

今回の訪中を企画した寺沢さんは両親が開拓団員で、兄が引き揚げ途中に死亡。戦後も父親から度々、入植地での生活を聞かされた。

悲劇を伝えるため、ソ連が侵攻した日に当たる8月9日、今年も同館で慰霊式典を開催した。毎年4月には、東京都多摩市・聖蹟桜ケ丘にある開拓団犠牲者の慰霊地「拓魂公苑」で行われる追悼行事にも参加してきた。

だが、帰国した開拓団員や残留孤児は高齢化が進み、同館のスタッフ約20人の多くが戦後世代。参観者の質問に十分答えきれない場面も生じているという。

実地調査は当初、2012年に予定したが、日本政府による尖閣諸島の「国有化」に伴う反日デモの影響で、中国のホテルから宿泊を拒まれて中止になった。

今回も面会できる証言者が直前まで決まらないなど困難も多かったが、寺沢さんは今後も調査を続けようと考えている。

寺沢さんは「旧日本軍はかつて、（満州で）自国民を守らなかった」と考える。集団的自衛権の行使容認をめぐる議論で安倍政権が唱えた「国民を守るため」との説明に違和感を持つ。「開拓団の歴史を語り継ぎ、若者が戦争を考えるきっかけを作り続けたい」

（方正県〈中国・黒竜江省〉＝石田耕一郎）

朝日新聞 2014年8月19日付夕刊より転載

黙した元軍人の父 たどる夏

76歳娘、母からの恋文ひもとく

軍人だった父は、戦争を語らぬまま逝った。終戦から69年。76歳の娘は今年、父の足跡をたどり始めた。どんな修羅場をくぐり抜けたのか。自分はなぜ、何も聞こうとしなかったのだろうと、悔やみながら。

この夏、神奈川県鎌倉市に住む渡辺喜久代さんは、ありし日の父の姿をしきりに思い出す。小学4年の夏だった。庭で竹刀を素振りしていた父がつぶやいた。

「こうやっていると、人を切った時の感覚が返ってくる」。それ以降、父は竹刀に触れなくなった。

17年前に逝った山田藤栄さん（享年89）。父は母が戦地に書き送ったラブレターを大切に持ち帰ったのよと、数年前に知人に話したのがきっかけだった。「お父さん、どんな思いだったんでしょうね」。知人にそう問われ、何も答えられない自分が情けなかった。

父と一緒に戦った元兵士の男性（97）が名古屋市にいることをその知人が調べてくれ、今春、訪ねた。

「立派な方でした」。父をそう評してくれた。だが戦場でのことを問うと、男性は嗚咽で言葉が続かなくなった。

■ ■

渡辺さんが生まれた当時、父は中国東北部の旧満州にいた。父が亡くなった2年後に逝った母しづえさん（享年85）が送った恋文は、戦地の夫を案ずる思いであふれている。

《お父様のことは一刻も忘れることができず。淋しい 恋しいお父様へ＝1938年1月》

《近く大開戦らしいですね。元気で活躍して帰ってきてくださるのよね＝同2月》

渡辺さんも2～6歳、満州で過ごした。口ひげをたくわえた父は、部下を自宅に呼んで、歌を披露するような快活な人だった。

44年、父はフィリピン・ミンダナオ島へ。母や弟妹と日本へ引き揚げた渡辺さんの父の記憶は、ここでいったん途切れる。再会は終戦後の46年秋。福井県の実家に戻ってきた父は、えぐられたようなくぼんだ目をしていた。

■ ■

戦場で何があったのか。

山田藤栄さん＝石河高治郎著「敗兵」から

父は、約1200人を率いた陸軍独立歩兵第353大隊の大隊長だった。

訪ねた元兵士の男性は1冊の本を示し「ここに書いてあることがすべてです」。生還者たちの手記だった。

《（45年 日付不明）マラリヤ、栄養失調で全員伏せていた。薬がないのでどうすることもできない》

《同6月2日 逃げ遅れた在留邦人や、傷病兵の屍体が沢山あるが埋葬する余暇もない》

《同8月30日 兵が兵の死をまって料理する凄惨な場面も見せられた。餓えのためにはもう戦争などどうなってもいい》

部隊の980人余りが死んだ。渡辺さんは、読み終えることができなかった。

悲惨な体験を誰にも告げなかった父。工場で守衛の仕事を全うすると、晩年は神社や仏閣をまわっては手を合わせていた。

■ ■

2カ月前、実家の妹から父の仏壇に入っていたという遺品が送られてきた。「追悼之辞」と書かれた1枚の和紙。93年にあった部隊の遺族の集まりで父が読んだものらしかった。

《わが部隊の在りし日の俤はどうしても忘れられません 私の責任は重い しかしどれほど祈ろうが戦友が生きて帰るわけでもなし 平和のために努力することを誓うのである》

渡辺さんは歯科衛生士として働き通し、結婚は2度した。戦争のことは考えたこともなかったが、父の足跡をたどり始めてから、毎日が息苦しくなった。

「戦後69年もたって、こんな形で苦しむとは思いませんでした」。小さい頃に聞かされた「センパン」という言葉は今ものみ込めない。「国のため、上から言われた通りに戦ったのに、なぜ犯罪人なのだろう」。父の苦労を知るたびに、涙が出る。でも、知らないといけないと思う。「手遅れでしょうか」

（今村優莉）

母から戦地の父に送られた115通のラブレターをひもとくことからすべては始まった、と振り返る渡辺喜久代さん。恋文は父によって分厚い束にされていた＝神奈川県鎌倉市の自宅

信濃毎日新聞 2014年11月9日付より転載

中島多鶴さん死去

泰阜出身 中国残留者の帰国支援

89歳

戦時中に旧満州（中国東北部）に渡った元満蒙開拓団員で、中国残留者の帰国支援などに尽力してきた中島多鶴（なかじま・たづる）さん＝飯田日中友好協会副会長＝が7日午後8時34分、脳梗塞のため飯田市内の病院で死去した。89歳。下伊那郡泰阜村出身。自宅は泰阜村8087の1。告別式は11日午後1時から阿南町西条839の5のアイホールあなんで。喪主は長男の秋広（あきひろ）氏。

1940（昭和15）年に家族7人で旧満州に渡り、敗戦後の逃避行を経て46年に帰郷した。村保健師を務める傍ら、訪中を重ねて中国残留邦人の帰国を支援。帰国者の身元を引き受けたり、帰国後の生活支援に力を注いだりしてきた。96年に「第3回信毎賞」を受賞。

家族によると、今月3日朝に自宅で倒れ、飯田市内の病院に入院していた。

逃避行経験 満蒙開拓の語り部

7日死去した中島多鶴さんは近年、下伊那郡阿智村の満蒙開拓平和記念館の設立に尽力し、脳梗塞で倒れる直前まで「語り部」として同記念館などで講演活動を続けてきた。関係者からは8日、惜む声が広がった。

中島さんは敗戦直後の逃避行中に妹4人を亡くした。泰阜村で保健師の活動をする一方、旧満州に残る人たちと手紙をやりとりし続けてきた。

泰阜村の松島貞治村長(64)は「ずっと長く、残留邦人の帰国手続きから帰国後の生活の支援まで関わっていただいた」とねぎらった。

2004年、中島さんの半生を描いた著書「沈まぬ夕陽（ゆうひ）満蒙開拓の今を生きる中島多鶴」を出版した同郡松川町の元教員中（なか）繁彦さん(82)は、泰阜村の中学校で帰国した児童に日本語指導をしていた当時、中島さんと出会った。「日本語が話せない親の代わりに参観日に来てくれ、帰国した子どもたちの親のような存在だった」と振り返る。

語り部として活動していた満蒙開拓平和記念館では10月28日の講演が最後になった。

同館専務理事の寺沢秀文さん(60)は「多鶴さんのような人がいてくれたから記念館もできた」、事務局長の三沢亜紀さん(47)は「戦争体験のない私たちがどう歴史を伝えていくか心細さが襲う」。寺沢さんは「多鶴さんが一生懸命に訴えてきたことを伝えていくことが、思いに応えることになる」と語った。

同館職員で泰阜村の島崎友美さん(29)は「なぜ語り部をするのかと多鶴さんに聞いた時、『忘れたいと思ったことはない。死ぬまで覚えている。話すことは私の使命』と話した。『妹たちが眠る大八浪（ターパラン）にまた行きたい』と言っていた。連れて行ってあげられたらよかったのに」と話した。

中国残留婦人の生涯を題材にした演劇「再会」についての講演会で逃避行の様子などを語る中島多鶴さん（左）と、脚本のモデルとなった佐藤治さん＝1994年10月27日、長野市

中日新聞 2014年11月11日付より転載

満蒙開拓体験の語り部
中島多鶴さん死去

満蒙開拓体験の語り部として活動してきた中島多鶴さん＝泰阜村＝が七日、八十九歳で亡くなった。中島さんは、昨年四月に阿智村に開館した満蒙開拓平和記念館の設立にも尽力。二度と戦争を起こさないでと願い、自身の悲惨な体験を死の直前まで語り続けていた。突然の訃報に、関係者には悲しみが広がっている。

中島さんは一九二五年に泰阜村で生まれ、十五歳だった四〇年に一家七人で旧満州（現中国東北部）に入植した。四五年八月九日にソ連が侵攻し、敗戦を知らぬまま死の逃避行を続けた。肉親と離ればなれになり、四六年八月に一人で村に戻ってきた。戦後は看護師、保健師として働きながら、多くの残留孤児や残留婦人の帰国のために活動し、開拓団の悲劇を語り続けた。

悲惨な体験を語り続けた中島多鶴さん＝泰阜村の自宅で（5月撮影）

記念館は開館一年半で来館者五万人を達成。中島さんは「昨日何食べたか、ゆうべ何やったかは忘れても、満州での出来事は鮮明に覚えている。本当に忘れることはできません。生きてる間は記憶を伝えていきたいと思っています」と意気込みをみせていた。

中島さんは十月中旬に、泰阜村内で開かれた満蒙開拓の犠牲者追悼式にも出席していた。横前明副村長は「保健師として長く村民の健康を見守った傍ら、数多くの残留孤児や婦人の帰国支援に当たった功績は多大」としのんだ。

関係者によると、中島さんは三日に自宅で脳梗塞で倒れ、そのまま意識が戻らなかったという。記念館の寺沢秀文専務理事(六〇)は「あの年になっても平和のために活動されている姿を見て、俺たちももっと頑張らなきゃと励みになる存在だった。正直がっくりきている」と中島さんの死をいたんだ。

告別式は十一日午後一時から、阿南町西条のアイホールあなんで営まれる。

（石川由佳理）

信濃毎日新聞 2014年11月12日付より転載

中国残留者支援の人生
中島多鶴さんをしのぶ
阿南で告別式

中国残留邦人の帰国支援などに尽力し、7日に89歳で死去した下伊那郡泰阜村の中島多鶴さんの告別式と葬儀が11日、同郡阿南町内で営まれた。大勢が参列し、旧満州（中国東北部）で満蒙開拓という国策に翻弄されながら、帰国支援や悲惨な史実を語り継ぐ活動に取り組んだ中島さんの人生に思いを寄せた。

中島さんが設立に尽力した同郡阿智村の満蒙開拓平和記念館の河原進館長(68)は弔辞で、中島さんの最も印象深い姿として「記念館の建設資金調達で県に助成を願い出た時、長身の（阿部守一）知事に面と向かい切々と訴えた」と紹介。「それを節目に支援の輪が広がった。満蒙開拓の母、記念館の顔だった。信念を深く胸に刻み、記念館の運営にまい進する」と結んだ。

中島さんが思いを託した満蒙開拓平和記念館を代表し、弔辞を読む河原進館長＝11日、阿南町

中島さんは計9家族、38人の身元引受人となり、日本での生活を支えた。

9歳の時に妹、父の3人で帰国した上伊那郡飯島町の看護師須田百合子さん(39)は、身元引受人の中島さんの家に毎日通って日本語を習い、料理や家計のやりくりも教わったという。中国に残った母を早くに亡くし、中島さんが看護の仕事に携わっていたことから同じ道を目指した。弔辞では「今日の私がいられるのはおばさんのおかげ。出会えてとても幸せでした」と感謝した。

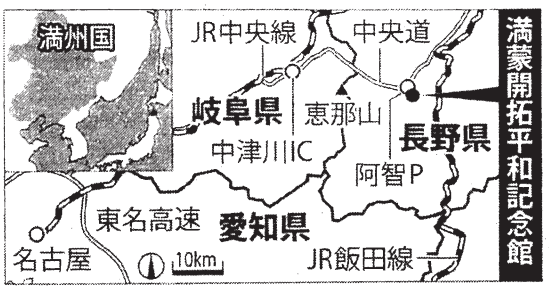
喪主の長男秋広さん(50)＝広島市＝は子ども時代のエピソードを紹介。帰国者支援に駆け回っていた中島さんが「私は運良く帰って来られた。帰れない人が何人もいる。帰れないで死んじゃった人もいる。私がやらなかったら誰がやるの」と話していたことも明かした。

毎日新聞 2014 年 10 月 30 日付朝刊より転載

新 20世紀遺跡 19

長野県阿智村 満蒙開拓団 上

入植27万人の悲劇伝える



69年前、大日本帝国のかいらい国家、植民地の「満州国」（現中国東北部）が消滅した。多くの日本人の血がしみこんだ、かの地の歴史を振り返る満蒙開拓平和記念館が長野県南部の阿智村に開館した。

JR飯田駅から、車で20分ほど。緑が多い、静かな山村の一角。中に入ると木の香りがただよう。建材に使った地域特産の杉だ。都会の喧騒を忘れる。

戦前から戦後まで、満蒙開拓の歴史を大型パネルの年表や体験者たちの証言、手記、当時の手紙や写真などで振り返る。開拓団の暮らしぶりを伝える、貴重な動画もある。

交通の便は決してよくない。しかも展示されているのは凄惨な悲劇の記録だ。だが昨年4月のオープンから今年10月までの1年半で、来館者は5万人に上る。「もともと、それだけ広く関心があったのでしょう。しかしそれに応える施設がなかった」。同館専務理事の寺沢秀文さん(60)はそう話す。両親が開拓団員だった。

開拓団員の暮らしぶりを写真や動画で紹介している＝長野県阿智村駒場の満蒙開拓平和記念館で

戦前、戦中まで日本各地から27万人もの人々が満蒙開拓団として海を渡った。移民は国策だった。当時は農業が国内の主要産業だったが、耕地が不足していた。満州はかっこうの受け皿であった。そこは陸軍が仮想敵国としていたソ連と接しており、日本人が増えることは戦略上も都合が良かった。開拓団の目的は「国内の人減らしと、ソ連に対する人間の防波堤だった」（寺沢さん）。

45年8月のソ連参戦、日本の敗戦とともに満州国は瓦解した。入植者たちは帰国を目指し南下したがソ連や現地民による攻撃、寒さと飢えなどによって、多数が亡くなった。寺沢さんの兄はその1人。引き揚げの途中、発疹チフスで1歳の誕生日を迎える前に亡くなった。中国残留孤児や残留婦人という悲劇も生まれた。

同館はこうした悲劇だけでなく、開拓団が結果として侵略に加担していた、という事実も浮かび上がらせている。日本の国策会社が、満州の現地民の耕地を半ば強制的に買い上げ、開拓団員にあっせんすることもあった。寺沢さんの父、故・幸男さんは41年、満州国吉林省に入植した。生前「開拓と聞いていたが、実際は中国人の家と畑を強引に買い上げたものだった。これはまずいと思った」と振り返っていたという。

移民が最も多かったのは長野県で、約3万3000人。行政、教育機関が積極的に推進したことが背景にある。特に同館がある下伊那地方が最多で約8400人だった。「だからこそ、ここに建てたい」。寺沢さんは7年がかりで開館にこぎつけた。本業は不動産鑑定士として会社を経営している。開館後の運営まで完全なボランティアだ。満蒙開拓は国策だった。それゆえこうした施設は国など公が運営すべきものともいえるが、異なる歴史観があるテーマだけに、現状でそれは難しいだろう。

同館は開拓、引き揚げ経験者の聞き取りと記録、資料収集を進めている。語り部は聞き手がいなければ誕生しない。また現代史の資料は、当事者が亡くなると散逸してしまうことが多い。これらの受け皿として同館が果たす役割は大きい。私たちが忘れてはならない日本現代史の一面を照らす貴重な存在である。

さて、命をとりとめ帰国した開拓団員には、大きな苦労が待ち構えていた。次回に報告したい。

【栗原俊雄、写真も】

＝毎月1回掲載します

毎日新聞 2014 年 11 月 20 日付朝刊より転載

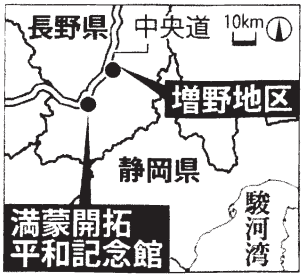
新 20世紀遺跡 20

長野県阿智村 満蒙開拓団 下

引き揚げ、国内再入植の苦労

満蒙開拓平和記念館（長野県阿智村）の専務理事・寺沢秀文さん(60)の故郷、同県南部・松川町の増野地区は、遠く南アルプスを望む高原にある。リンゴの名産地だ。収穫の秋。広大な果樹園の緑に、無数のかれんな赤い実が映える。ほとんどが「お得意様」への発送だけで売れてしまうほど人気が高いリンゴだ。

今の豊かな農村風景から想像するのは難しいが、同地区はもともと赤松などのうっそうとした森林地帯だった。戦後の1947年、旧満州（現中国東北部）からの引き揚げ者らが開拓を始めた。最寄りの鉄道駅から約4キロ離れ、水道もなかった。



寺沢さんの父で旧満州に入植していた幸男さんは敗戦間際、現地で徴兵された。敗戦後はソ連によってシベリアに抑留された。48年に帰国し、増野の開拓に加わった。

大日本帝国政府は国策として旧満州への移民を進めた。国内に耕地が少なかったからだ。移民はそれぞれの植民地で営々と農地を耕していた。しかし敗戦によってすべてを失った。大陸からの凄惨な引き揚げを生き抜いて、ようやく帰国、帰郷した。

とはいえ国内の耕地が増えているはずもない。引き揚げ者たちは、国内各地で再入植せざるを得なかった。その多くは耕地として条件が悪く、地元の人たちが開墾しなかった荒野だった。しかも多くの場合、旧満州で財産を失っていたのだ。再入植は、並大抵の苦労ではなかった。

寺沢幸男さんが植えた木は、今もたわわにリンゴを実らせている＝長野県松川町で

寺沢さんは「戦後開拓は、成功ばかりではありませんでした」と話す。「多くは開墾のために機械化を進め、設備費などがかさんだ。資金の借り入れ、返済のための出稼ぎといった構図で離農が進んでしまったケースがあった」のだ。

増野地区ではそうした負のサイクルに陥らないために、最初から過剰な設備投資をせず人力で開墾していった。出稼ぎは控え、農業に定着していった。「結束が固かったんですよ。開拓1世の人たちの労苦には、頭が下がるばかりです」。寺沢さんはうれしそうに話す。第1次入植者32戸のうち、今も30戸が残る。

■ ■

多くの日本人が夢を託した満州国が消滅してから55年たった2000年。幸男さんは、寺沢さんといっしょに満州国の首都だった旧新京（現長春）を訪れた。そこには大日本帝国の国策会社・満鉄の施設があって、敗戦後に多数の日本人が避難していた。流行病でたくさんの人が死んだ。幸男さんの長男も。1歳にも満たなかった。

犠牲者が埋葬された場所は、広い公園になっていた。寺沢さん親子はその片隅で線香をあげ、手を合わせた。「80歳の父が『可哀そうなことをした。すまなかったなあ』と大粒の涙を落としていたのを、今も忘れません」。明るかった寺沢さんの声が沈んでいた。幸男さんの心中を想像して、記者も言葉が出てこなかった。

幸男さんは2011年3月25日、91歳の誕生日、家族にみとられて生涯を終えた。自身が植えた木は、老木となりながら今も赤いリンゴをたくさん実らせている。

幸男さんのように、旧満州から引き揚げたたくさんの人たちが戦争によるつらい記憶を抱えながら、荒野を切り開いていったはずだ。「人間ってすごいな」。リンゴの木々をみながら、そんなことを思った。

【栗原俊雄、写真も】

＝12月は休載します

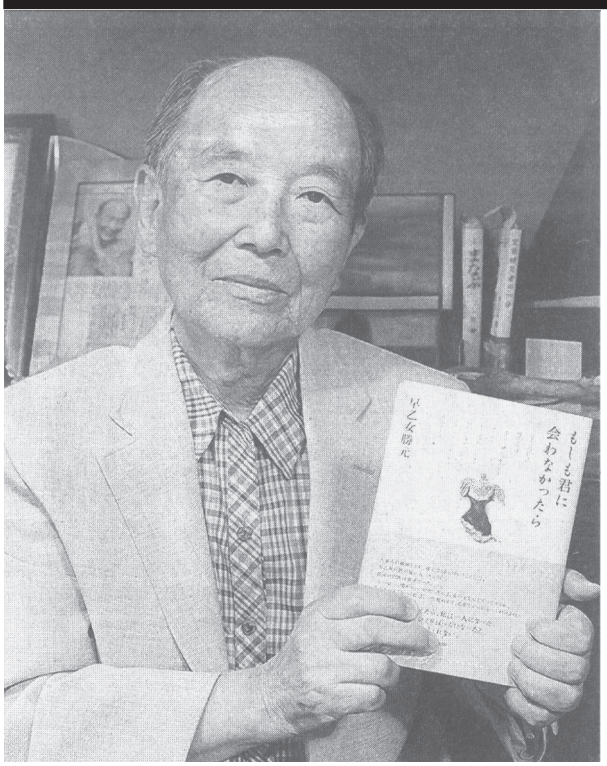
東京新聞 2014 年 10 月 22 日付朝刊より転載

平和の原点 亡き妻との思い出つづる

「声なき声 伝えねば」

早乙女勝元さんが出版

「戦争犠牲者の、声なき声を伝えきれていただろうか」。太平洋戦争末期の東京大空襲を経験し、戦後は戦争や東京の街の歴史を著書に記してきた作家の早乙女勝元さん(八二)は六年前、妻直枝さんを突然亡くし、そう考えたという。来年は戦後七十年。平和を願う原点と最愛の妻、直枝さんとの思い出を最新刊「もしも君に会わなかったら」につづった。（奥野斐）



◀ 最愛の妻との思い出をつづった本を持つ早乙女勝元さん＝東京都足立区内で

直枝さんは二〇〇八年六月、虚血性心不全で六十八歳で旅立った。その三カ月前に脳腫瘍の手術をし、元気になったばかりだった。

ふいに半身をもがれたかのようで、さあ、どう生きていったらよいのか。

突然伴侶を亡くした夫の後悔や戸惑いが率直につづられている。早乙女さんはしばらくむなしさと寂しさの中で過ごしたという。

自身の作品の読者だった七歳下の直枝さんと雑誌社で出会い、一九六二年に結婚。三人の子どもに恵まれた。直枝さんは音楽教諭として東京・下町の小学校などに勤め、平和運動にも参加。早乙女さんの本が出版されるたびに自分のことのように喜び、キャリーバッグに詰めて売りに歩いたという。

戦争被害者の無念を再確認

本作に取り組むきっかけは昨年、母親の生涯を振り返る改訂新版「わが母の歴史」（青風舎刊）の作業中に友人に勧められたことだ。「五年もたつと、一人暮らしもやむを得ないと開き直ってきた」。資料整理に取り掛かる余裕もできた。

四五年三月十日未明の東京大空襲では、十万を超す人が一晩で亡くなったとされる。ルポルタージュ「東京大空襲」（岩波新書）などの著書があり、民立民営の東京大空襲・戦災資料センター（東京都江東区北砂）館長も務める早乙女さんにとって、妻の死は自身を振り返る契機にもなった。

「私は身内を空襲で亡くしていない。不本意に家族を失った人の気持ちを知らない強みがあったからこそ、体験者の声を親身に聞き、記録できた。ただ、今思うと、まだまだ戦争体験者への思いが足りない」

巻末には長女愛さんから見た母親の姿もつづられる。夫から見た妻とは違う、冷静で厳しい娘の視点からの母親像はまた興味深い。

直枝さんは、平均寿命より十年以上も若く亡くなった。「どれだけ無念だったか。それは戦争で命を奪われた人も同じ。命の重みを感じ、体験者が元気なうちに記録して後世の『平和力』につなげないといけない」。早乙女さんは今、あらためて力強く語る。

本は新日本出版社刊。千四百円（税別）。

『平和力』につなげたい

風雪三十年　見事な果実が枝もたわわ

日本残留孤児養父母連絡会

創立 30 年記念活動の報告

石　金　楷

2014 年 7 月 17 日、ハルピン市日本残留孤児養父母連絡会結成 30 周年を記念する催しがハルピン市の黒竜江省社会科学院会議室で行われた。中国紅十字会、黒竜江省及びハルピン市紅十字会の責任者、黒竜江省社会科学院、ハルピン市社会科学院、黒竜江省人民政府外事弁公室日本処、７３１陳列館の幹部、日本残留孤児養父母、日本の孤児、関係の専門家、学者および養父母会のボランティアの代表 100 人近くが出席した。また日本国駐中国瀋陽総領事大沢勉氏も招かれて出席した。

100 人近い参加者

今回の活動はハルピン市日本残留孤児養父母連絡会創立 30 周年を記念し､往時の記憶を呼び戻し、中国養父母の偉大な人道主義精神を讃え、若い世代に現在の平和な生活を大切にさせると同時に、多くの人々に日本の残留孤児及び中国養父母という特殊な団体に対する関心を高め、真の意味の中日の世々代々の友好を促進させようとするものである。

養父母連絡会の胡暁彗名誉会長は席上、連絡会がこの 30 年続けてきた活動を報告、中国養父母、中国に残る残留孤児および研究者が発言した。集まった人たちは 30 年にわたる連絡会の活動を高く評価、何人かの専門家は残留孤児養父母連絡会の活動を堅持し、日本の残留孤児問題の研究をさらに進めること、この歴史的事実をさらに宣伝すること、世界平和を維持することの重要な意義を表明した。専門家や学者たちは連絡会が交流の中心になり、その橋渡し役になり、橋頭堡になって、中日両国の友好人士の団結、中国人民が日本の残留孤児を守ったこと、さらに多くの人たちが歴史を見つめ、共に困難を克服し、中日友好事業の発展に寄与することを希望した。

日本からも多くの祝電

日本の駐中国瀋陽総領事大沢勉氏は挨拶の中で、記念活動を祝福し連絡会の活動に感謝を表明した。彼は日中両国が一衣帯水の隣国であり、2000 年近い交流の歴史がある。この長い歴史の中には多少の不幸な歴史もあった。しかし、今日参集された各位の温かい気持ちと行動を思うとき、私たちは感謝を表すとともに、大きな勇気を与えられた。両国の間にいかなる困難が出現しようとも、この困難を乗り越え、さらに素晴らしい友好関係を構築するものと信じている。

記念活動は、黒竜江省人民対外友好協会、黒竜江省科学院などの団体、および満蒙開拓記念館、東京中国歌舞団、日本残留孤児鹿児島会、中国帰国者自立互助会、大阪府八尾市日中友好促進会、日本残留孤児作家・長安伊知子、友好人士安達大成、南誠先生等友好団体と個人からの祝電を受け取った。

また日本の朝日新聞、読売新聞がこの記念活動を伝えた。

記念活動はさらに素晴らしい歌舞を披露、熱烈な友好ムードの中で幕を閉じた。

（訳　奥村正雄）

残留孤児を描いた中国映画

『厚土深痕』（深い傷跡）

石　　金　　楷

■初めに

この映像は本誌にも毎号、原稿を寄せていただいている石金楷さん（元ハルピン市中国残留孤児養父母連絡会事務局長、現在、孤児である夫人とともに東京都に在住）から提供されたものである。テーマは敗戦後の混乱の中で、孤児を育て上げた中国人夫婦の愛憎、養父母の情愛に中国人としての意識が強くなってゆく子供の物語である。

できれば毎年､秋に東京で開催されている東京映画祭(今年は 10 月 23 日から 31 日まで)に参加したかったそうだが、時間が間に合わず、まずは本誌で誌上初公開となった。

■映画のあらすじ

1945 年 8 月、日本の敗戦で各地の開拓団に残された老幼婦女子は、飢えと寒さと疫病で死線をさまよっていた。老四は 4 歳になった小山フジを連れて帰宅するが、妻・大梅の激しい反対を受けた。大梅はかって日本軍の憲兵にお腹の赤ちゃんを蹴り殺された過去を持ち、日本人に対する恨みは想像を絶していたのだ。老四はフジを収容所に送って行ったがフジの母親はすでに死んでいた。再びフジを家に連れて帰ったがフジの高熱は下がらない。夫婦の懸命の看病で、フジは危機を脱する。この救命活動の中で妻・大梅は日本軍に対する恨みをフジに押し付けてはいけないと思い始める。フジを留大勇と名付けた。

老四が匪賊討伐の戦闘中、犠牲になる。悲痛な気持ちの中で、大梅は大勇を立派に育て上げ、学校にも通わせて教師にした。

時が流れ、中日関係が正常化。残留孤児となっていた多くの人たちが日本の両親の元へ帰る流れが生まれた。大梅は病を隠し、大勇に日本へ帰ることを勧めた。日本へ行く大勇を乗せた車が動き出した時、突然、車から駆け降りた大勇が叫んだ。「お母さん、私は行かない！」

（構成　奥　村　正　雄）

いざコンテストへ

―記録映画『10 日間だけの祖国』―

わたしの方正之路　　奥　村　正　雄

■勝負の時、秒読みに

私たちが撮り続けてきた、厚労省から認定されない残留孤児・徐士蘭さんの訪日ドキュメント『10 日間だけの祖国』は、いま編集作業の大詰めを迎えている。この作業を年末までに終え、年が明けてから最終補正作業にかかり、3 月 20 日に終了、これを 4 月初めに締め切りを迎える『湯布院映画祭』コンテスト部門に応募する予定である。

だが制作の最終段階を迎えて迷いが尽きない。たとえば、予想された訪日ビザの申請許可が、予定より遅れに遅れて、私たちがイライラしながら受け入れ準備（徐士蘭さんと付添いの 3 女・叢会霞さんが宿泊予定のホテルや東京、千葉で開催予定の歓迎会場の予約）をいったん解約したり先送りするうち、あの東北大震災発生の直後にビザが下りたというメールが入ったのだ。その時の当惑と、明日はどうなるかが、だれも予測できなかったこの時期に、有効期間 3 か月という限られた時間の、どの 10 日間を「来日」と決めるか…。徐士蘭さんの悲願を叶えたいとここまで進めてきたが、この未曾有の国難に遭遇するとは…不運とあきらめてもらってキャンセルすべきか？！　迷った末、私たちはここで、3 カ月後の来日に賭ける「苦渋の決断」を迫られた。

■「中国へ避難を！」

この問題を含め、徐士蘭さん訪日の土壇場にきての緊張場面を、東北大震災の新聞に載った写真 1 枚で語らせるわけにはいかない。悩んだ末に思いついたのが、この緊張した局面で毎日、何回もやり取りした徐士蘭さんの孫娘との電子メールのやりとりだ。

「おばあちゃんは心配してるでしょう。私たちは迷った末に、ビザの期限ぎりぎりの 6 月 8 日からの 10 日間と決めた。その予定で飛行機の切符も頼んでもらっていいよ」

実は東北大震災が起きた直後、それまでも双方のメールによるやりとりを担当してくれていた孫洪波さん（徐士蘭さんの長女の娘）から泣かせるメールが入ってきていた。

「中国へ避難して来ませんか」

というのだ。あとでわかったことだが東北大震災の第 1 報が海外に伝えられると、各国は放射能汚染が日本の国土全体に及ぶ可能性を心配し、すぐ日本に居住する自国民に帰国するよう知らせた。ひとり日本は混乱を恐れ、自国民にはいっさいこの可能性を報じなかった。その怖れを徐士蘭さんの孫娘のメールで読んで胸が熱くなった。

■二度とない輪の広がり

もう一つ、最後の編集作業に入ってぶつかった壁はフィルムの長さだ。応募規定は時間 60 分である。どのカットを生かして、どの部分を切るべきか。メーデーや、さまざまな集会に出かけて行ってアピールしたり、署名やカンパ活動を広げた。中国残留孤児やその支援組織、支援弁護団などに資料を送り、帰国者の団体や北京の日本大使館の有志達からもカンパをいただいている。祖国が残留孤児と認めない一人の老女に、ただひと目、祖国の土を踏ませてあげたいというアピールに、これほど支援の波が広がり、老女の願いが実現するというドラマは、もう今後、ないだろうと思う。それだけに、コンテスト応募で区切りがついたら、ノーカット版への挑戦、という誘惑に駆られている。

「徐士蘭ドキュメンタリー」制作ウラ話

会　員　　吉川　雄作

2010 年6月 方正の自宅で

未認定中国残留孤児・徐士蘭のことをご記憶であろうか。そしてドキュメンタリー映画のことは……？

ものが完成していないのに「ウラ話」でもないと思うが、最近は、「映画はどうなったの？」と聞かれることもめっきり少なくなってきたので、忘れられないように敢えてウラ事情の一端を書いておきたい。

本年６月の総会で**「10 日間だけの祖国」**の“試写”をさせて頂いた。奥村弁士の語りで何とか恰好をつけてもらったが、思い出すのも冷や汗三斗の“汗顔もの”であった。

映画の元になる映像はテープ 10 本余り、延べ 10 時間以上に及ぶ。2010 年、方正の徐士蘭宅での聞き取りと方正名所案内から始まり、招日活動の記録（文書・写真・メール等）。そして 2011 年、招日が実現して、新潟空港で出迎え・滞在中の密着撮影（厚労省訪問・千葉と東京での歓迎会・西伊豆で富士を見る）から新潟空港で見送り。2012 年の方正行き（徐士蘭の旧居周辺と旧知宅訪問）。さらに今年 1 月、「厳冬のハルビン・方正」（校舎・黒竜江省弁公室での撮影）と、豊富と言ってよい。これを 1 時間前後の作品にまとめたいのだが、なかなか構想が定まらない。

加えて、撮影機材・編集機器にいくつかの問題があり、実際にトラブルも重なった。

撮影には SONY のホームムービーカメラ（一世代前のデジタルテープ方式）を使用してきたが、カメラはもちろん再生装置・編集機などの周辺機器もすでに製造中止になっている。万が一故障しても修理できる保証はない。

編集と DVD 作成の作業はパソコンによるのだが、これも編集ソフトは Windows XP にのみ対応のもので、ご存知のように Windows XP は本年 4 月にサポート切れになって、突然のダウンもあり得る。加えて、わがパソコンは記録装置の残量が少なくなり、せっかく時間と労力を注いで編集したものが保存できなくなった。対策として急遽「外付けハードディスク」を購入したが、使い慣れないので再々操作ミスを犯す。保存したはずのものが一瞬にして消滅（？）したことも再三に留まらず、そのたびに、元テープからの「取り込み」からやり直しとなった。

しかし、機器操作に習熟するためには、ミスを繰り返してでもやらねばならない。新旧の機器の狭間で、いつまた突然のご破算になりはしないか……という恐怖の中での作業であった。

――というわけで、６月の試写は、薄氷を踏む思いでなんとか間に合わせた「駆け込み上映」であった。素人が映画を制作することの“無謀”を思い知らされた。

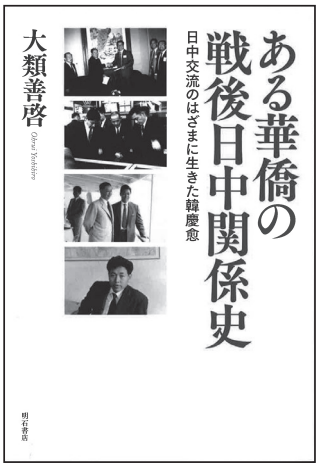
だが、乗りかかった舟、徐士蘭の招日実現に協力頂いた方々への感謝を兼ねた報告という意味からも、映画の完成は必須の命題と自覚している。何としても完成させなければならない。

羽田澄子監督の「私の記録映画人生」（2013 年 3 月 岩波書店刊）によると、映画制作は企画・撮影から完成までに 3 年 4 年かかるのは普通で、完成までに十数年かかった作品もあるという。監督の記述に力を得て、**「未認定残留孤児の招日実現」**という空前絶後とも言うべき貴重な機会と映像材料が、宝の持ち腐れにならないよう、飽くことなく完成を目指していく。

『ある華僑の戦後日中関係史

―日中交流のはざまに生きた韓慶愈』（明石書店）を上梓して

大類 善啓



＜日中交流のはざまに生きた韓慶愈＞というサブタイトルをつけたように、本書の主人公は、在日華僑の韓慶愈である。裏話をすると当初私は、『ある華僑の秘められた＜もうひとつの昭和史＞』というタイトルを考えていた。しかし明石書店との話し合いで上記のような書名に落ち着いた。

現在、大きい書店をのぞけば、「中国が崩壊する」と云った本が並び、週刊誌には反中感情や嫌韓感情を煽るような記事が躍っている。「日中友好」を望むような本が売れず、「中国脅威論」や「韓国嫌悪観」を煽るような本が売れるという実に嘆かわしい時代にある。

40 余年前、日中国交回復を求める国民運動が全国的に広がり、政府を動かす力になり、民間レベルでの豊かな交流が日中の間には広がっていたのである。

例えば 1954 年、李徳全を団長とし、廖承志を副団長とする新中国になって最初の代表団、中国紅十字会代表団の来日は「李徳全旋風」と呼ばれるほど日本の民衆は歓迎し、新聞は連日、好意的に記事を掲載したのだった。李徳全一行が京都から大阪へ向かう一時間、国道の両側から、人々は絶え間なく赤十字の旗を振って歓迎したのである。

その後、世界的な京劇役者・梅蘭芳（メイランファン）を代表とする戦後初めての京劇代表団の来日の際、戦前の軍部の嫌な記憶がある梅蘭芳に対して周恩来総理は、「愛国的な芸術家であるあなたはきっと、心の中にわだかまりがあるでしょう」と気遣いながらも、大きな視野で日中の友好を願って日本での京劇公演を支援し送り出した。

中国切っての映画スター・趙丹と高峰秀子ら日本映画人との交流など、本当に豊かな日中の民間交流が生き生きと輝いていた。

書かれることの少ない華僑からみた戦後とはどうだったのか。そして日中関係が冷え込む今、拙著を通じて、過去の交流を思い返していただきたいと思う。

書評などの紹介記事は別に転載させていただいた。また、＜日中友好 99 人委員会＞会報には秋岡榮子さんが書いてくれた。これは 12 月初旬に発行されるので転載という形を取れなかったが、秋岡さんのご了解のもとに本誌に掲載させていただいた。記事を書いていただいた皆さまには改めて感謝を申し述べたい。

まだ拙著をお読みでない方は、ぜひ書店でお買い求めていただくか、図書館に請求していただき、ご一読いただければ嬉しい限りです。

（おおるい・よしひろ：本会事務局長）

日中問題の深淵に誘う韓慶愈半生記の魅力

―大類善啓著『ある華僑の戦後日中関係史』を読んで―

石飛　仁

在日華僑の苦悩

本書は、歴史に翻弄されて来た在日華僑の苦悩する姿を真摯な筆致で描いた好著である。

尖閣列島問題が発生して、日中両国関係は、一気に悪化し、１９７２年以来積み上げられてきた、国是としての日中友好政策は、暗い谷底に突き落とされたかのように、冷え込んでしまった。友好の冠をかぶせることによって維持されてきた領土の問題を、ほとんど一方的にその冠をはずして、実効支配の現実を盾に、所有権を言いだしたのでは、外交音痴で日中戦争の複雑なる沼に落ち込んだ過去から、なにひとつ学んではいないことになってしまった。外交音痴が常である現政権のポカを笑って済まされない深刻な溝が両国間にはあるのだ、表現力の極めてへたくそな日本人民の島国ならではの性質もまた問われなければならない。

そういう意味からして、真の日中関係史を人の営為によって探る本書は貴重である。

中国のことを大事に思えば思うほど、日本民族に必要なことは、己の存在を世界視野の中で捉えるという努力である。絶えることなく押し寄せてくる被害者側のコブシには、歴史を刻んだ怨念が宿っているのだから、両国民の過去は一体全体どうなっていたのかということについて、政治的にではなく、人の血肉として、その内実を正確に理解しなければならないのである。

私は、二年前、旧満州帰りの人々によって、設立された社団一般法人「国際善隣協会」の一会員として、日中戦後交流史の裏方として活躍されてきた本書の主人公、韓慶愈氏をお招きして日中交流史の知られざる逸話を語ってもらったことがあった。その時の意義は、現場で汗をかいてきた人の姿がめっきり少なくなり、両国の複雑な関係性を歴史の事実に立って展望できる人がいなくなっていたからである。田中角栄総理の日中友好政治路線が退潮していくにしたがって、観念論や伝聞、曲解が横行するようになり「事実なんかどうでもいい」と言い出す某大学教授が出現したり、１９７２年に戦争賠償を放棄してまで平和友好を国策として築き上げた「日中共同声明」を、桎梏だと言い出してつぶそうとする戦争賠償蒸し返しグループが登場する時期になっていたから、実際の日中交流の裏方として汗をかいてきた韓慶愈氏には歴史の生き証人としてぜひとも登場していただきたかったのである。

「華人労工」と韓慶愈との出会い

私には、韓慶愈を知るきっかけがあった。それは、日本敗戦が決定的になってソ連共産軍が満州に侵攻して逃げ惑う日本人が命を落とし、ハルピン郊外の「方正県」に「日本人公墓」として五千人の霊が中国側の協力で守られていたのを、著者の大類善啓らが「方正友好交流の会」を作り、また韓慶愈がそれを支援して日中民間交流を盛んにしていることを知ったことによる。

私は、国交正常化の一年前から、「花岡事件」(1945 年 7 月 1 日に発生)を追跡し加害企業と交渉を開始していたが、謎となっていた敗戦直後の日中混乱時代の真の姿を捉える観点から、満州国留学生韓慶愈の過去に注目したのである。

韓慶愈は、満州国からの国費留学生として、在日の身にあったときの話である。戦局悪化の一途をたどる負け戦の中で、満州国政府に帰国船に乗るように言われ、八月八日新潟港か帰国の途に着く。その船には満鉄社員の家族も乗り込んでいるばかりか、日本軍の精鋭暁部隊が軍需機械設備を積み込んで、満州国に移して、本土決戦の補強を担うこととしている十艘からなる船団だった。新潟出航の目的港は、羅津港（ラジン現在北朝鮮）だった。ところが船上でソ連軍の参戦（８／９）が知らされると、船団は日本海を彷徨いはじめた。そして出港して一週間後の八月十五日、船上で日本が戦争に負けたと知らされる。留学生たちは、内心こみ上げてくる喜びをかみ殺さなければならなかった。周囲は落胆する悲壮な日本人ばかりだから留学生たちは下を向いてその場をやり過ごした。翌日、船は敦賀港に着岸した。満州国留学生たちは日本に残留するしか方途はなかった。日本敗戦の只中で、食料を求めて京都に出て、さらに東京を経て次に盛岡へと移った。その盛岡に逗留中に崩壊した満州国の官吏が救済にやって来て、一人ひとりに帰国費用等生活費を満額渡してくれた。微妙な立場である。時間つぶしのような北海道旅行にでかけた。そこで出会ったのが、戦時下の「華人労工」として華北地区（汪兆銘国民党支配下）から日本各地（１３５か所）に連行されていた労働者の群れだった。存在自体が謎だったのだが、満州国の留学生たちは、彼らの寮を訪ねたりして交流している。私が事情を聞きたかったのはその接触時の貴重な証言を得ることであった。

敗戦の混乱を利用した「花岡事件」の隠蔽

韓慶愈は、日本に残留した満州国留学生として、まさに激動の敗戦直後の日本に居続けたわけだが、仲間たちはそれぞれの機会ごとに生きるために散っていく。帰国のチャンスが巡ってくることを待ちながらも、仕事を探して残留生活に入るのだ。彼は、中国語新聞の記者となる道に就くことができた。記者となって日本に進駐してきた蒋介石国民党代表部と接触することもあった。国際軍事法廷(東京裁判)も傍聴し、「華人労工」の身分で戦犯事件「花岡事件」の体験者でＢＣ級「横浜裁判」の証人とし残っていた翟樹棠とも親交を結ぶ機会があった。中国人四万人強制連行（「華人労務者移入政策」閣議決定）の全貌については、当時は、画策した官吏と学者以外は、誰もが知らぬ事実だった。検事役となった中国の国民党蒋介石側も、この国家犯罪の全容は把握したとは言えない中途半端なものだった。だから、国家犯罪の一部分として個別の被害者については知っていても、全貌を知る由もなかった。ずっと後になって追跡調査してから少しずつわかったに過ぎない。今ではその全貌は私をして明確となっている。だが、連行された「移入華人労工」（カラクリ有）と留学生たちが、敗戦直後の東京で接触していたという事実は、当時の中国関係者の状況を理解する上で極めて貴重な証言だったのである。

韓慶愈が、残留満州国留学生の立場で、日中間の戦後処理につき、最前線で奮闘していただろうことは、本書の中で見え隠れして有用である。激しい国共内戦を経て、中国人民政府（共産党を軸にした連合政府）が北京に出来たのは、１９４９年『昭和２４年』１０月のことである。日中の戦後史につき不明な点が多いわけは、日本人の引き揚げを巡って、内戦がすぐに勃発したことによる。つまり、国共の満州国の争奪戦や国民党内の内紛ともいえる、蒋介石と汪兆銘の争い。一気に膨張する共産党指導の連合戦線。沿岸地域と内陸との格差問題が入り組み、しかも中国側（軍閥）に有用だとして残された残留日本兵の存在と、引き挙げろという元帥に逆らっての内戦加担の残留皇軍の存在など、まさに混戦の中国である。だから、その反映で日本には戦勝国として進駐をしなければならなかった国民党軍は、代表部の官吏（軍人）以外には、進駐軍を派遣することができなかった程である。

だから、対日戦勝国の一員として敗戦国日本に乗り込んできた蒋介石国民党の「中国代表部」

はきわめて脆弱だった。上海から米軍の飛行機に便乗しての形ばかりの日本進駐を果たした彼らは、満州国や汪兆銘親日政権が大使館として持っていた建物を接収するのがやっとで、代表部の警備は、なんと「花岡事件」戦犯裁判の証人として残留中の「旧労工」を軍服姿にすげ替えて国民党軍人（即席の進駐軍）に仕立てるのがやっとであった。

在日中国人の身分が確定するのは、講和会議（１９５１年４月日華平和条約）が成立してからになるが、中国は北京と台北に割れて二つの政府となって国共の争いはさらに続いていったのである。その、最も難しい混戦時代を果敢に潜り抜けたひとこそ在日華僑・韓慶愈だったのである。

廖承志から託された任務

新中国政府誕生時から対日本関係の中国側高官は、なんといっても日本に留学経験のあつた周恩来総理であったが、党中央の座にあった周恩来総理が対日関係を任せていた人物こそ、廖承志だった。その対日高官である廖承志から、韓慶愈は、在日華僑のまとめ役として新聞発行をするようにと指示を受ける場面があった。中国の内情を正しく在日華僑に伝えて日本にいる華僑をまとめていくようにという役割が、指示されたのである。

当時の日本には、満州国留学生、国民党（汪兆銘）派遣の留学生、台湾からの留学生等が中国（戦勝国）留学生として存在していた。戦前から家族とともに日本で営業していた華僑がこれに加わるが、その子供たちは、本国語の使えない華僑としてその一隅にいた。彼らは、日本人の中で育っているので、日本の実態はよく知っている分、日本への敵意は希薄だった。それらの複雑な出自を理解したうえで人間的にこれをまとめ上げる任が韓慶愈に与えられたのである。

若き活動家韓慶愈が、今回初めて本書で明かされた、「短期間日共秘密党員の経験有り」という点も、当然の活動経緯があっての話であろう。最終的には旧満州に帰りたいと希望していた韓慶愈が、その希望を閉じて再び日本に戻る事情の描写は、著者大類の手で克明に描かれている。新政府に期待して新中国建設のために働きたいという若い華僑たちが胸ふくらませて、続々と帰国するとき、韓慶愈だけは「新聞発行」の任を指示されて日本に戻されて残るのである。１９５３年７月２日、韓慶愈２７歳の時の決断であった。

しかし、韓にその任を与えた中国政府の側で、その後、大異変が起きた。階級闘争という文化革命が若者を大動員して開始されたのだ、その内実は一大権力闘争に終始したものだった。希望に満ちて帰国していた華僑たちの身の上にも少なからず犠牲が出た。外国にいたこと、この場合は日本から来たスパイだとしてつるしあげを食ったりしたのである。

もし、韓が指示に逆らってあの時に帰国していれば、日本との交流を大いに促進していただろうから、いちいちやり玉に挙がって命まで脅かされていただろう。しかし、韓は日本に帰化することなく嵐の過ぎるのを待って再び日中交流促進にまい進するのである。

梅蘭芳来日公演成功に賭ける

彼自身が、力を注いだいくつもの日中友好事業の中で、誇らしく思い出されるのは、戦後初の京劇役者、梅蘭芳（メイ・ランファン）の来日に尽力し通訳と防衛を果たし大成功させたことであった。

戦前にも二度来た経験のある梅蘭芳は、日本では京劇の名女形とし絶大な人気があり、共産党政権になって戦後の西側に組みした日本政治体制とは対極にあったが、こと舞台文化芸術においては、感動だけに価値があり、むしろその価値を支える体制という意味で、公演の成功は

絶大なものがあった。対日トップの高官周恩来の祈るような成功期待を、韓は一身に受け止めて防衛に勉めた、防衛とは、蒋介石台湾派からの激しい妨害工作に対抗して梅蘭芳を守って、日本の大都市での全国巡回公演を成功させることだった。１９５６年、韓慶愈が３０歳のときである。妨害を排して、必死で公演を成功させた韓は、この経験で二回りも、三回りも人間が大きくなったと思えたという。確かに、文化芸術は、政治と違い、国境を超えて大きく人間を感動させる力があるのだ。人間同士なら政治体制の違いがあっても通じ合うものは確実にある。この信念が梅蘭芳から直接学んだ人間的核心だったのである。

韓慶愈は、以来今日までずっと全階層の日中交流企画に現場人間としてたずさわってきた。政治的断絶の続く情況下であっても日中の文化交流を盛んにし、政経分離をはかって廖承志と高崎達之助の名を被せたLT貿易を推進し、京劇の名優梅蘭芳(メイ・ランフアン)の全国ツアーを成功させ、アニメ「鉄腕アトム」を中国中央テレビの全国放送網に乗せて子供たちを喜ばせてきた。そして対立関係にあった垣根を越えて画期的な国交正常化への地ならしを成し遂げていくのである。そして、韓慶愈でなければできなかったとされる日本の優れた工業技術の中国伝播の事業を促進させた。

日中交流に腐心すればするほど、両国の違いを正確に知る機会が訪れる。今最もその違いに韓慶愈は心を痛めていることがある。急激な経済発展に伴い中国人が海外に出かける機会が増えると同時に、そのマナーの悪さが目立ってしまうのだ。相手国の文化を理解し守ることは、真の交流を促進するときの前提である。韓慶愈はマナーの向上を目指す「東方文明振興会」を設立し、その会長に就任したのである。

本著は、日中友好に果たした韓慶愈の事績が、孫文・魯迅・郭沫若・周恩来と続く高徳なる日中交流人士の王道に沿うものであることをよく示している。

（いしとび・じん：1942年生まれ。ルポライター、劇作家・演出家。著書に『風の使者ゼノ』『花岡事件鹿島交渉の軌跡』・『花岡事件・秋田裁判記録』『蘇れ古代出雲よ』他。旧「新劇人反戦代表」、東京東アジア文化交流会主宰を主宰）

編集部注

＜石飛氏のライフワークは、「中国人強制連行」問題「花岡事件」の調査と償い交渉である。花岡事件は。1945年7月1日（6月30日説を取る人もいる）に秋田県の花岡鉱山で中国人強制連行労働者が過酷な労働に蜂起したが失敗。全員が拷問、虐待を受け鎮圧された事件をいう。日本は戦争末期、国内の労働力不足を補うため、中国大陸や朝鮮半島などから強制連行によって労働力を確保する政策を取っていた。

来年は70周年ということで石飛氏は現在、7月1日花岡事件７０周年記念現地慰霊祭とシンポジュウム開催準備中である。

今のところ、現地の正信寺で6月30日と7月1日に法要などが行われる予定である。来年６月発行予定の『星火方正』20号には詳細を報告できると思う。関心のある方は事前に連絡いただければお教えできると思う＞

激動の時代を生きた青春譚

―「ある華僑の戦後日中関係史」を読む―

森　一彦

本書「ある華僑の戦後日中関係史」は、1943 年、17 歳で「満州国」公費留学生として来日し、日本の敗戦後も日本に留まり日中関係の交流に尽力された、韓慶愈氏（以下敬称略）の半生を描いたものだ。著者は、韓のもとで働いた経験のある、社団法人日中科学技術文化センター理事・方正友好交流の会事務局長を務める大類善啓氏（以下敬称略）。

1926 年、中国遼寧省の農村に生まれた韓は、17 歳で来日し茨城県の太田中学（現在の茨城県立太田第一高等学校）に入学する。学友たちは優しく、日本に対する悪い感情は一新されたという。

1945 年 8 月 8 日、「満州国」からの帰国命令を受けた韓たち留学生は、新潟港から帰国船に乗るも、16 日朝、日本の敗戦が船上で伝えられる。その時、留学生仲間の先輩が言った。「日本は負けた。だからといって我々が喜んでいたら殺されるぞ」――下を向いていれば悲しそうに見えるといわれ、留学生たちはみんな下を向いていたという。この頃から韓は、自分の置かれた状況を冷静に分析する習慣がついたように思える。

1946 年には、日本全国の留学生の統一組織である中国留日同学会が成立する。中国から派遣されてきた国民党の代表団に、韓は中国人留学生の代表として会うのだが、思いもよらなかったことに、国民党は、旧満州からの留学生を「中国の裏切り者」と見なしていた。衝撃を受けた韓の気持ちは、徐々に国民党から離れていく。

やがて新中国の誕生後、華僑の帰国運動にも取り組んだ韓は、1953 年、東工大を卒業したその年に、中国からの残留日本人の引揚船の復路を利用した帰国船に学生代表として乗船、天津では熱烈な歓迎を受ける。そこでの、対日政策を担当することとなる大物政治家の廖承志との出会いが、中国へ帰り新しい祖国建設に協力しようと考えていた韓の運命を変える。廖承志から、「日本に残って中国語の新聞を出してもらいたい」と言われたのだ。その時には、本意ではなかった韓だが、この時代に中国に帰国した華僑や留学生たちは後年、文化大革命の大変な災禍を被ることとなる。

日本に戻った韓は「大地報」を創刊し、最盛期には一万部を発行するまでになる。

そうして 1954 年、新中国最初の訪日団となる中国紅十字会代表団への記者としての随行から、その後の重要な訪日団に深く関わり続けた韓の歩みが始まる。李徳全を団長とするその団には、廖承志、肖向前、王効賢、呉学文、楊振亜など、後の日中関係を担う錚々た

るメンバーが含まれていたという。
　後に、中国共産党が日本共産党と袂を分かつ最後の訪日団の通訳も、廖承志の指名によって呼ばれるほど、韓は信頼されていた。
　その後、数々の中国からの訪日団の通訳、随行を重ねた韓は、呉学文や京劇の梅蘭芳、作家の巴金、謝冰心、映画スターの趙丹らとの親交を深めることとなる。文革で消息を絶った趙丹と、高峰秀子が 15 年振りに再会するシーンは、本書のなかで印象的に描かれている。

　文革の影響は、韓が創刊し 15 年続いた新聞「大地報」にも及び、1970 年の初頭に廃刊となるが、その直後に韓は、株式会社向陽社を設立する。同年に、韓は親族訪問ということで訪中するが、迎えてくれたのは公安だった。韓はスパイと疑われていた。韓と下放中の娘との再会シーンも、韓の心の痛みとして印象に残る。
　そして、日中国交回復、周恩来、朱徳、毛沢東の死、文革の終焉。そして中国は、改革・開放政策へと大きく舵を切る。太極拳の楊名時を中国へ案内した韓は、北京で趙丹と 16 年振りに再会する。趙丹が亡くなる 2 年前の 1978 年のことであった。
　　日本の戦中・敗戦の只中から戦後の混乱を経験し、国民党からは厳しい言葉を浴びせられ、新中国の成立、文革の嵐、日中の国交回復、文革の終焉から改革開放へ――時代の波に翻弄され続けた韓は、常に自分の置かれた環境を冷静に分析し、政治や社会を時に冷ややかな眼差しで見つめながら、そこに生きる人間個人との付き合いだけは守り続けてきた。
　本書を読むと、韓が立ち会った歴史の分岐点での数々の貴重な体験や、自身が通訳した歴史的な会談の内容を、韓は決して自慢したり、ひけらかしたりはしていない。むしろ、一歩引いて冷徹に分析したり、自身の心の痛みとして吐露したりするのである。
　大類は、本書のまえがきに、こう書いている――
　「中国大陸にルーツを持つ華僑は、度重なる戦乱を潜り抜けてきた人々の末裔らしく、自己の人生を大仰に語らないように思える。いつも淡々と生きているかのように見える。韓もその一人かもしれないが……」

　韓と大類との最初の出会いが、韓が設立した向陽社の入社面接であったことは、本書に詳しい。向陽社は、日本の生産管理システムなどを中国に初めて紹介した雑誌「日本工業技術」の刊行や、工業辞典、電碼本、貿易必携などの出版を行なうとともに、手塚治虫の TV アニメ「鉄腕アトム」を中国で大ヒットさせるなど、日本企業の中国における広告活動に路を切り開いた会社でもある。
　初期の「向陽社には多士済々の人物がいた」と大類は書いているが、本稿を書いている私も、向陽社に勤めていたことがある（多士済々のなかには含まれないが）。
　ここで私の赤面ものの体験談を披歴したい。若気の至りで早々に向陽社を離れた私は、

ある中国関連企業の入社面接で、その会社の社長から次のように言われたことがある。「韓さんの会社を辞めた人間を、理由の如何にかかわらず、ウチが雇い入れる訳にはいきません」――と。その時には、若い私にはその言葉の意味するところが理解できなかった。しかし今回、本書を読み日中関係における韓の存在の大きさを改めて識り、30 数年振りにようやく、あの時あの会社の社長に言われた言葉に得心したのだった。

本書の著者 大類は、私にとっては向陽社の先輩であり、30 年来の友人であり、また私の仲人でもある。しかし付き合いは水の如く淡く、お互いを干渉することもなかった。今から 10 年ほど前に、私は難病を患い 7 ヵ月間の絶食生活を送っていた。その時に、大類が誘ってくれて、一緒に六本木ヒルズの美術館で開かれていた草間彌生展を観に行ったことがある。真っ赤な水玉模様や巨大なかぼちゃ、草間彌生の底抜けに明るくポップな世界に、鬱鬱とした日々を送っていた私は圧倒された。この時のことを、本書の文革後の後半章を読みながら、なぜか私は思い出していた。

本書の終章のなかの「韓との最初の出会い」文中に、大類が中国との仕事がしたいと思い至るきっかけとなった、1978 年の初訪中時の感想を書き留めたこんな記述がある――

「中国初訪問は刺激的だった。上海に入り、大きな通りをゆったりと歩く市民の姿を見たとたん、中国の民衆はやはりイデオロギッシュな民衆ではない、と直感的に思った。イデオロギッシュというなら、日本人の方がもっとイデオロギッシュではないか、とも思った。悠々と歩く上海市民の姿を見て、中国的世界に惹かれた」

本書は、激動の時代を生きた韓の歩みを大類が書いたものである。しかしその一方、私には、大類自身の彷徨する魂こそが、彼を中国という世界と出会わせ、韓と出会わせ、本書を書かせたのではないかと感じるのだ。韓慶愈の、国家と時代とに翻弄されながら彷徨しつつも泰然自若とした歩みと、本書の裏側に隠された大類善啓の思想をめぐる彷徨する魂の歩み――その二つの青春譚としてのキラキラとした輝きを、本書は放っている。それこそは、激動の時代のなかで積み上げられてきた、日中関係の草創期の輝きと言えるものなのかもしれない。今、その輝きは、日本と中国の人々に継承されているだろうか。

（もり・かずひこ）1958 年生まれ。方正友好交流の会理事。向陽社等を経て西武百貨店北京駐在事務所長として 93 年から 3 年半を北京で過ごす。現在、米国系の広告会社 I&SBBDO に勤務、同社の元社長の一人には、田中角栄訪中時に同行記者団の団長を務めた元読売新聞政治部長の三箇和彦氏がいる。

「ある華僑の戦後日中関係史」（大類善啓著）を読んで

秋岡　榮子

上海にいると、文化大革命も遠い昔のことだと感じる。

昨年末、上海の「富二代」のチャリティーパーティーに招かれた。「富二代」とは、金持ちの息子や娘のことである。参加者はほとんどが２０代～３０代前半、いわゆる「パーリン（八零）後」（1980 年以降に生まれた人々）であり、貧しい中国を知らない青年たちだ。

このチャリティーパーティーの趣旨は、農村の貧しい子供たちにランドセルや食べ物を供給するというボランティア活動である。パーティーの会場に選ばれたのは、市の中心部を離れ、川沿い立ち並ぶ民家の一角にある古びたビル。中に入ると、そこはかつて私が文革中に通った北京の中学校の教室そっくりのたたずまいで、供される食事はホーローの皿やマグカップに入っていた。幹事の青年たちは紅衛兵を思わせる小さな赤いスカーフを首に巻いている。「いまこういう文革スタイルのお店がおしゃれなの」と私を誘ってくれた女性経営者が耳元でささやいた。チャリティーにかけられるのは、普段、家で飲んでいるという１本１０万円の赤ワインやおそらくもらい物であろう古美術の類である。パーティーをぬけて外に出ると道には人だかりができていた。ベンツ、ＢＭＷは珍しくない上海でも、フェラーリ、ロールスロイスといった外車がモーターショーのように並べば、物乞いまで集まっていた。

韓慶愈さんの半生を描いた本書は、日中関係者にとって自分の歩いいてきた道と重ね合わせて様々な史実を確認する優れた著作であるだけでなく、今の豊かな中国しか印象にない人々、あるいは尖閣列島問題に代表されるような常に対立し、反中、反日の日中関係しか知らない人々に、両国の関係がいかに多くの努力と犠牲をともない、
一進一退を重ねながら築きあげられたものであるかを教えてくれる。「ある華僑の戦後日中関係史」で大類善啓さんが描く史実は懐古趣味的な歴史ではない。文革ごっこのパーティーのようなレトロな世界でもない。テレビドラマのように波乱万丈の展開で人を惹きつけようとするものでもない。時代の求めに応じて、時には迷いながらも決断し、間違っていたと反省もしながら、日中両国の間でしっかりと生きて、歴史の一部を造り上げた人間の物語である。また、「何事かをなす」という人は、運命をも味方に引き寄せる「志の力」があるということを深く感じさせられる人生の書でもある。

本書には韓慶愈という人の個人的な経験を超えた日中の歴史が書き込まれている。韓慶愈さんの半生は、時代こそ異なるが、私のこれからの人生の「半生」でありたいと願う。

～１１月２６日の誕生日に上海のオフィスにて～

（あきおか・えいこ：1956 年、東京生まれ。2010 年、上海万博日本産業館事務局長・館長。新聞社の北京特派員の父親とともに小６、中１を北京で過ごす。金融機関勤務を経て、個人事務所を設立。テレビ、ラジオのキャスター、政府審議会委員などを歴任し、現在は東京と上海の両都市に拠点を構え、食品輸出関連のコンサルティングを行っている）

一般社団法人東京華僑総会発行『華僑報』2014年9月15日号より転載

華僑報

2014年
9月15日
星期一
第1861号

新刊

大類善啓著

ある華僑の戦後日中関係史

日中交流のはざまに生きた韓慶愈

大類善啓氏の著書「ある華僑の戦後日中関係史—日中交流のはざまに生きた韓慶愈」が先頃明石書店から出版された。

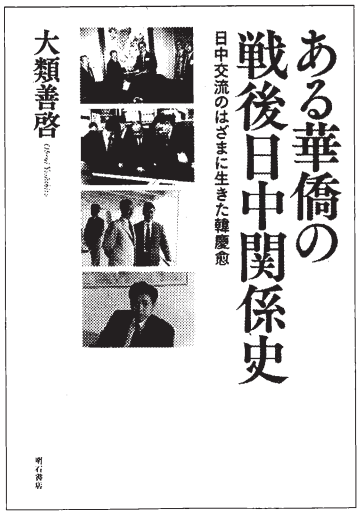
（一社）日中科学技術文化センター理事で、方正友好交流の会事務局長を務める著者は、三十代半ばだった一九七九年八月に、韓慶愈氏が経営する向陽社に入社、以来、韓慶愈氏と接する過程で韓氏の生きざまに興味を持ち、〝戦後の在日華僑史を語る場合、彼の存在抜きに考えることはできないだろう〟との確信から直接韓氏の人生を聞き出すことになったという。

韓慶愈氏はまぎれもなく在日華僑の中で良く知られた愛国華僑の代表的人物です。一九二六年中国東北部の遼寧省に生まれ、一九四三年、十七歳で「満州国留学生」として来日し、茨城県立太田中学校（旧制）に入学、そして日本の敗戦を迎える。以来〝留日七〇年〟を過ごした。

同書は、東京工業大学に学び、帰国船の学生乗船代表として祖国を訪れて廖承志氏と会見し、中文新聞「大地報」を創刊し、青年時代は中国留日同学総会主席を務め、とりわけ中日国交正常化実現までの間、祖国からの多くの訪日代表団の接待、通訳・随行を通じて、その訪日成功のため、中日友好促進のため大きな力を発揮し、その後、「向陽社」を設立、翻訳・出版を手がけ、日中科学技術文化センターを立ちあげて中日間の科学技術交流に貢献してきた韓慶愈氏の生きざまを紹介する中で、韓慶愈氏個人に止まらない戦後の在日華僑の歴史と中日交流史を記録した貴重な資料的価値ある一冊といえる。

同書の解説で加藤千洋氏（同志社大学大学院教授）・元朝日新聞中国総局長）は、「本書は、その後七〇年近く在日華僑として生きてきた韓慶愈氏の曲折に富む人生をタテ糸に、日本と中国の国内情勢、そして日中関係、さらに時々の国際情勢をヨコ糸にして描き出した戦後日中交流史のドキュメントである」と評している。四六判二五二頁、定価二三〇〇円＋税。

なお、韓慶愈氏は東京華僑総会の理事会副議長を歴任、現在常務理事。



東京新聞 2014 年 9 月 30 日付朝刊より転載

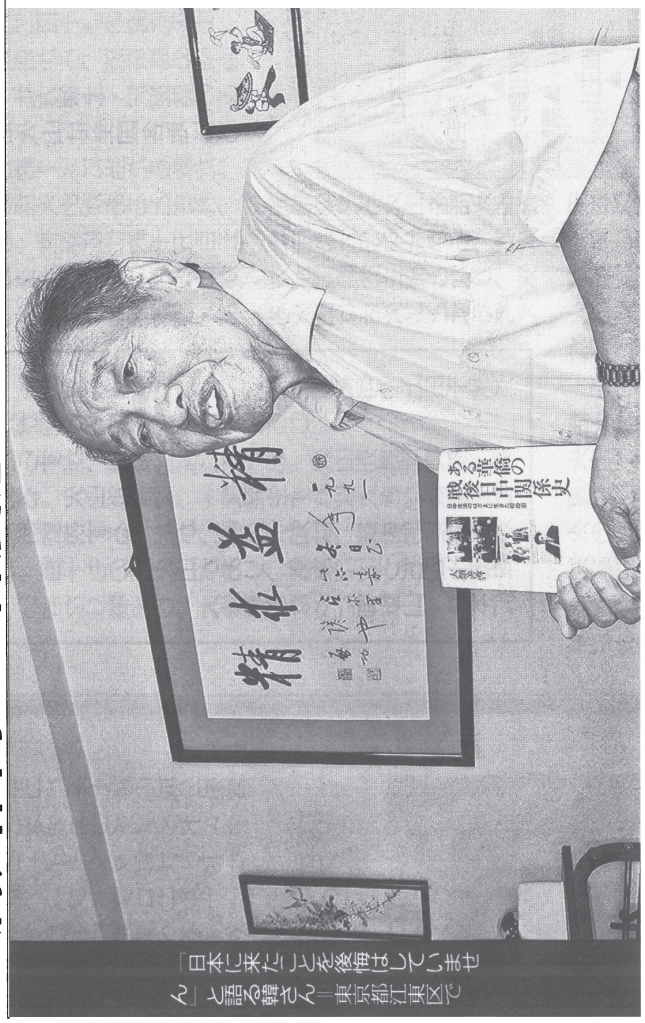
戦前、中国東北部にあった日本の傀儡国家「満州国」から公費留学生として日本に送られ、敗戦後も日本にとどまった華僑、韓慶愈さん(八〇)の波乱に満ちた人生をつづった本「ある華僑の戦後日中関係史」(大類善啓著、明石書店)が出版された。通訳などとして国交正常化や、文化交流など日中関係構築に努力した経緯を聞き書きして、つづっている。著者の大類さんは「日中関係が難しい時期だからこそ、知られざる華僑たちの活動を知ってほしい」と話している。(編集委員・五味洋治)

国交正常化、文化 日中つなぎ続け

旧満州留学生・韓慶愈さん 波乱の人生が本に

著者の大類さん「華僑たちの活動 知って」

帰国逃し 友好に尽力



「日本に来たことを後悔はしていません」と語る韓さん＝東京都江東区で

韓さんは、一九二六年に中国・遼寧省の農村に生まれた。三二年には満州国が建国。四三年、韓さんは公費留学生に選ばれて来日、茨城県立太田中学校(旧制)に入学。「日本人は怖いと聞かされていたが、温かく迎えてもらったんです」

戦争の激化によって四五年にいったん帰国の船に乗ったが、広島に原爆が投下され、ソ連が参戦、日本の敗戦が決まる時期だったため、船は海上をさまよって日本に戻ってしまう。

五三年には再び帰国を決意して、京都・舞鶴港から船で天津港に上陸した。

そこで待っていたのは、当時中国政府で対日工作を担当していた大物政治家の寥承志だった。寥は韓さんに「日本で中国語の新聞を出し、華僑の面倒を見てほしい」と要請する。

韓さんは不本意ながら日本に戻り、日中をつなぐ仕事を始める。

中国から日本を訪問した政治家や作家巴金、京劇俳優として世界的に有名だった梅蘭芳らの通訳を務める一方、会社を起こして日本で大人気だったアニメ『鉄腕アトム』を中国でテレビ放映するなど、日中間の文化交流も手がけた。

その後も、帰国を考えるが、四十歳を過ぎて「もう中国になじめない」と断念した。今は東京都江東区在住。日本滞在は七十年になった。

旧満州からの留学生は約二千人、今も日本に住む人は数人だ。

韓さんは、「中国の指導者は、中国の発展には日本との友好関係が不可欠だと感じていた」と語る。それだけに尖閣諸島をめぐる日中の軋轢には心を痛めている。「共同で資源や観光開発して、友好の象徴にしてほしい」と話した。

文中、寥承志の寥は間違い。正しくは廖である。

公益社団法人日本中国友好協会（会長：加藤紘一）発行『日本と中国』

“日本と中国”を読む

ある華僑の戦後日中関係史

日中交流のはざまに生きた韓慶愈

大類善啓〈著〉

帰国できずに70年 交流に尽くした日々

戦前、17歳で「満州国留学生」として来日し、それから70年が過ぎた今も日本に住み続ける一人の華僑がいる。東京・江東区在住の韓慶愈さん、88歳。その韓さんの波乱に満ちた人生をたどることで見える日中交流史をつづった本『ある華僑の戦後日中関係史』（明石書店）が出版された。著者は、元本紙編集長で方正友好交流の会事務局長の大類善啓さん。大類さんは「戦後の日中交流を考える時、韓さんのような在日華僑がどう生きてきたのかを知ることは、日本の民衆史の側面を補う点からも大いに意味があると思った」と話している。（本紙編集部）

「中日両国民の友好増進を胸に仕事をしてきた」と語る韓さん。東京・江東区で

波乱に満ちた人生が本に

韓さんは1926年に中国東北部の遼寧省で生まれた。「知らぬ間に『満州』という枠組みの中で生活し、成長していった」という少年時代を経て、43年に17歳で公費留学生に選ばれて来日。留学を拒む選択肢はなかったという。

茨城県立太田中学校（旧制）に入学するも、日本の敗戦が濃厚となり、45年8月に帰国の船に乗った。しかし、船上で終戦を迎え、船は日本に引き返してしまう。

「帰れないなら何かを学ぼう」と、韓さんは東京工業大学で建築を学ぶ。その後も帰国の機会をうかがい、53年に華僑帰国船の学生乗船代表として天津港に降り立つも、一行を出迎えた当時中国政府の対日工作を担当していた廖承志氏から思いがけない任務を持ちかけられる。

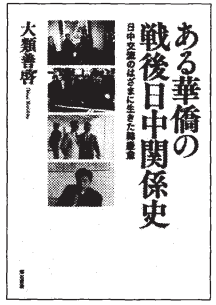
「廖さんから『帰国して何をやるんだ』と聞かれたので『祖国のために働きたい』と答えた。すると廖さんは『それじゃあ、華僑の面倒は誰が見るんだ』と言う」

どう答えてよいか分からず言葉に詰まる韓さんに、廖氏は「君に華僑のために仕事をしてほしい」と頼む。具体的には「日本で中国語の新聞を出してほしい」ということだった。「任務をもらったというよりも、言いつけられたような感じだった」と振り返る。

挫折感を胸に、韓さんは日本へ戻った。大学で学んだ建築学を「中国の社会主義建設に生かし、貢献したい」と思っていた矢先のことだった。それでも、韓さんは思い直して、中文新聞の創刊準備に取りかかり始める。

新聞編集の傍ら、韓さんは日中貿易や通訳・翻訳の仕事などもやった。接待業務を通じて関わった、京劇俳優・梅蘭芳や作家・巴金らとの交流談もまた、貴重な証言として本書に収められている。

著者の大類さんは、こうした異色の経歴を持つ韓さんとかつて仕事を共にした一人。大類さんは「韓さんの人生は多くの日本人にとって知られざる戦中戦後史、秘められた昭和史。日中の長い交流の歴史も、韓さんのような人々の歩みを通して存続してきたのだと思う」と話す。



明石書店
2,300円（税別）

一般社団法人国際善隣協会会報『善隣』2014年11月号より転載

読んでみました

大類善啓著『ある華僑の戦後日中関係史』

石飛　仁（会員）

本書は、歴史に翻弄された残留華僑の苦悩する姿を真摯な筆致で描いた好著である。

２年前、当協会の講演会に、日中戦後交流史の裏方をつとめ続けた本書の主人公、韓慶愈氏をお招きして日中交流史の知られざる逸話を語ってもらった。両国関係を歴史の事実に踏み込んで考えるべき時期にきたという思いがあったからである。

私自身は、戦後ずっと放置されていた４万人の中国人強制連行「花岡事件」（１９４５年７月１日に発生）を追跡調査し、その上で日中共同声明の意義を讃える立場で、加害企業に対して直接、償いを求める交渉を開始していた。（詳しくは小著『花岡事件鹿島交渉の軌跡』彩流社）

謎の多い敗戦直後の日中混線時代の真の姿を捉える観点から、韓慶愈氏が満洲留学生の立場で複雑な戦後処理史に絡んだ事実に注目したのである。

氏は45年８月８日、満洲国政府から帰国船に乗るように命じられ、新潟港から帰国の途に着いた。その船は、本土決戦の補強を担うために日本軍の精鋭暁部隊が軍需機械設備を満洲国に移すための、十艘からなる船団であった。ところが船上でソ連軍の参戦が知らされると、船団は海上を彷徨いはじめる（ノモンハンの体験を持つ日本軍はソ連軍の軍事力を知っており、本来なら一気に手薄な防御の最前線に急行しなければならないのに、この船団は前進を止めてしまった）。

徘徊するまま１週間後の８月15日、船上で日本敗戦が知らされる。周囲は落胆する悲壮な日本人ばかりだから、留学生たちは内心こみ上げる喜びをかみ殺し、下を向くことを申し合わせてその場をやり過ごした。

翌日、船は敦賀港に入り、留学生たちは日本にとめおかれた。敗戦の混乱の中で食料を求めて京都から東京へ、そして盛岡へと移る。そこへ崩壊した満洲国の官吏が救済にやって来て一人ひとりに帰国費用等生活費を渡される。

私が注目したのは、彼がその後、北海道旅行をして、戦時下に「華人労工」として華北から連行されてきた中国人労働者の群れに出会い、収容所のような彼らの飯場を訪ねたことだ。

彼は満洲国留学生華僑として、敗戦直後の日本にあって中国語新聞の記者となり、進駐してきた蒋介石政府の代表部とも接触し、国際軍事法廷（東京裁判）も傍聴し、「花岡事件」の体験者でＢＣ級戦犯（横浜裁判）の証人とし残っていた瞿樹棠とも親交を結ぶ。中国人四万人強制連行（「華人労務者移入政策」閣議決定）の国家犯罪については、当時は戦犯容疑を恐れて極秘にされていたから誰もが知らぬことだったのだ。

対日戦勝国の一員として敗戦国日本に乗り込んできた国民政府の「中国代表部」がきわめて脆弱だった一方で、満洲留学生韓慶愈の戦後奮戦記は、真の日中交流史を把握する上で極めて貴重なものとなっている。

（明石書店・２３００円＋税）

山口淑子のこと

「あの時、関東軍は逃げてしまったんですよね」

大類 善啓

山口淑子がこの９月７日に亡くなった。享年 94 歳、＜李香蘭＞として生きた、文字通り波乱の一生を終えた。各紙の文化欄では、映画評論家や映画記者たちの追悼記事がたくさん出た。映画の記事をずっと書いてきた朝日新聞編集委員の石飛徳樹氏は、「文化記者の最も重要な仕事は、その道の偉人が亡くなった時に過不足なく業績を評価し、歴史の中に位置づけることだと考えている」と書き、「その意味で山口淑子は、文化記者にとって最大の難物だった」と記している。（朝日新聞、2014 年 10 月 26 日付朝刊）

確かに、評価するのは難しい人だったのではないかと思う。日本のメディアは、生前、大して功績のない政治家で、常日頃その人物を批判していても亡くなると、その批判の牙を抜いて、いいことづくめで追悼記事を書くような体質がある。良く言えば、死者に鞭打たないということだが、こういう“日本的な風景”を見せられるのは、好きではない。そこで思い出すのは、「政治は義理と人情だ」というような旧い体質の大野伴睦が死んだ時だった。大宅壮一が「浪花節のように生きた政治家が死んで良かった云々・・・」と得意の毒舌を吐き、小気味よい感じを持ったが、かなり批判されたと思う。

日本と「満洲国」に利用された李香蘭こと山口淑子

山口淑子は「満洲国」の国策映画会社、満洲映画協会の“中国人女優”として、「日満親善」のために利用されて生きてきた。戦後は日本人女優として甦ったが、アジアの一部の中には、経済的に＜台頭する日本＞と歩調を合わせるかのように、テレビ番組のキャスターとして登場してきた山口淑子を「＜大国日本＞の文化的先兵のように見える」と、警鐘を鳴らすむきもあったようだ。

それでも、『戦争と平和と歌』（東京新聞出版局）という山口淑子自身の著作や、四方田犬彦の『李香蘭と原節子』（岩波現代文庫）を読むと、テレビキャスターとしてパレスチナに出向き、アラファト議長から「ジャミーラ」という（美しいという意味らしい）名前をもらい、イスラエルのシオニストらの攻撃にさらされているパレスチナの人々への同情心を強く持っていたことがわかる。四方田は、山口をインタビューした時も、自分のことを「ジャミーラ」と呼んでほしいと語ったことを記している。（朝日新聞、2014 年 9 月 17 日付朝刊）

前出の四方田は、イスラエルに出かけた時、イスラエルという国家を日本の植民地主義者たちによって「建国」された「満洲国」に重ねて視る山口の観察眼の深さに驚いている。

山口淑子は『誰も書かなかったアラブ―“ゲリラの民”の詩と真実』（サンケイ新聞社出版局）でこんなことを書いている。

「『生まれた時からシオニストだった』という現実は、ものごころがついたころに『国』ができて、そこに生きているかぎり、『満州国の国民』だった私の意識と、同じ感じで受けとめていいのかどうか、それはわからない。しかし、『シオニストの生き方には批判がある』と、青年が明るく公言するのを聞いて、私はホッとした。『満州国』で、政策を批判することなどまったく不可能だった経験を持っている私は、その青年の後ろ姿をたのもしいと思った」

こういうことを知ると、やはり彼女の感受性の鋭さがわかる。

自責の念に駆られた山口淑子

山口淑子の一連の著作に目を通すと、満映時代の女優活動について、真摯に問い返しているように見える。戦後何度か訪中し、かつて歌った『夜来香』や『何日君再来』が伝説となって中国の人々の胸の奥に生きていることを知って慰められる。しかし一方、＜李香蘭は本当に許されたのでしょうか＞と自分を問う。

ミュージカル『李香蘭』を観た、作家であり中国の文化相を歴任した王蒙は、『李香蘭』の序曲で『夜来香』の旋律を聞いて「叫び出しそうになった」と書き、あれは「売国奴が歌った歌」と指摘し、「（日本人）山口淑子は無罪釈放でよい。（結婚し、政治家になった）大鷹淑子は貴賓として迎えてよい。だが李香蘭は、徹底的に葬りさらなければならない」と書いた。（『エコノミスト』92 年 11 月 17 号）

中国の民衆の一部はノスタルジックに李香蘭を見ることはあるだろうが、歴史をしっかりと見つめている識者たちは、李香蘭という存在を決して許しているわけではない。

しかし山口淑子自身は、心の深い奥底には＜李香蘭＞に魅せられていたのではなかったか。これはややへそ曲がりの私の推測である。

「私に何かできることはないでしょうか」

ここからは私と山口淑子とのささやかなエピソードである。2005 年 7 月 7 日の夕方である。方正友好交流の会の事務局がある日中科学技術文化センターに電話がかかってきた。「大類さん、山口さんという方からです」と言われた。山口さんって誰だろうと思いながら受話器を取ると、電話の相手は、「新聞を見ました。中国に日本人のお墓があるというのは私も知りませんでした」と驚きの声だった。

私はまだ見ていなかったのだが、その日の読売新聞夕刊の社会面には、＜「日本人も同じ犠牲者」中国側が建立＞という記事が大きく掲載されていたのだった。方正友好交流の会の創立総会にも取材に来てくれた徳毛貴文さんが書いた記事だ。

山口さんと名乗る女性と、公墓建立の経緯などを 10 分ほど話した。彼女は、私も旧満洲にいた、何かできることはないか、と問うのだった。いますぐにでも百万円をカンパしたい、というような調子に私には響いた。会報『星火方正』の創刊号を出すべく準備中で、まだ会の振込み口座も作っていない時期である。

こんなに創立総会の反応がいいなら、もっと早めに口座を作っておくべきだったと思い

ながら、いずれ会報ができますからご送付しますので、住所を教えてくださいと言った。すると彼女は「ちょっと待ってください・・・」と言いつつ、自分の住所が口をついて出てこない。そのうち「貴方、李香蘭って知っています？　」と言いだした。その時、電話の相手が李香蘭こと山口淑子だと気付いた。「あの山口淑子さんですか。よく知っていますよ。藤原作弥さんとの共著『李香蘭、私の半生』も読んでいますよ」と答えた。それからまた 10 分ぐらい山口淑子と話をした。

「あの時、関東軍は逃げてしまったんですよね」

電話を終えて、会の顧問でもある日中科学技術文化センターの理事長・韓慶愈さんに、「今、山口淑子から電話がかかってきましたよ」と言うと、韓さんは「大類さん、彼女に会の会長になってもらったら」と半分冗談か本気か知らないがそう言うのだ。「会長になったら、会も有名になるよ」

確かに、そうだと思いつつ、有名人か虚名人か知らないが、ひとたび誰かを会長に就けると事を進める時、要所要所でお伺いを立てなければいけない。それはしたくないと思っていたので、その話はそのままになっていた。

その後、会報『星火方正』の創刊号を送ったが、山口淑子からは何の反応もなかった。ある日中関係の会合に出たら彼女も来ていたので、終わった後、名刺を出して挨拶したが、とりわけ反応もなく会話もなく、足早に彼女は会場を後にした。その後、二度ほどちゃんと会ってもいいかなと思って自宅に電話をしたが、電話口に出ると決まって「あの時、関東軍は逃げてしまったんですよね」と言うばかりで、話は続かない。

山口淑子について、かつて原稿を書いたことがある人が当時、確認のつもりで彼女に原稿を見せると、「貴方は、この部分をどういうつもりで書いたんですか」と、それは厳しく、追及するような意地悪な言い方だったそうだ。実に不愉快だったという。仮にＡさんとしておこう。旧満州出身で物書きでもあるＡさんは、聞き書きして山口淑子の半生をまとめた藤原作弥さんに同情するかのように、「藤原さんは苦労されたでしょうね」と言うのだった。

Ａさんはその後、山口淑子から依頼されて、ある人を紹介することになったが、両者を紹介し終わると、Ａさんはさっさとその場から立ち去ったという。

私はＡさんに、山口淑子が電話をかけてきた話をし、その後は愛想がない！―そんな話をすると、「彼女は気まぐれなんでしょ」と、Ａさんは吐き捨てるように言うのだった。Ａさんの山口淑子に対する腹立たしい気持ちはなお、収まっていない様子だった。

戦前戦中の映画史だけでなく、旧満州への侵略の歴史的事実を真摯に考えるなら、これからも山口淑子の存在は決して無視できない女優であると思う。

山口淑子の死を知って、ずっと脳裡にあったことを思いつくまま書いた。

（おおるい・よしひろ：本会事務局長）

方正（ほうまさ）日本人公墓が私たちに問いかけるもの

――「方正友好交流の会」へのお誘い――

1945 年の夏、ソ連参戦と続く日本の敗戦は、旧満洲の開拓団の人々を奈落の底に突き落としました。人々は難民、流浪の民と化し、真冬の酷寒にさらされ、飢えと疫病によって多くの人々が方正の地で息絶えました。それから数年後、累々たる白骨の山を見た残留婦人がなんとかして埋葬したいという思いは、県政府から省政府を経て中央へ、そして周恩来総理のもとまでいき、中国政府よって「方正地区日本人公墓」が建立されました。中国ではまだ日本の侵略に対する恨みが衰えていない 1963 年、中国政府は、中国人民同様わが同胞の死も、日本軍国主義の犠牲者だとして手厚く方正に葬ってくれたのです。日本人開拓民たちのおよそ４５００人が祀られているこの公墓は、中国広しといえどもこの方正にあるものだけです。（黒龍江省麻山地区でソ連軍の攻撃に遭い、400 数十名が集団自決した麻山事件の被害者たちの公墓も 1984 年に建立され、この方正の地にあります）

この公墓の存在は、私たちの活動もあり徐々にではありますが、人々に知られるようになりました。民族の憎悪を乗り越えて建立され、中国の人々によって管理維持されている公墓の存在を、更に多くの人々に知ってもらおう。「愛国主義」ではなく、民衆レベルでの国際的な友愛精神を広めていこうと設立したのが「方正友好交流の会」です。当会の前身は１９９３年に設立され、２００５年６月に再発足し、日中友好の原点の地ともいうべき「方正」に光を当てたいと活動しております。

個人会員　一口　１,０００円　　団体・法人会員　一口　１０,０００円

（口数は最低一口、上限はありません）

方正友好交流の会

101－0052　東京都千代田区神田小川町３－６（社）日中科学技術文化センター内

電話　03ー3295ー0411　FAX 03―3295－0400　E-mail：ohrui@jcst.or.jp

郵便振替口座番号　00130―5―426643　加入者名　方正友好交流の会

HP アドレス：http:/www.houmasa.com/

≪報告≫　　　　　　　　　　ありがとうございました

前号の会報 18 号入稿後、2014 年 5 月 1 日以降にカンパをお寄せいただいた方、また新たに会員になられた方々のお名前を以下に記して感謝の意をお伝えします。ありがとうございました。（敬称略、受付けた順に記載しました。2014 年 12 月 1 日現在）

藤原作弥　佐藤すみ江　石田和久　酒井武史　師岡武男　小出公司　山内良子　高橋かよ子　山川梅子　渡辺一枝　高木凉子　田澤仁　駒形好幸　佐藤千栄子　小松征夫　阿久津国秀　大西広　毛利悦子　貞平浩　末広一郎　堀江はつ　坂本健　山田敬三　篠原淳子　下山田誠子　矢吹晋　可児力一郎　柳瀬恒範　城谷稔　大場武男　長谷部照夫　石原健一　齋藤實　遠藤勇　石山れいこ　篠田欽次　平野徹　内野裕美子　杉田春恵　近藤房子　篠原国雄　白西紳一郎　石田武夫　中島紀子　伊原忠・恭子　中井詔太郎　小倉光雄　成田晃一　野澤淑子　馬場永子　小林恒夫　宮原咸太郎　中村静枝　鈴木敏夫　竹中一雄　芹澤昇雄　松島赫子　高橋増江　小玉正憲　網代正孝　加藤重幸　大頂子東仙道開拓団の証を守る会　神田さち子　鵜澤弘　岸陽子　瀧亀久男　矢野光雄　小関光二　永瀬明子　黒岩満喜　新谷陽子　木戸富美江　鈴木幸子　岩永法子　名取敬和　町田忠昭　石井敏夫　貞包稔男　高橋健男　桜井博之　山田弘子　飯牟礼一臣　古賀勇一　高木昴　田井光枝　中村久美子　小畑正子　山極晃　今村隆一　藤村光子　及川康年　上条八郎　伊藤幸枝　千島寛　牧野八郎　小林忠作　木村孝　林郁　野津久夫・喜美子　小林淨子　富田恵子　木村美智子　小柴玲子　南雲英雄　石橋実　今野日出晴　望月迪洋　秋葉二郎　矢部竜夫　出口直子

・・

≪編集後記≫

今号は原稿が集まらないかと心配だったが、思った以上に多くの人たちに寄稿していただいた。たいへんお忙しいところ、皆さんありがとうございました。

さて、原稿を印刷所に入れようと思っていた前夜、当会参与の木村直美さんが亡くなった、と娘の麻由美さんから電話があった。12 月 1 日永眠。享年 80 歳だった。木村さんは当会の前身「方正支援交流の会」からの仲間である。謹んでお悔やみを申し上げます。

木村さんの死もそうだが、このところ、友人知人の訃報が多い。師走が近づくと、喪中の葉書が届く。以前は父親や母親の死を告げるものが多かったが、今年は友人自身だったり奥さんだったりと、極めて身近な人々の死である。死がだんだんと近いところにあると思わずにいられない。

身近な死を思うにつけ、＜死に方＞がなかなか難しいと思うようにもなった。生まれてくる時は、本人自身は知らぬ間に生まれてくる。しかし死は、自分で制御できそうでいてできず、なかなか思うようにはいかない。

戦争、敗戦、引揚げに伴う死。死を見続けることによって、生を考える。自分の死と共に時代の行く末をしっかりと見つめることが大事だと思う。

次号は来年６月発行の予定である。ぜひ原稿をお寄せいただきたい。

≪表紙写真撮影：大類善啓≫

『星火方正～燎原の火は方正から～』（第 19 号）　2014 年 12 月 15 日発行
発行：方正友好交流の会　編集人：大類善啓　Email：ohrui@jcst.or.jp
〒101－0052　東京都千代田区神田小川町３－６　日本分譲住宅会館　４Ｆ
(社)日中科学技術文化センター内　電話：03－3295－0411　FAX：03－3295－0400
郵便振替口座番号　00130－5－426643　加入者名　方正友好交流の会
HP アドレス：http:/www.houmasa.com/